

坊城大納言殿

野宮宰相中将殿

右老紙

右二月八日飛鳥井殿(雜典)より以封中申来、

二月七日武伝被達

先達而八幡山崎辺台場新築之儀被 仰付置候処、造作之  
場所得失衆議難決候間、今度台場之儀は被止候、万一非  
常之節は、御警衛人数速差登候様、兼而手配可致置、更  
御沙汰候事、

二月

右同断

攘夷御一決御内定之上は、持場近辺江夷船致渡来候得は、  
時宜ニ寄御差図無之内ニ而も、早々人数差出可申、若夷  
人不作法之儀有之候得は、成丈手真似を以申論シ候得共、  
承引不仕候節は、臨時之取計茂可仕候間、大坂表御役人  
中江御差図可被成下候、此段御届申上候、以上、

二月

(池田騷擾)  
松平相模守

御付札

書面之趣は承置候、尤其筋へ相達候、

二月八日夜列参ニ而被指出候書付

微臣之輩不顧万死建言仕候趣意、旧冬幕府江垂 命之後、  
於幕府茂攘夷之策略可相廻、当春上京除旧弊布新政、尊  
攘之方略有之候由承及候付而は、近々幕府上京ト存候、  
万一幕府因循之説ヲ言上仕候節、臨其期

廷議是ニ御雷同有之候而は、方今諸藩輻輳勤王之志一定  
致シ候者共、彼是狐疑異論等紛興茂難計、深憂仕候間、  
何卒唯今之内於

朝廷攘夷緩急之御基本ハ勿論、庶政確乎と明正之御所置  
被相定、下情不擁塞達 叡聞、万事隱微之義無之、着実  
明白ニ有之候様仕度存候、乍恐唯今之姿ニ而は、因循之  
御弊風悉被相除候と申義ニモ不被為在哉と、疑惑仕候輩  
モ有之候間、自然人心瓦解致シ候而は、実ニ御一大事之  
義ト存候間、従来之御弊風ヲ御一洗不被遊候而は、  
皇国犬羊蹂躪之街ト可相成、悲歎至極御座候、意有之者

可言上、兼被仰出候儀ニ付、不願恐言上仕候、何卒早々、朝議御評決之義相何度存候事、

二月八日

実徳 季知 実麗 随資

実在 基敬 公董 公知

基修 隆詞 頼徳 宜嘉

推参 忠光

土佐前侍従

来十六日巳之刻参

内被 仰出候、此段宜御申上頼入存候也、

二月九日

胤保

青——

諸大夫中

右同九日議奏中より申来、

二月八日於学習院兩役受取、

以 勅使被 仰下候儀、猶其方ニも厚周旋可有之旨被

仰含候趣、委細奉畏候、素攘夷拒絕之儀は兼而御請申上候ニ付而は、聊因循遲滞可致筭無之候、尤策略は武臣之職掌ニ付、何れ諸藩衆議之上、早々及拒絕之談判候様可致旨、奏聞可有之候、

右同日阿野殿参上ニ而、三条殿より被差上候旨、今般三河守儀不存寄奉蒙

勅諭冥加至極難有仕合奉存候、然ル処、小身微力追年困窮罷在候付、如何様尽力仕候而も、為國家ニ相成候程之

仕方ハ、迎茂行届候儀ニ無御座候、誠以表寸志候迄ニ而奉恐入候得共、洛中非常為手当加茂川筋ニ而出地相撰、

土蔵取建蓄穀仕置度、且又淀川船之儀は、公武相始メ

諸邦人民之往返、諸物運送專要之ものに御座候処、船數ニ定數有之候ニ付、近来別而国家用便差支候間、三河守

手組新造右用便之補助ニ相成候様仕度、此段上京之上奉内願度所存ニ御座候間、前以私より御内慮相窺、御許容

ニ可相成趣之御沙汰ニも御座候得は、蓄穀千石積之土蔵并淀川船三十艘出来方之儀、急速手配致置、尚兩条とも

追々増方之儀尽力仕候様申聞候間、右之段内々奉窺候、以上、

二月

黒田彦四郎

右二月十日議奏加勢日野殿より言上、

(資宗)

越前前中将

明後十二日巳刻参 内被 仰出候、此段申上候、宜御披露頼入候也、

二月十日

(資宗)

青――

諸大夫中

攘夷拒絶之儀は、大樹公上洛相濟、江戸表江帰着後、速ニ可及応接事、

先頃申上置候有志之者共御所置之儀、早々被 仰出候様、此度猶又相願候事、

二月九日

慶喜

慶永

右鷹司殿江一橋黄門・越前春嶽・松平肥後守・松平相模

守・松平容堂等参上ニ而、演舌書右殿下より御廻シ相成候事、

二月十一日夜、関白殿御成ニ而、隨身一橋被遣候名前、

三条中納言

(実美)

野宮宰相中将

(定功)

阿野宰相中将

(公誠)

橋本宰相中将

(実美)

豊岡大藏卿

(隆寛)

滋野井中将

(実在)

正親町少将

(公意)

姉小路少将

(公知)

越前前中将

明日参 内延引、来十六日辰半刻参 内被 仰出候、此旨御申入頼入候也、

二月十一日

(六条) 有容

青――

諸大夫中

追而明日参 内延引之子細は、明日阿野宰相中将参上可申上候、是又宜頼入候也、

入道前関白・入道前内大臣・千種入道・岩倉入道・富小

(九条尚忠)

(久我建通)

(有文)

(具視)

路入道等、自今猶又嚴重深可謹慎被 仰出候ニ付、

九条大納言(道孝) 富小路二位(致直) 岩倉三位(具慶)

三位中將(久我通久) 千種侍從(有任) 岩倉大夫(具綱)

右進退被伺候、此段申上候、宜御披露頼入候也、

二月十三日 胤保(広橋)

青——

諸太夫中

二月十四日議奏広幡殿より被申上、

尾張前大納言(徳川慶勝)

一橋中納言(徳川慶喜)

右来十六日辰半刻参 内被 仰出候、此段可被申上頼存

候也、

二月十四日 忠礼(広橋)

青——

諸太夫中

二月十四日広幡殿より被申上、

大樹公上洛滞在日數十ヶ日ト御治定相成候間、二月廿一

日出帆より海上往反風波之障等無御座候得は、四月中旬之内、攘夷之期限ト相成申候、尤帰着より廿日御猶予被下度儀は、先夜も奉申上候通之儀ニ而、右之日積ニ相成候事、

二月十四日

山内豊信(山内豊信)

松平肥後守(容保)

松平春嶽(慶応)

一橋中納言(徳川慶喜)

三条中納言殿(実美)

橋本宰相中将殿(軍蔵)

野宮宰相中将殿(定功)

阿野宰相中将殿(公越)

豊岡大藏卿殿(隨實)

滋野井中将殿(実色)

正親町少将殿(公憲)

姉小路少将殿(公勉)

朶雲披見仕候、愈御勇健珍重奉存候、陳は大樹公滞京日

數十ケ日之御治定之儀、一昨夜被

仰出候処、即時御答ニ不及候ニ付、今午刻迄ニ言上可致旨、且今日御入来申入候得共、不能其儀之段致承知候、右御答差上方春嶽江茂申談、各方御連座ニ而被達候儀、使を以差出候は失敬ニ相当候間、今日御入来申入候事ニ候得とも、御急之旨無抛次第ニ付、直様書面差出申候、御落手可被下候、然ル上は御面談可申儀無之候間、別段御入来は不及候、此段御酌取可給候、以上、

即時

(徳川慶喜)  
一橋中納言

坊城大納言殿

野宮宰相中將殿

別紙今朝武伝より申遣候一橋返書入御覽候、此段宜可有披露也、

二月十四日

(広幡)  
忠礼

青――

諸大夫中

二月十五日從寄人議奏迄被差出旨三条殿持參、皇国之

御為以前より一身投し、脱藩いたし居候有志之輩、夫々御賞之上各藩主人々々江即返候様と之事、尤之儀ニハ候得共、攘夷之儀ニ付而は、一身自在ニ可致周旋存込候輩ニ可有之、却而氣合ニ相拘り、厚キ御趣意ニ振レ候様之儀出来候而は不宜候間、難被及 御沙汰候哉と被 仰出可然存候事、

攝家中上言

神宮御警衛之儀嚴重ニ被遊候ニ付而ハ、親王大臣之内、參向・滞留・守衛事、謹敬承候得共、何分軍事策略等之儀、且武門応接迎も難及力、併親王之儀ハ御請之人茂可有之哉、忠香始之処ニ而は、如何様蒙 仰候共不及身事候間、差掛候処は大中納言之中ニ而茂被撰、御当用可然哉存候事、

親兵之儀は、既守護職被置有之候得共、重大之御時節ニ候間、尾州前大納言・島津三郎兩人へも被 仰付候ハ、禁闕格別ニ御安心候、乍恐存上候事、猶衆議之上、可有聖断候事、 且租税之儀は御尤ニ存候事、

(二冬) 忠香

(二冬) 齊敬

(二冬) 公純

(二冬) 忠房

(二冬) 実良

両役

神宮御警衛之事、親王大臣参向急速難被行候は、大

中納言之内可然存候事、尾張・桑名江茂御沙汰可然存

候事、

御親兵之儀相願候、六府或瀧口等被准古制、禁中御

守衛と被遊候条、可然存候事、

一外衛之儀以大藩可被 仰付候事、

一租税之儀尤可被 召候事、

割付之事一橋江御相談可然候事、

参政上言

一神宮御警衛親王丞相下向之儀熟考仕候処、御尊崇至当  
之儀ニハ被為在候得共、官方御遙任ニテ御下向無之、

上卿祭主等時勢不容易ニ候間、下向被仰付可然哉、親

王方御遙任方後難有之間敷ト存候、

(補本) 実麗

(豊岡) 随資

(東久世) 通福

(姉小島) 公知

一親王租税之事、

天下之税百分二 二十万ヲ朝廷ニ被充、三十万ヲ六衛

府瀧口内舍人ニ被充可然、攘夷ニ付而ハ国力養培專一

候得共、サスカ六十余州百部ノ二ヲ被召候而も痛ニ相

成申間敷と存候、

実麗

一親兵租税之事、先天下ノ税ヲ三千万石ト立、其百部一

卅万石ヲ被召、其内十万石ハ従来御手薄ノ角ニ被充、

十万ハ六衛瀧口内舍人忠勇ノ者被充、十万石ハ義倉ニ

被充可然哉、

随資

通禮

公知

一親兵之名目不被仰出、租税計ヲ被召候ハ、御実用相立可申哉、

公知

国事掛上言

被尋下候攘夷御一決ニ付、神宮江被告申旁、御警衛之

総管として親王大臣之内ヲ以可被差進之事、方今国家重

大事之御評議等も可被為在御時節、大臣を以被差進候儀、

如何可有之哉ト存候間、中務卿親王父子之内被 仰出、

尚又 神宮上卿祭主等ヲモ同様被差進、暫滞在被 仰出、

至当之御儀ニ可有之、且又御警衛人体、是迄藤堂和泉守

承居候得共、今一廉御手厚ク尾張大納言江被 仰出可然

儀ト存上、

御親兵之事御親兵と被 仰出候而も、事々差響候儀も可

有之ニ付、 禁内為御警衛六府内舍人滝口等増員被 仰

出、方今尊攘至誠之有志、或ハ勤王之故を以脱藩、京師

ニ滞留之徒数多有之由及承候間、右有志之者共御精撰有

之、六府等員数ニ被加増、糧米俸禄等之儀は、御沙汰之

如く諸国之租税早々被 仰出、被充行可然、且又諸藩御

警衛之儀は、一年或は半年之限を以京替被相定、大小藩

通計五六藩、又ハ七八藩必滞京被 仰出可然哉、右様相

成候得は、会津守護職之如き趣意も相立、親兵ト不申、

御親兵に相当り 宮城之御守衛敵重ニ被行、京師内外御

警衛之筋屹度相立可申儀ト存上候事、

二月廿二日

(三条西) 季知

(庭田) 重胤

(六条) 有容

(御原) 光愛

(河越) 公述

(橋本実業カ) 実果

神宮御警衛之事、三条西中納言以下被申上候通、愚存無  
之候事、

御親兵之事、親之字、禁之字ニ御改正ニテハ如何被為在候哉、右仕法は高禄精忠之諸藩へ被 仰付、人数為差登、每藩父子之中上京指揮仕候而ハ如何被為在候哉、諸藩半年或一年交替之事、捧禄は從國々租稅獻納ニテ被充下之事、復古制当然之儀、何共恐入申上兼候得共、無腹藏言上仕候、上京武士ハ天禄拝領、妻子ハ藩主之禄ニテ養候テハ一樣ニ不相成、矢張御雇之容ニ可相成候間、衣食調度從藩主可相渡方御都合欵ト奉存上候事、

租稅之事御親兵計ニ貢獻ニテハ如何ニモ被為在候哉、且又以養御親兵為名目、租稅貢獻被 仰出候様ニ相聞候テハ、即今富國疆兵之御時勢ニ違、御一大事ニ候、不願恐怖申上候事、

(勘解由小路) 資生上

御親兵之事、別封愚白申上候、併人々申上候通、復古制、近衛門部兵衛内舍人瀧口等忠勇之士被補候儀、誠以名分改正正議ニ候間、此議 御登用被為在候ハ、愚考申上候如く、只今學習院雜掌稻波、國學者谷森(普臣)など文芸之輩

被補、内舍人之儀自今御改正、於武官は上下共武才者被任候様ニ不相成候而ハ、指揮号令も難被行候、是迄之通ニ而文学武芸打交候而ハ、名分被正トハ難申候間、自今堂上地下一同、望武芸之輩可講武、只今被任候大將以下武官人々は、必武芸可練磨、早々被 仰出度候、但不望武芸之輩可被任他官之事、

唯近衛以下義勇之士被召補候義ニテハ、名不正、言不行ト奉存上候事、

右俸禄は

惣計 何人

一人分何石

惣計 何石

從關東為差出、從禁中御藏本人江被下候方可然哉と奉存上候事、武官は武才之者可被任義当然ニ候、併浮浪之士為

皇國攘夷軍功相望候輩ト存候間、各御親兵ニ被補候得は、輩下之警衛ニテ攘夷先鋒難致失本意候人も可有之哉、御



深察奉願候事、

資生上

寄人上言

御親兵布置言上仕候

一御親兵ハ是非不被置候而ハ不相成儀ハ、方今之御時勢申迄も無之儀ニ有之候、自然幕府より彼是申出候共、渠ニも旗本之土有之候間、朝廷御親兵之儀承伏不仕候ハ、渠之旗本も以來廃絶致し可然存候、

一御親兵貢土之事

右は普天之下率土之浜王臣王土ニ非ルハ無キ訳故、外様普代ノ弁別ナク、各々

皇国ノ土地ヲ預リ居候者共故、譬へハ大藩ハ五人、小藩ハ一人ト申様之割ニ而、其他是ニ准し、武勇卓絶忠誠ノ士ヲ貢献致サセ、所謂什伍ノ法ヲ以テ、隊長ヲ置キ、是ヲ十隊或ハ二十隊トシ、各左右兵衛衛門ノ尉ナト相授ケ、真実

朝廷ノ御旗本ト致シ、是ヲ統括スルハ人才ヲ御撰擢有之度、尤統括ノ任ハ、紳縉ノ輩ニ可有之候得共、何分數百年來武事ヲ度外ニ置候者共、俄ニ強悍ノ徒ヲ御シ候事、甚以難キ事ニ候得とも、先号令ヲ蔽明ニ致シ、約束不隨輩ハ、急度敵科ニ被行候權ヲ赦シ置カレ、弓馬鎗刀之技ヨリ進退驅馳之節ニ至ル迄、惣テ教師ヲ被立置、毎月三度計惟ノ辻ト申様ノ場所ニ而驅馳為致、進退周旋烏合ノ風習無之様練熟致サセ、隔月位ニハ演武場ニ而晴ノ試合為致、乍恐時々

叡覽も有之候様仕度、譬ハ御花鳥ノ如キ空地ニ長屋ヲ拵へ、是ニ貢土ヲ平常住居為致置、非常之節は此屋相通し、速ニ

皇居馳參り候様致置、其節は各隊長之目印有之候旗ノ類ヲ持來、隊長ノ下知ニ隨ヒ周旋可有之、隊長江之命令ハ総括より致下知候と申様ニ致し置候得ハ、多々益々弁スル訳ニ而有之候、平時小調練ハ右長屋ノ傍ノ空地ニ而、鳥銃并弓馬等日々練熟致し、堂上其外所望ノ

輩は出席、稽古等随意有之候様致置度存候、若貢士ノ内闕ニ相成候ハ、本藩より又々可貢、其外草莽之士ト雖、実々御用ニ相立候者ハ被召出可然哉、尤御親兵之職掌ハ鳳闕ヲ守衛仕候事、専務ニ仰付可然存候、

一右親兵被差置候而は、兵食欠乏ニ而は難相成候間、是も前条ニ相准し、凡千石ニ一石ツ、万石以上之藩士江不残被仰付、高割ヲ以現米相納候様為致候ハ、

食料ハ不之と存候、随而器械之類惣而是ニ准シ、

皇国ノ地ヲ預リ居候大小藩ノ者共江不残何ノ器械ト申弁利なく兵器献納為致候ハ、左ノミ諸藩ノ迷惑ニ相成候事も無之、且

朝廷ニ而右物件無用之器具ニ被遊候と申儀ニ而も無之候間、彼是申出候者ハ無之儀と存候、

御親兵統括布置ノ迂説、荒々見込申上候事、

(正親町) 実徳

(正親町) 公董

(至先) 基修

(中山) 忠光  
(四巻) 隆詞  
(錦小巻) 頼徳  
(沢) 宣嘉

(本文書ニ比シ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二巻第六五  
四号文書ハ最初ノ一部ヲ欠ク)

冊子原寸 縦二八・八糎 横二〇・七糎 三一枚

久光公士道振興ノ諭書

家老ノ副書

共二通

四七六ノ一

文久三年亥二月朔日

御筆御条目写

条々

- 一 詩歌諸游技専ニ相嗜、士ニ不似合所業有之間敷事、
- 一 一応知行高、軍役人数且兵器糧食之不足有之間敷事、
- 一 衣食住、奢侈無用之事、

一組合中、長病或死去之者候は同伍より早速物主江可申

出事、

一什伍之組合互ニ可和睦事、

右之趣、堅固可相守之者也、

文久二年壬戌十月 御名乘御判

文書原寸 縦一六・七種 横二八・二種

四七六ノ二

御添書

御軍役付平常

御沙汰之趣、御別紙之通

御筆を以被 仰出候条一統謹而可奉承知候、右付而は当

今士風一涯致振起、文武之励は勿論之事ニ而衣食住之儀、

弥費用を省ぎ、質素・節儉を相守、兵器糧食夫々分限相

応致用意、急場之御用無滞可相勤、就中、組合中は和睦

信義を専ニ相心得、聊疎意無之

御条目之趣、堅固可相守候、

右之通、可奉承知候、

二月

筑後

大蔵

但馬

式部

文書原寸 縦一六・八種 横三一・六種

本田 弥右衛門ヨリ中山中左衛門へ

中川宮還俗及知恩院借用ノ件

〔端裏朱書〕  
「癸亥二月二日

京 本田」

一筆致啓上候、春暖之節御座候処、弥御安寧被成御座、

恐慶奉存候、先度より度々

御書翰被成下忝奉存候、私ニも無異日勤仕候間、乍憚

御放意可被下候、乍恐

御而股様、益御機嫌能被遊御座、恐悦御同然奉存候、爰

許

近衛兩御所様、益御機嫌能、

〔近衛忠輝〕  
前関白様去ル廿三日

御願之通 御当職御辞退、内覽隨身兵杖(マ)如旧被

仰出、恐悦奉存上候、

鷹司(輔照)前右府公闕白御受、同日被為在、廿四日御拜賀と申

候、青蓮院宮様御事、去ル廿八日御還俗左之通、御内意

被為蒙 仰候、

方今国事扶助精勤、御満足被

思食候、依之以非常格別之

叡慮還俗之儀

御内意被

仰出候事、

亥正月廿八日

右御受、昨二月朔日被

仰上候、誠以御互ニ為天下恐悦此事ニ奉存候、

一知恩院御借用之事、去ル廿五日御受申出、翌日より

見分等江差越、則諸事御手当向之儀共申付候事ニ而日

々右江も御用意向取掛居申候、御安心可被下候、毎度

右之趣御掛合相成、万一故障付候而はと存心配いたし

居候得共別条之仕合、先安堵いたし申候、右御問合之

御返事申越度、如是御座候、敬白

二月二日

京都

本(親雄)田弥右衛門

中山中左衛門様

追而、最早此沓封も問ニ逢兼、御出立後欵とも存候  
得共、町便より申進候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一四号文  
書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・四糎 横一〇〇・四糎

四六 山本友輔ヨリ迫田甚蔵へ

長崎ニテ生麦一件ニ付和蘭「ゼネラル」

ヨリノ聞書 外三通(重複)共四通

(封紙ウツ書)  
一 迫田甚蔵様

山本友輔

ノ

」

四七八ノ一

今朝ハ早々之至存候、然ハ英国模様為相糺候処、未タ疑ト之説も無之候へ共、今日和蘭セネラール御役所江罷出、少々右之話有之、軍艦拾艘程江戸表江罷越候旨、右之内当港よりも既ニ三四艘江戸江向、出帆仕候、是ハ実説ニ有之候、尤其外仏コモトル乗込之軍艦も三四艘江戸江參候由、全く昨年殺傷之談話と申事ニ候、左候得ハ直ニ薩州其外江參候義は有之間敷、いつれ江戸御応接之次第ニ寄り、何と欵其上相成候事と存候、此段不取敢申進候、委細は御面話之上可申述候、何も差急キ乱筆御用捨可給候、以上、

二月五日

文書原寸 縦一六・一糎 横五九糎

四七八ノ二

英国より軍艦を差向ケ候哉之風聞有之候ニ付、実否之処承り度、和蘭陸軍第一等医官ポートイン江相尋申候処、  
同人之否左之通御座候、

一四週前より左様之風聞承候へ共、是ハ全く虚説ニ而取

ニ不足事ニ御座候、

一此節、横浜江英国軍艦十一艘参り申候、是ハ何故ニ御座候哉存し不申候、若し存知之人も有之候ハ、承会可申候へ共、是ハ急度存知之人崎陽滞留中ニハ無之候、色々申唱候共却而皆虚説ト被存申候、

一軍艦を直ニ薩摩江向ケ候儀ハ決而有之間敷被存申候、其故ハ英国ミニストル未タ江戸ニ参着不相成候筈、左候へハミニストル参着之上ニ而政府ト談判有之、ホルツニンフ相手ヲ出し又ハ金子ニ而も出し候類之事之由を望ミ可申候、左候而薩摩よりホルツニンフを御断り相成申候へハ不得止事、軍艦ニ而も差向可申候、乍併夫ニ而も急ニ軍ニハ相成不申候、段々手間取候筈ニ御座候、何分英国も不好事ニ御座候、当分商法之利大ナル者ニ御座候間、可成丈ハ大平を望ミ居申候故、急ニハ軍ニハ相成不申候、乍然ホルツニンフ無之候へハ不得止事、軍艦ニ而も向ケ可申候、

一私之愚案ニハ英国よりホルツニンフ之有之迄之間、琉

球島を相預り可申との談判共否候哉と奉存候、左様共  
有之候ハ、面倒之事ト奉存候、近々新聞紙も可參候  
間、早速御見セ可申、且又承存候事も有之候ハ、早  
速為御知可申候、

右之通り承り申候間、其形書認差上申上候、以上、

八木称平

二月六日

四七八ノ三

今朝承知仕候一条、早速当所掛り蘭通詞川原又兵衛江致  
面会程能承合候処、今朝既ニ蘭人レーミト申ス者当所役  
所江參り相話候ニハ、今般江戸御殿山焼亡ト生麦一条之  
儀ニ付当所長崎并ニ箱館江致入津居候英・仏・愕(鄂)・米・  
蘭五ヶ国之軍艦不殘横浜江致会合、江戸海江乗入、是非  
共 公方様江奉得対顔心接之上、直様御国許之様乘(廻)迫し  
候筋ニ迫達有之、当分当所入港、右五ヶ国之軍艦も明後  
七日、一同ニ当港致出帆候筈之由、相嘶候由、左候而

將軍家若も御上洛後ニ相成居候ハ、直様大坂港江乗入  
心接之上御国許江罷越候含之由も相咄候由、乍然右川原  
咄ニハ江戸ニ而心接有之候ハ、御国許之様乘(廻)迫し候処  
ハ幕府ニ而何ト欵御申取、是非共御差留相成、一往ハ猶  
予も可仕義共相考候へ共、何れ之筋、生麦一条、明白  
御所置無之候而ハ、詰ル処ハ一大事ニ相及可申被存候  
段も相咄し申候、尤今朝拙夫当所江致渡海候、即和蘭軍  
艦ハ二艘共石炭等積入、頻リニ舟仕舞仕候体ニ相見得居  
申候、

右件々疾ニ委細御聞取之筈ト奉存候へ共、承存候成行  
申上候、猶外方江も手を付置申候間、返答次第、今晚  
より明朝ニ掛ケ参上、御直ニ可申候、

亥二月五日

中原猶介

四七八ノ四

前文略ス

米利幹人ウエルヘツキ江今般之形勢承合候処、同人之

答ニ成程、拙者も人伝ニ承得候のみニ而弥慥成事ハ存  
知不申候、ケ様之事ハ要路之役人共より外は容易ニ不  
相示法ニ候ヘハ実正之事ハ分り兼候ヘ共、世上之取沙  
汰ハ専ら承り候、

問テ曰、重モニ何様之応接ニ差越候由ニ被聞及候哉、

答テ曰、しかトハ存し不申候得共、其節致切害候人を  
戒メニ罷越し申候半、

又問テ曰、相手相知不申候ハ、何様之首尾ニ可相成被  
存候哉、

暫時猶予し、微笑シテ曰、大方金を御ねたり申上まし

よふ、

右親敷御覽之処ニ而和語<sup>(ニ脱カ)</sup>而之通弁故、応接之俣相認置

申候、

四七八ノ五

亥二月七日、於旅宿和蘭人ボートメーストル、レー

マン、右同インギニユールレーミ江質問之覚荒増

一一通之挨拶四方山之咄終テ問テ曰、近日、当所之<sup>(巻カ)</sup>倦説  
ニ英吉利国昨春神名川生麦一条之事を憤リテ軍艦数艘  
を卒ひテ横浜江致会合、江戸江罷越、応接之上我カ薩  
国江軍艦を差向ケ候取沙汰有之、勿論先日より各国之  
軍艦追々ニ横浜江向致出帆、既ニ貴国之軍艦も式艘共  
今日同所を指而出帆之由を聞けり、然る時ハ於我等も  
実以心配之至ニ候、不苦ハ其情実を聞ん、

レーミ答テ曰、既ニ其事ありと雖共、於私共も弥其  
実事を存し不申候、然ル所以ハ西洋各国之法ニ於て  
ケ程之大事を挙ル時ハミニストル官老人のみ知テ、  
決テ士卒江知らしめざる事也、若哉又ミニストル之  
次官迄ハ告示而も又其次官江は不示事も有之候間、  
弥実正之事ハ相分り申間敷候、乍然此節之儀は中々  
容易之事ニ而ハ有之間敷被存申候、已ニ生麦騒動後、  
近々本国江成行申遣候而於本国評義之上本国ミニス  
トルより清国香港ミニストル江申遣し候由ニハ  
日本横浜ミニストル江生麦一条等之返答申遣し候間

清国諸所碇泊之軍艦數艘を以而、早々横浜江送届候様申達し候由、夫故清国上海・香港等より英国之軍艦近々八艘、尤此說異論紛々十艘又横浜江罷越候内二艘ハ六艘之說も有之候ハ既ニ先日当港江立寄り兩日致滞留候而直様同所江致出帆候間、右之一条ニ付横浜江致会合候儀ハ相違有之間鋪候、

一又問テ曰、然ルトキハ其方達之了簡ニ於テ此節之首尾如何様ニ相成見留之処も有之候ハ、承度候、

一兩人共々ニ答テ曰、江戸之応接明白ニ無御座候ヘハ直様御国江参り応接可仕被存申候、乍然鉄砲ニ而も打立候様之事ハ容易ニ任り申間鋪候ヘ共、御国之思召如何可有之候哉、直様御打払之思召共ニ而ハ有之間鋪哉ト被存申候、

一又問テ曰、弊国ニ於て乍此上決而粗暴之取扱いたし候儀ハ有之間敷哉、已ニ此内より折々相咄候通り生麦之一条不凶致し候事より起り候事ニ而致切害候者逃去候ニ付而事面働ニ罷成、唯今ニ至而精々探索中ニ候間、

尋出し候ハ、直様指出し可申候ヘ共、若哉当人行衛相知不申候ハ、何様之首尾可相成被存申候哉、

答テ曰、事之勢を以而相考申候ニ、相手御指出し不相成候ハ、金子御ねたり申候欤、又ハ相手相知候迄琉球国御預り申置度儀共申出テハ致ス間敷哉と存申候、

一暫時余事を談し、又問テ曰、魯西亜之軍艦三艘、昨日当港致出帆横浜江指越候、外ニ米利幹之軍艦三艘、フランス軍艦三艘、貴国之軍艦式艘も今日致出帆、同所江差越申候由承得候、右生麦之事のミニ候ヘハ余国は關係有之間敷候処、右四ヶ国之同様致会合候ハ何様之訳ニ候哉、

答テ曰、是ハ此内江戸御殿山焼亡一条ニ付各国談合之訳も有之、殊ニ今般英吉利、江戸之応接中々容易之事ニ而無之候間、右情態形勢等見置候為ニ差越候由ニ御座候、

右親敷御見聞之事ニ候ヘ共、猶又御心得ニ茂可罷成哉



右認差上申候、右昼七ツ半過より夜四ツ半頃迄談話中  
之質問也、  
通弁 川原又兵衛

文書原寸 縦一七・八糎 横三五・一・六糎

四九 生麦一件ニ付長崎ニテ蘭人及米人ヨリ中

原某ノ聞書

三通

四七九ノ一

同文書ハ四七八ノ三号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦一四・四糎 横二三糎

四七九ノ二

(端裏書)  
二月六日 中原

亥二月六日、米利幹人ウエルベツキ方江御同道仕候

節質問之覚

一通之挨拶竟而其方は横浜ニも被參候事有之候哉、

同人答テ曰、未參リ不申候得共、拙者一緒ニネヲヨ

ロリより同船ニ而同時ニ參リ候者兩三人に今横浜江

致滞留候間、折々成行申遣候而様子ハ委細承及申候、

一又曰、拙者も近頃迄横浜江罷居米人江は極々懇意申居  
候者有之、何某々々能々存居候段相咄候処、

同人相咄候ニハ御咄有之候内、セメンツ・ヘボント

申候者ハ丁度拙者一緒ニ致同船罷越者ニ而至極懇意

者ニ御座候、以来は爰元ニ而御心易ナト可罷成候間

同人共江も右成行可申遣由ニ而拙者名前等承り、即

書記し申候而又彼方より相尋候ニは然は昨春中、神

名川生麦ニ而間違有之候節も御滞留ニ而有之候哉、

答テ曰、其節前日迄ハ彼表江罷在候へ共、丁度其前晚江

戸江罷帰居申候、

彼曰、然は其節之形行委細御存知可有之と段相尋候、

答テ曰、成程能々致存知候、其節之一件不図も致し候事

より事六ヶ數罷成、既ニ先日より英・仏・米・鄂・蘭之

軍艦追々横浜江致会合、其節之一件何欵六ヶ數申立候含

ミ哉ニ取沙汰有之、拙者共ニも心配致候事ニ御座候、自

ら委細承知之筈ト被存候段相咄候処、

同人答テ曰、成程拙者も人伝ニ承得候のみニ而弥慥

成事ハ存知不申候、ケ様之事ハ要路之役人共より外

ハ容易ニ不相示法ニ候ヘハ、実正之事ハ分り兼候ヘ

共、取沙汰ハ専ら有之候、

問テ曰、重モニ何様之応接ニ差越候由ニ被聞及候哉、

答テ曰、しかトハ存し不申候得共、其節致切害候人

を戒メニ罷越し申候半、

又問テ曰、相手相知不申候ハ、何様之首尾ニ可相成被

存候哉、

暫時猶予し、微笑シテ曰、大方金を御ねたり申上ケ

ましょふ、

右米人ウエルベツキ和語能々相解候間、御覽之通直応

接之通り書認置申候、

文書原寸 縦一七・八糎 横八九・九糎

四七九ノ三

〔附書〕(朱)  
「一突亥 英国一件」

二月七日 中原

亥二月七日、小子於旅宿和蘭人ボートメーストル・

レーマン、右同インギニール・レーミ江質問之

荒増覚

一一通り之挨拶四方山之咄終而、問テ曰、近日当所之倦(巻之)

説ニ英吉利国昨春神名川生麦一条之事を憤りて軍艦數

艘を卒ひて横濱江致会合、江戸江罷越、応接之上我か

薩国江軍艦を差向ケ候取沙汰有之、勿論先日より各国

之軍艦追々ニ横濱江向而致出帆、既ニ貴国之軍艦も忒

艘共、今日同所を指て出帆之由を聞けり、然る時ハ於

我等茂実以心配之至ニ候、不苦は其情実聞ん、

レーミ

答テ曰、既ニ其事ありと雖共、於私共も弥其实事を

存し不申候、然る所以ハ西洋各国之法ニ於て、ケ程

之大事を挙る時ハミニストル官老人のみ知而決而士

卒江知らしめざる事也、若哉又、ミニストル之次官迄

ハ告ても、又其次官以下江ハ不示事も有之候間、弥

実正之処ハ相分り申間舖候、乍然此節之儀ハ中々容

易之事ニ而ハ有之間敷被存申候、已ニ生麦騒動後、

追々本国江成行申遣し、於本国評議之上本国ミニス

トルより清国香港ミニストル江申遣し候由ニハ

日本横浜ミニストル江生麦一条等之返答申遣し候間

清国諸所碇泊之軍艦数艘を以而早々横浜江送届候様

申達し候由、夫故清国上海・香港等より英国之軍艦

追々八艘尤此説異説紛々十艘ハ六艘之説も有之候或横浜江龍越内二艘ハ既ニ

先日当港江立寄り兩日致滞留候而、直様同所江致出

帆候間、右之一条ニ付横浜江致会合候儀ハ相違有之

間敷被存申候、

一又問テ曰、然る時は其方達之了簡ニ於て、此節之首尾

如何ニ相成見留之処も有之候ハ、承度候、

兩人共々ニ答テ曰、江戸之応接、明白ニ無御座候ハ

ハ、直様御国江参り応接可仕被存申候、乍然鉄砲ニ而

も打立候様之事ハ容易ニ仕り申間敷候得共、御国之

思召如何可有之哉、直様御打払之思召共ニ而ハ有之

間舖哉ト被存申候、

一又問テ曰、弊国ニ於て、乍此上決而粗暴之取扱いたし候

儀ニ而ハ有之間敷候、已ニ此内より折々相咄候通り、

生麦之一条不凶も致し候事より起り候事ニ而、切害い

たし候者逃去り候ニ付而事面働罷成、唯今ニ至て精々

探索中ニ候間、探索仕出候ハ、直様差出可申候得共、

若哉当人行衛相知不申候ハ、何様之首尾可相成被存

申候哉、

答テ曰、事之勢ひを以而相考申候ニ、相手御指出不

相成候ハ、金子御ねたり申候哉、又ハ相手相知候迄、

(ツツ)琉国御預り申置度儀共申出テハ致ス間敷哉被存申

候、

一暫時余事を談し、又問テ曰、魯西亞之軍艦三艘、昨日

当港致出帆横浜江指越候、外ニ米利幹之軍艦三艘、仏

朗西之軍艦三艘、貴国之軍艦式艘も今日致出帆、同所

江差越候由承及候、右生麦之事のミニ候ハ、余国は関

係有之間敷処、右四ヶ国も同様致会合候ハ何様之訳ニ

候哉、

答テ曰、是は此内江戸御殿山焼亡一条ニ付各国談合之訳も有之、殊ニ今般、英吉利江戸之応接中々容易之事ニ而無之候間、右情態形勢見置之為ニ差越候由ニ御座候、

右親數御見聞之事ニ候得共、猶又御心得ニ茂可罷成哉、書記し申上候、

通弁川原又兵衛を以而昼七ツ半頃より夜四ツ半時迄談話中之通質問ニ候、

文書原寸 縦一七・九種 横一六七種

〇〇 生麦一件ニ付長崎ニテ八木称平ノ聞書

同文書ハ四七八ノ二号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦一七・九種 横六五・七種

〇〇 生麦一件ニ付長崎ニテ英商「コロウル」

ヨリ五代才助ノ聞書

〔端裏書〕  
二月九日 五代

英人コロウル曰、此節横浜江致到来候起元は、本國政府より香港<sup>(港)</sup>在留之ミニストル江書状致到来、其内ニ加奈川ミニストル江之要書、香港・上海等之軍艦を以急々差送候様と之趣有之、依之上海・香港等之内より軍艦七艘を以差廻候由、尤右書状開封無之内は、実否不相分候得共、專世上江申触候趣は、昨春秋於生麦英人殺害せられ候事件ニ付、其首尾取究度趣と申事ニ候、申立之次第は、洋銀五拾万枚程殺害せられ候英人之妻子養育料并右ニ付而は余多之軍艦致往覆<sup>(覆)</sup>候雜用金旁として、右之通償金被差出度申立候欤、又は相手被差出度趣欤、琉球国相預度趣欤之三ヶ条之内申立ルニ而可有之承申候、

一 右三ヶ条申立ニ付而は、直様薩州江可乘參哉否相尋候処、決而薩州ニは不来、日本政府と可致応接、併其応接不相応之返答相成候欤、急速難相弁、事延々ニ相成候儀共有之候ハ、薩州江可參候、參り候而も戦争を開

と言訳ニは無之、右談判之為ニ可乗参候、勿論ケ様之儀は可成は政府より政府との応接を相好ミ可申候、

コロウル曰、譬は我長崎人と及喧嘩シ時は、日本政府よりも我ニは問不來、コンシユル官江応接可相成之理也、

一コロウル同商会之英人ハイソン<sup>名</sup>江本国親共より遣シ候書状之内ニ、生麦一件之始末ニ付、此節加奈川江軍艦差廻シ応接取究ニ相成候筈、償金相請取候欵、前文同様之三ヶ条申立候内定之由を申遣來候由、右之内江は琉球等は無之、薩摩之属島又は対州之地を取るベシとの趣之由、

一生麦之儀ニ付而は、日本於政府も取扱甚不宜、英人も余程不承知之由、英人殺害ニ逢候節、横浜ミニストルより横浜奉行所江形行届出候処、此節之儀は日本政府ニ不預事候付、薩州江可致応接返答相成候由ニ而、是など不承知存候由、英国ニ而評判、薩州は日本第一之大国ニ而、日本政府より自由ニ取扱不相成、互之中不

宜哉ニ申候由、何ニ故ニ右様申候哉之趣相尋候処、左様之訳故政府ニ不相預、薩州江応接可致など政府より返答いたし候儀ニ而可有之抔申居候由、

一生麦之一条、誰欵指揮いたし候もの無之候而は、右様殺害いたし候訳無之と申事ニ而、其指揮役を相うらみ候由、

一此節、加奈川江英国外各国軍艦差廻り候由、何ゆえ之訳ニ而乗越候哉相尋候処、第一は金銀<sup>(貨幣)</sup>化平之<sup>(貨幣)</sup>応接之為、次ニ生麦一条ニ付英国より軍艦差出候故、其事情探索之為差越ニ而可有之、何方ニ而も六ヶ敷<sup>(貨幣)</sup>応接差起軍艦差出候節は、各国よりも軍艦差廻事情探索為致候儀は、西洋普通之習ニ候由、

一長崎在留之英人共ニは、日本之内薩州は交易も余国より多、蒸氣船茂多艘有之、其外西洋之学業余程相開ケ、頼母敷存居候折柄、此節之一条致到來、甚氣之毒ニ存居候、此節当所在留之コンシユル横浜江差越候節、追々右情合相含差越居候、当時英国ニ而も斯迄交易を相

開、直様戦争等相開キ候而は、英国過分之損失ニ相成事故、容易ニ戦争相開候儀は不相好、此節之儀もどふと所置相付候へ、無事相治可申、併今形ニ而は相済申間敷、此節応接互ニ不練合候へ、各国ニ対シ無抛薩州ニ来り、兵端を開ニ至り可申候、

右之外、万事御直ニ御見聞通之儀ニ御座候間、御心置之為申上候、以上、

亥二月十日

五代才助

文書原寸 縦一八・一種 横三六二・九種

三 瀧川播摩守ヨリ九門並京師内外警衛ニ付

朝廷へノ建言

御所九門内外市在共御警衛向勘弁可申上旨御沙汰之趣奉得其意勘弁仕候処、近年無御抛(有脱カ)ニは可御座候へ共、諸大名多滞京ニ付而は家来共多数人数在京籠在候より混乱仕候へは、却而御取締方行届兼候間、諸大名は夫々帰国被仰付、当地屋敷有之面々は留守居之外家来多数人数滞在无之

様可被仰付哉ニも可申上候、方今一時ニ諸大名御警衛御

免帰国被仰出候御時節ニも至り兼候間、先ツ九門内外市

在御警衛之儀は是迄之通御据置、形勢御見合之上、九門

内外市在諸大名御警衛御免被成、九門内は守護職・所司

代ニ而御警衛、九門外は三ヶ年代リニ而交代、寄合之者

江被仰付可然哉、其余見込之趣廉書仕申上候、

一御所九門出入之儀は兼而判鑑差出置、鑑札ヲ以通行為

致候様、向々江御達可被成候、

一当地七口之儀は兼而御警衛之大名江被仰付、番処柵門

取建、嚴重ニ入京之者相改、暮六ツ時限ニ而右柵門、

切、其後無抛通行之分は猶更嚴重相改候様可被仰付、

右口々番所ニ而入京之者改方之儀は、今般御上洛御留

守中江戸表御取締同様、諸家々々は主人、百姓・町人

は領主・地頭等より兼而印鑑差出置、調印書付を以出

入為致候様、万石以上以下并諸国支配御代官等江御達

相成、尤右印鑑之儀は万石以上以下共所司代江差出候

様可被仰達哉、

本文之通番所柵門取建、入京之者相改候へは、御取締も相立可申奉存候へ共、右七口之内ニは左右田畑有之、柵門取建候而も其詮無御座、其上当地江立入候間道も数多有之候へは、地理等夫々取調候上ならてハ、耽ト取極申上兼候、

一京師逗留之諸家々来・足輕・中間ニ到るまで名前・年齢相認候人数帳町奉行所へ差出置、異同有之候へ、屹度相改差出候様御達可被成哉、

一市中御取締之儀は火付盜賊改同様之御役十人程被仰付、老人へ組同心三拾人ツ、御預相成、昼夜嚴重ニ見廻り、怪敷者は速ニ召捕、町奉行へ引渡候様可被仰付哉、

但十人之者は夫々持場相定昼夜相廻、持場は勿論、他之持場ニ而も怪敷者潜居候儀承候へ、聊無斟酌召捕候様被仰達候へ、相互ニ励合御取締ニも相成可申哉と奉存候、

一市中之儀は洛中は一町毎ニ大体木戸門有之候得共、端々は木戸門無之ニ付、夫々今般為取建可申奉存候、乍

去木戸門取建候而は、実ニ差支候向は其俣差置、尤夜四ツ時限木戸門ノ切、其後往來いたし候者は其節々明ケ通させ候様触書差出候様可仕哉、

一寺社旅籠屋渡世之者并町家ニ而帶刀人一宿為致候へ、其段可届出、万一窃旅籠宿為致候儀相顯るゝにをゐては差置候当人は勿論、寺院本寺市在は所役人迄も急度答可申付旨触書差出可申哉、

但本文触書差出候上、不届之者御座候へ、当分之処苛酷ニ過候様ニも相成不申候半ては御取締難立奉存候間、右之心得を以相伺候様可仕奉存候、

一町奉行組之儀、両組与力同心昼夜見廻差出、怪敷者有之候へ、探索召捕候儀勿論、此上嚴重可申渡と奉存候、一異変之節は兼而御警衛并援兵被仰付置候者は其俣御差置候上、猶大和・近江・丹波・若狭国之大名へ早束出(速)京御警衛可致旨兼而可被仰付候哉、

右之通当地御取締可被仰付哉、猶御賢慮御座候様仕度奉存候、以上、

二月十一日

(具形) 滝川播摩守

別紙見込之趣申上候通、諸大名之向御警衛御免帰国相成候とも、関白殿・近衛殿・中川宮等江諸侯藩士為警衛入込居候而は矢張弊害無之とは難申上、去とて警衛被止候儀ニは相成兼候間、從関東為警衛講武所之者一ヶ年交代被仰付、右家々江警衛被仰付、為取締頭取兩人在勤相成候ハ、御取締相立可然哉と奉存候、以上、

二月

滝川播摩守

一京都口々之固メ嚴重可致事、

但是迄は七口之定めニ候へは、此度变革七口が十口

ニ相成候共、京地出入之要路地形ニ寄陣屋砲台等取

建候事、

一講武場は武備引立之場所故、今度新規取建候事、

但鎗劍場一ヶ所・砲術場一ヶ処と致、鎗劍は地役人

之者共住居最寄之方可然候間、一条辺ニ而地所相撰、

砲術之方は調練等場広之所ニ無之候而は稽古難行届

候間、鳥羽・竹田両街道辺ニ而可然場処取極、尤鎗

劍砲術場共詰合之諸藩臣も稽古等ニ罷出不苦候事、

一市中取締之為火付盜賊改様之役新規申付候事、

但五六千石位之者兩人程頭ニ申付、組人数も相当ニ

相預ケ警衛向相心得、浮浪之者取締も心得可申事、

一大目付専人、目付兩人ツ、年々交代相詰、取締向心得

可申事、

右之外、猶手順を遂ひ取締向相立候事、

一京地講武所御取建之事、

但劍鎗は

御所又は 御城近辺、砲術は鳥羽・竹田・伏見三街

道之内江御取建、其街道之御固をも心得可申事、右

講武所奉行・同頭取・各術師範役等は家族召連引越

無年限相詰、世話心得并五百俵以下小普請四百人程

一ヶ年勤番半ハ充交代、右住宅は講武所御構内へ御

取建之事、

右講武所奉行始

天朝御警衛之為ニ被差置候御趣意ニ而



行幸之節は勿論、宮・撰家方等御出行之節も為警固して  
罷出候積、

一九門御警衛は寄合ニ被仰付可然事、

但近国ニ而五千石以上之者へ被仰付、交代寄合茂御

取交之事、尤右御役屋敷京地へ御取建之事、

一京地口々御固は当時七口と名目相立居候へ共、場所之  
模様広狭ニ寄、七口が十口ニ相成候共不苦存候間、口  
数ニ寄、当時被仰付置候七家之外、猶近国之諸侯へ増  
被仰付、一口ツ、持場を定置可申事、

但地形ニ応陣屋・胸壁・砲台等御取建、大砲御据付

彈藥は御貯相成、小銃は自分道具相用可申事、

一火付盜賊改様之御役新規被仰付、御役名は京都衛士奉  
行杯と唱、兩人も可被 仰付事、

但是は寄合ヨリ被仰付、御役扶持三百人扶持程も被

下置、火消役之勤之如ク出火之節も馬印為持出馬致、

組之者召連非常巡邏いたし可申、右組は和州十津川

郷之者五百人程宛も一ヶ年詰交代之事、江州甲賀古

士も多人数は無之候へ共、御用相勤度旨兼而願書も  
差出宜候間、右之内御加人壬生村浪士も御差加ニ而  
も可然、尤平常は市中見廻り、講武所へ罷出稽古い  
たし候事、

一市中町人共之内有志強壯之者撰候ハ、町数二千程も  
有之候間、多分之人數可集候間、右ニ而商兵を取建、  
銘々一刀を許し、官印有之棒を与へ置、町奉行組之与  
力懸りを定置差配可申事、

一大目付咍人、御目付兩人支配向共一ヶ年詰、京坂之間  
ニ往来いたし、御縮向心得可申事、

一平常講武所ニ而武芸修行調練、陣法を定、洛外一二里  
外之場所遊獵御免相成、春秋両度ニ大調練、野陣を張  
二日一夜位之稽古も到候ハ、自然之節応急覚悟も相  
立可申事、

一諸組与力同心は勿論、守護職初地役之家来有志之者は  
講武所稽古ニ罷出不苦事、

右之通申上候見込は今古を以熟慮仕候処、武備之依而

起候基本は土地ニ有之、古人英武ニ候は則土着之故ニ御座候、方今も土着之姿ニ不被遊候而は武備は振興不仕、僧徒・社人は武士ニ無之候間

御朱印地其地之寺社とも御蔵米ニ御引替、御蔵米取之武家へ、右土地を引替御渡相成、京・江戸・大坂等之御堅メ之基本を御立被遊候へ、可然奉存候事、

但いづれも各地之警衛之武士各地近国ニ采地有之候様ニいたし度事、

一右土着之儀は急速難行候へ共、往々は御施し相成候様仕度、本文之趣も右見を以取調申上候儀ニ御座候事、

京地口々

粟田口 北白川山中越 下鴨より大原迄

山端村より雲母越 鷹ヶ峰より長坂

朱雀より老ヶ坂 鳥羽より小枝橋

竹田街道より伏見 伏見街道 宇治 坂本 山科

冊子原寸 縦二七・六糎 横一九・五糎 九枚

一橋中納言等四名ヨリ攘夷期限ニ付

朝廷へノ上申

(繪裏朱書)

「癸亥二月十四日」

大樹公上洛滞在日數十ヶ日と 御治定相成候間、二月廿一日出帆より海上往反風破之障等無御座候得共、四月中旬之内、攘夷期限ニ相成申候、尤帰着日より廿日御猶子被下度儀は、先夜茂奉申上候通之儀ニ而、右之日積ニ相成候事、

二月十四日

松平容堂

松平肥後守

松平春嶽

一橋中納言

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一五号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一七・五糎 横四九糎

四 本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門大久保一

藏へ

京都ニ於ケル攘夷党ノ跋扈

〔端裏付箋〕

本田弥右衛門氏書

〔端裏朱書〕

癸亥 二月十五日 京 本田

当地之形勢、帶刀殿より御聞取被下候半、其後ニ到、日

々変換之次第、筆紙逐一難尺候、不遠

三郎様御上京之筈と奉待上居、巨細不申上候得共、万々

一 御延日被為在候而ハと奉存候付、別紙攘夷期限之儀、

大略申上候、当時一橋慶喜・松平・山内・春嶽・容堂三家も御着京ニ

而追々御會議茂被為在候得共、何分

三郎公御上着を日々御待被為在候との事ニ而候、右三家

之儀、当時第一忠誠を被尺候賦、精々御精評を被逐、御

建白も被為在候得共、更ニ御採用も無之、堂上方何れも

敵視之御様子故、嘉謀善策も空靡擲之体、実ニ心外之事

ニ候、投書又ハ斬首を投入等之事言語同断ニ而、処士横

議浮浪之徒、公卿を挟ミ異議暴説紛々擾々、何も一定之

説とてハ全く無之、

青蓮公御還俗ハ被仰出候得共、其仮ニ而為何事も無之故、

名ノミ御還俗にて其実 思召之御議論さへ不被行

陽明公も内覽御受持ハ有なから御相談ハ無之、悉新関白

之決ニ出候模様、衆議紛々ニ而、既去ル十三日 青門公、

陽明公

御参内之処、新関白江別席御招ニ而議奏ヨリ御内談等有

之、陽公ハ空位ニ御出之御心持ニ而面目を御失被遊候様

為有之由且 青公、

陽公因循偷安之説有之とて南門ニ御首を曝奉るなととさ

へ暴言有之、絶言語次第、唯々今之朝廷ハ朝廷之朝廷ニ

非ず、浮浪書生之朝廷となり行、泣血慨歎之至ニ不奉堪、

十三日期限御受と申儀ハ十二日夜一橋卿旅館江三条卿并

伝奏其余姉小路様始八人計御来臨ニ而御議論徹夜ニ及、

余り切迫ニ候や、越前公ハ御自裁決死之処、漸容堂公御

押留ニ相成、遂ニ

將軍上洛後廿日ニ攘夷之期限内答被仰上候由、細事筆紙

上ニ其始末難書尽候、一体在京ノ群諸侯ハ可もなく不可もなく、因州・尾州も只々歎息之外無之、唯諸藩士之胡論なる者、好事之徒、張牝議論是非のミ、何分

三郎公御出京候ハ、官武之間ニ介然御雄居、公武共和之大道相立 神州興復之大基本相立可申、其群議可相止趣法胸算有之候得共、予め難申上候、扱

御出駕御日限ハ愈不相究とも大凡之処不被仰遣候而ハ内外落着も出来兼候、別紙町便を以申上候付大意形勢申上候、嗚呼至切至迫之世体実ニ可愁之至ニ而候、大阪迄

御着之節ハ早速参上逐一可奉言上候間相省候、右御内用まで如是御座候、已上、

二月十五日 京都 本田弥右衛門

御国元

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

追此書相届候儀ハ早々便次第御申遣可被下候、

文書原寸 縦一五・六糎 横一七八・四糎

山内容堂公ヨリ島津久光公へ

使者用談ノ件

前後御疎濶頗ル失本懐候、先以益御安清奉雀躍候、

御尊家御同様奉大賀候、弊家無事、乍憚御放意可被下候

此度使者差出候主意ハ難尽禿筆処、乍失敬得拜顔委曲奉

申上候様申含置候故、御聞見被召出候様奉冀候、先ハ右

用事初時候御見舞如此御座候、頓首、

二月望 容堂

文書原寸 縦一八・五糎 横五五・一糎

村山斎助等ヨリ在国中山大久保へ

時勢切迫ヲ告ケ久光公ノ上京ヲ促ス

〔端裏付箋〕  
「村山鶴木其外より」

〔端裏朱書〕

癸亥二月十八日

京 藤等

當時京地之事情至而切迫、天下之形勢日々変換いたし、上下人心騒擾之次第、実以

皇国之御一大事

朝廷之御難題差屯候、其因而来ル処茂有之、悉紙筆上ニ  
難展尺候、右ニ就は

青蓮院宮様

陽明前殿下様・一橋卿・春嶽様・容堂様御始、三郎公御

上京を日々御待被為在候御事ニ而、当分諸侯洛下ニ群參、

藩士及四方之浮浪士・亡命人等嘯聚仕候而異論暴説紛然

烽起いたし、夫か為ニ朝議時々刻々御動揺被為在候故、

一・越・土侯ハ勿論、宮 陽明公等意外之御配慮、言語

同断之次第数件有之、私共座視傍觀難仕時機ニ罷成、於

御国元、右等之時情委細不相達候而は

思召御心得ニも可相成儀不申上候而も不相濟、尤大久保

一藏・帶刀殿御帰国後之事情格別相変候件々等御座候故

一同篤と熟評仕、今日高崎左太郎急キ被差下、細大曲折

奉達

尊聴候様仕候間、猶同人より御聞取被下、御披露之程宜

御頼申上候、此段大意申上越候、以上、

村山齋助

鶴木孫兵衛

高崎猪太郎

藤井良節

吉井中助

本田弥右衛門

亥

二月十八日

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

文書原寸 縦一六種 横一三三・三種

○庚七 生麦事件ニ付英代理公使ヨリ閣老ヘノ書

翰

右ニ付閣老ヨリノ答書

二通

○庚六 小松帶刀島津式部ノ令達

藩庁借入金ノ件其他

金一万兩

重久佐次右衛門

同八千両ツ、

川井田藤助

長倉猪八郎

岩元政右衛門

坂元貞右衛門

右は、方今之世体内外多端之御用途ニ被為及候付、夫々理財之御作法茂相立、後年之御見留十分被為居候事ながら、今ニ当てハ為天下国家無御抛、百端之御散財而已之御事候付、右片書之通御借上被仰付候間、何れも時世奉汲受、御請可奉申上候、

但

五ヶ年限御返却被成下候、

二月

帯刀

式部

海老原宗之丞

右は、在職中亡調所笑左衛門江一味致同心、欺上輕下、

奸曲私欲を専ニし、国体を損し、風俗を乱し、邦家を覆し

危ニ至らしめ候儀共畢竟謀主となつて姦意を助候者ニ付

御先代様

思召ニ茂被為

在候間、屹と可被仰付候得共、御有恕を以被処遠島候、

思召ニ茂被為

稲富数馬

右は、亡調所笑左衛門在職中、欺上輕下、奸曲私欲を専ニし、国体を損し、風俗を乱し、邦家を覆し、危ニ至らしめ、其魁首となつて阿諛之者ニ党し重疊極罪之者ニ付御先代様ニも

思召被為

在候間、屹と可被仰付候得共死後之事ニも有之、旁御有恕を以家格被召下、代々小番被入置、左候而被定置候外、持高御取揚被仰付候、

文久三年亥二月廿日

一万両

重久佐次右衛門

八千両

川井田藤助

八千両

長倉猪八郎

八千両

岩元政右衛門

八千両

坂元貞右衛門

文書原寸 縦一四・五釐 横一八〇・六釐

吳允進達掛川上弥八郎岩下新左衛門届書

名越左源太等ノ添書

共二通

親病氣ニ付亥正月  
御暇被下罷下候

大橋猪八

伊地知七左衛門

御用ニ付京  
都江被留置候

志和池嘉左衛門

戌八月晦日  
御暇被成下罷下候

三原伝左衛門

戌十月十七日  
御勤書幸領ニ而罷下候

貴島李右衛門

戌閏八月廿三日  
御劔幸領ニ而罷下候

八木十次郎

戌十一月守衛方  
御免ニ而罷下候

田中甚助

大窪仁之助

伊東矢八郎

戌閏八月廿三日  
御供ニ而罷下候

川田甚助

瀬川作次郎

畠山五郎左衛門

矢野半助

若松金十郎

岩山玄俊

本田助之丞

村瀬彦兵衛

倉野郷十郎

吉田己二

志和地治右衛門

東郷喜之助

伊東金左衛門

村山小四郎

中野周右衛門

草道市郎右衛門

松田幸之丞

戊十一月十三日  
御勤書奉領ニ而罷下候

寺師 休五郎

町田 孫次郎

樺山 仲左衛門

伊集院 孫左衛門

木脇 尚太郎

湯地 養賢

右三拾式人、此般為守衛方滯京中、茶屋・酒会并遊所屋

等江繁々差越、不行跡之振舞有之、剩酒色沙汰之儀は嚴

蜜仰渡茂有之候得共、御趣意不汲受、馴染等相付、数日

居統ニ遊所江罷居候者茂為有之由承合申候、

中山 佐太郎

星山 矢之助

藤田 市助

長野 彦治

河野 与左衛門

川上 源五

堅山 半助

柳田 岱浮

八木 八郎兵衛

上野 彦七

吉川 源左衛門

小牟田 矢太郎

三原 矢之助

押川 弥七

有馬 意運

加治木 彦右衛門

高城 喜八

右拾七人、前条同断、滯京中、茶屋其外遊所等江茂間々

差越、致大酒等、是以背 御趣意ニ不慎之段承合申候、

戊十月十七日  
御勤書奉領ニ而罷下候

鎌田 市兵衛

今村 太郎左衛門

右三人之儀、前条同断、滯京中、茶屋江は間々差越酒会

等相企候由、且遊所江は差越候儀詳ニ承合不申候、

戊十月三日親御役免ニ  
付御暇被成下罷下候

戊閏八月廿三日  
御供ニ而罷下候

右同

戊閏八月廿十三日  
御供ニ而罷下候



戊十一月十三日  
御勤書幸領三而罷下候

大山清太夫  
藪牟田 利兵衛  
西郷宗次郎  
西太郎兵衛  
肥後与右衛門  
園田新助  
横山矢三次  
原田助次郎  
内田市郎太  
福島尚之進  
久保八郎太  
新納喜之助  
大山清左衛門  
小野休甫  
田代五郎左衛門  
中島弥次郎  
谷川十太郎

龜沢源八  
鬼塚四郎太  
竹山正右衛門  
折田十郎  
野崎善之丞  
野元嘉左衛門  
藪田与藤次  
田尻源五左衛門  
竹迫彦左衛門  
八木七之丞  
肝付弥二郎  
指宿五左衛門  
西壮右衛門  
毛利勇之助  
竹崎小仲太  
高柳幸左衛門  
川上彦右衛門

戊閏八月廿三日  
御供ニ而罷下候

郷田仲次郎	伊勢孫次郎	鎌田宗五郎	矢野次郎太	江田源右衛門	平山作右衛門	永江市内	大山甚兵衛	川村吉次郎	川上休蔵	堀添宗次郎	伊地知十郎	川上直助	田中勇右衛門	樺山彦太郎	二木清之丞	野元吉左衛門
-------	-------	-------	-------	--------	--------	------	-------	-------	------	-------	-------	------	--------	-------	-------	--------

右六拾人、前条同断、滞京中、深御趣意汲受、徒遊所  
 又は酒会等相催候儀は無御座候由、至極大切ニ相慎、万  
 端律儀相嗜、相動居候者共ニ御座候、

亥  
 二月廿二日  
 進達掛 川上弥八郎  
 右同 岩下新左衛門

文書原寸 縦一六・四種 横四一三・七種  
 添書ハ欠クモ、同文書ハ四九一ノ二号文書ト同シカ

川上喜兵衛	東郷七之丞	伊地知正兵衛	上村弥兵衛	江田壯之丞	本田休次郎	種子田藤次郎	植木甚兵衛	竹内清八
-------	-------	--------	-------	-------	-------	--------	-------	------

四〇 生麦事件ニ付関白ヨリ薩藩ヘノ命令

同事件ニ付牧野所司代ヨリ佐土原藩ヘノ

通達 右二通一綴

(端裏書(朱)  
「一突交」)

在京之諸大名江被相渡御書付之写 佐土原より受取

今度英吉船渡来ニ付夫々防禦之次第茂可有之、就而は帰

国ニ可相成哉、若於帰国は精選之士応在京之人數、多少

朝廷為御警衛当地滞在有之様

関白殿被命候事、

右二月廿七日於学習院被相渡

島津淡路守 (忠實、佐土原藩主)  
家来江

此度、横浜港江英吉利軍艦渡来、昨年島津三郎儀江戸出立掛ケ、生麦ニ於て三郎家来英吉利人を殺害ニおよひ候儀ニ付、三ヶ条之儀申立、何れも難聞屈筋ニ候、其趣を以可及応接候間、速ニ兵端を開候哉も難計、仍而は銘々藩屏之任ニ有之候付、夫々備向手当方も可有之候間、為

心得相達候事、

所司代牧野備前守様より二月廿七日被相渡候、

文書原寸 縦一五・八糎 横七三・八糎

四一 進達掛川上弥八郎ノ届書

名越左源太等ノ添書

共二通

四九一ノ一

戊八月頃御用物宰領ニ而罷下候由

京都江御用ニ付被召留置

戊八月頃御用物宰領有之罷下候

右同

磯永弥九郎

右四人、此般為守衛方滞京中、茶屋・酒会并遊所等江間々差越、不行跡之振舞為有之由承合申候、

戊冬頃親病氣ニ付御暇成被下候

戊秋頃御用物宰領ニ而罷下候

右同

四本助八

町田孫一郎

萩原喜三太

右同

佐藤彦左衛門

戊秋頃より病氣ニ有之御暇被成下候

永田七左衛門

右同

内田良助

戌十月頃親病氣ニ付御暇被成下候

伊地知吉左衛門

右同

松元直八

右両人事、滯京中不行跡之儀全ク承合不申候、

戊閏八月病氣ニ付養生方として御暇被成下候

柴七郎左衛門

戊閏八月廿三日御供ニ而罷下候

帖佐彦七

川上新左衛門

右同

鎌田十郎太

福島矢三太

右同

小川小次郎

嶺崎直五郎

右拾人、此般為守衛方滯京中不行跡之儀全ク承合不申候、

右四人、於京都病死仕候、

吉川市太郎

松元勲兵衛

永山清右衛門

吉田清十郎

川井田藤之進

前田伊右衛門

高田十次郎

伊藤弥右衛門

西田次右衛門

右三人、京都御普請方江被掛置、罷殘候由、

中村彦左衛門

右六人、粟田之宮様江被召付置候由、

右人数、先度差上置候名書江相洩居候者共ニ御座候、

以上、

亥

二月廿七日

進達掛

川上弥八郎

文書原寸 縦一七・四種 横一四二・二種

四九一ノ二

〔包紙ウツ書〕  
上

封

名越左源太

島津主計

相良治部

川上右膳

」

先日差上候聞合書之内江相洩候人数再糺為仕候処、別紙之通申出候付差上申候、就而は先日奉申上置候通能相貫不申儀茂可有御座と奉存候付、猶亦御糺明被為在度、此段奉申上候、以上、

名越左源太

島津主計

相良治部

亥

二月廿八日

川上右膳

文書原寸 縦一六・三種 包紙原寸 縦二八・五種

横三一・七種 横三八・七種

〆〆 生麦事件償金ニ付幕命

〔包紙ウツ書〕  
「松平修理大夫家来江」

御渡書付

〔朱〕  
「癸亥二月廿八日」

〔端裏付箋〕  
「松平修理大夫家来江」

生麦一条ニ付、此度英夷申立候三ヶ条之儀、何れニも難聞届筋ニ候、乍去三郎心得方も可有之、兼而申立候趣有之ニ付実々不容易国家之御大事、急々可及応接間、勘弁之处早々可被申聞候事、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一六ノ三  
号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一七・六種 包紙原寸 縦二九・八種

横 六三種 横三八・六種

四三 本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門等へ

生麦事件ニ付英国ノ要求

生麦一条ニ付英夷軍艦横浜江渡来応接之処、夷人申立之次第二付、越前春嶽様より御達之書付并陽明殿より被相渡候書付等之趣、藤井良節・志々目猷吉下之関迄追々差下シ候間、相達為申答と存候、然処今朝春嶽様より御達被成儀有之候間、御家老之内一人、御留守居之内老人、早急罷出可申旨致承知、島津右門・鶴木孫兵衛罷出候処、別紙迄通被相渡候付、早々御中途下之関迄飛脚差立、此段申上候、御披露可然様御取計可被成候、已上、

二月廿八日

京都

本田弥右衛門

島津主殿殿

中山中左衛門殿

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一八号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・六種 横六八・四種

四四 本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門へ

生麦事件ニ付英国ノ要求及京都ノ情况

尚々

順聖公御贈官位記口 宣等、今日伝奏衆ヨリ被相渡候、何も所司代之手ニも不相渡、首尾能相濟申候而大ニ安心仕候、

一筆致啓上候、春暖之節御安寧可被成御座、珍重奉存候、乍恐

三郎様益御機嫌能被遊御座、恐悅御同然奉存候、最早此状到着之頃は下之関辺江御通船之御事と奉存候、小松家ニ茂

御供被命候由大慶之至、二ニ小生碌々奉勤仕居候間、乍憚御放念可被下候、扨京地形勢之儀、追々申上越候通之次第、実ニ無謀之暴論頻ニ湧出痛歎之至、藤井良節下之関迄差出候付御聞取可被下候、然ルニ生麦一条ニ付、英

國軍艦渡來、越前より御達之書付藤井より差上候半、其  
後志々目差上候付、  
(獻吉)

陽明殿より之写御書付も差上為申事と奉存候、彼之醜夷  
共申立之ニケ条、実以不可容之無礼過言、君辱之時臣死  
スル之秋ニ御座候、かく迄輕蔑之体を示候事未曾有之大  
不敬、尤天地間無此上大罪にて、共ニ不戴天之寇讎ニ御  
座候、昨廿七日ニハ別紙式通之書付、諸大名江布告相成  
候、尤御当家より事出来候儀ニ而、兼而御申立之趣茂有  
之候間、今朝之越前より之御渡書之御趣意ハ内実之処、  
三郎公御勘弁之処被聞召度、乍併往復数日ニ相拘り申事  
故、京地詰合之家臣兼而存込之趣も可有之候間、右式被  
聞召度との旨、中根鞞負より申來候、雖然近々  
三郎様御上京之上、何分申上ルニ而可有之と申置候方ニ  
決居候、明日右御届申上候賦ニ候、若強而存慮申出候様  
沙汰も有之候ハ、行也大道至理を以応接いたし、若至  
当之理ニも不服、彼より礼讓を破、兵端を開キ申候ハ、  
相応して掃絶いたし可申旨申出候外無之候、尤攘夷拒絶

ニ被究候上は、一も二も無之事ニ而候、外ニ存慮も無之、  
当地一橋公・春嶽公との賢明忠誠も幕吏同然之御会釈ニ  
而、言上之趣意も不貫、実ニ浩歎之至ニ奉存候、此機ニ  
乘し諸大名御暇之建議も為有之由ニ御座候得共、必至と  
御極り之定見、

朝廷ニおいて不被為立残念之至、何分不容易世体ニ相成、  
今之形勢ニ而ハ目下ニ禍難を醸し出候ハ案中ニ而、浮浪  
之輩ハ洛中ニ充滿、しかし会津より少々手を付、七八人  
魁首を召捕、通達等ニも相成候、扱々忼慨ニ不堪次第、  
王綱も終ニ張拡之期なく、

皇国合一戮力候程も無覺束存申候、御上京を一刻三秋と  
奉待上候、尤

宮 前殿下御該兼之次第、良節よりも御聞可被下、もふ  
ハ御答之申上様も無之、只々困り入申計ニ而候、大樹  
公上洛ハ三月四日ニ御着之賦ニ相成候、夷船一条、今朝  
將軍之御中途江岡部・沢之兩人発足参向ニ而候、申上度  
次第滿胸御座候得共、とかく近々之内、兵庫・大坂之間

ニ而 御迎ニ参上之賦御座候間、其折御直談と申上省候、乍憚小松大夫江可然処申上可被下候、右便宜大略如是御座候、恐惶謹言、

二月廿八日

京都

本田弥右衛門

中山中左衛門様

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第一七号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・五種 横一八九種

○四五 生麦事件ニ付松平春嶽ヨリ神奈川奉行ヘノ令達

四六 鵜殿鳩翁取扱浪士等ヨリ幕府ヘノ建白

生麦事件ト切放シテ攘夷断行云々

(端裏朱書(マヤ)「亥三月晦日 浪人共噂」)

今度於

將軍家御上洛被遊

叙慮御尊奉、攘夷之期限可相定との折柄、御留守中英夷軍艦内海ニ乗込、去秋薩人斬夷之事、敵數被及応接候得共、申立之三ヶ条共一切御許容無之、直様御拒絶被遊候、御廟議之由御雄断之程、天下人民雀躍奉感喜候、乍併攘夷之御趣意ハ全ク交易相始候段、天下士民悉ク不同心ニ付内乱之基ニ有之、於

朝廷更ニ御許容無御座、一時姦臣之私計ニ出候而、其輩も追々被斬戮候仕合ニ付、至今上は

聖旨を尊奉し、下は天下人情ニ随ひ、政事一新祖宗之旧法ニ可回復との儀ニ而、実以我全国一統之大義ニ御座候得は、正々堂々之御議論ニ而拒絶仕度、生麦一条ハ全ク薩人英夷之一箇小事ニ而、我 国家之大計又ハ五ヶ国ニ相関候筋ニ無之、殊ニ無礼人を斬るハ我国之土風ニ候得は、末情態相分不申候得共、強而薩人之誤とも被申間敷、右等之小事より拒絶之基ニ相成、戦争相始、万国之讒を招き、我国内之本意徹底仕申間敷候間、生麦ハ生麦之事、拒絶ハ拒絶之事ト自ら御分別、征夷之職掌相建候而御威



權相分不申様、片時も早く五ヶ国<sup>ノ</sup>之者ニ交易拒絶之御趣意御諭ニ相成、生麦事件より戰爭相始不申様仕度、且期時日、横浜及び諸夷館速ニ為引払、たとひ如何様申立候とも決而御取敢無之、断然戰爭之御手当被遊度、尚其段薩州江も御申渡、御国辱ニ不相成様為取計可然奉存候、就而は、於

將軍攘夷之

詔御奉戴之上、速ニ御帰城被遊、攻守之御所置、諸藩侯ニ御指揮被遊度、京師御警衛之儀は、矢張会津侯御任戴、山国之大小名兩三輩御付屬、

天皇御行幸之大儀

内裏御取広之御所置、貢稅献納又ハ公卿へ御融通之作法等、

都而尊

王之御周旋一切御任セ可然候、且大阪は京畿近海と申、東西衝要之地ニ候得は、於一橋公は永く御任職、山国之大名四五輩御付屬、断然御鎮戍被遊度候、

伊勢神廟之儀は海辺と云、非常之大變飄忽ニ相迫り候も難量候間、

神器相汚不申様今日第一之急務ニ付、可然大名ニ相命シ嚴重警固被仰付度、神官中ニも有志之者有之哉ニ付御任撰有御座度候、其余北海若狹辺ハ京畿ニ相接シ頗ル御手薄之上、国王酒井修理太夫ハ天下ニ表章したる好物ニ候得は、所存之程も難量候間、可然大名江遷封被仰付、此

以敵敷御警衛被遊度候、其他沿海之諸大名ハ申迄茂なく堅其国を守り、臨時之策略、応援之御下知專要と奉存候、且私共儀乍微賤、尽忠報国之為罷出候得は、斯く外国御拒絶相成候上ハ、於関東何時戰爭相始候も難量候間、速ニ東下、攘夷之御固ニ御差向被成下度、関西志士御募之儀は其筋江号令御下シ被遊候ハ、尽忠報国之者自罷出可申候、右私共一統之志望ニ付、不憚

尊敵言上仕候、恐惶頓首謹言、

文久三年亥二月晦日

鶉殿鳩翁取扱

浪士共

〔本文書ハ〕鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二〇号文  
書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・一種 横三二・一種

〇六 將軍上洛ニ付随從ノ幕役氏名

覚

来二月

御上洛ニ付

御供

松平春嶽様  
(慶永)

御老中

水野和泉守様  
(忠精)

同

板倉周防守様  
(勝勝)

同格

小笠原図書頭様  
(長行)

御若年寄

堀出雲守様  
(之敏)

同

田沼文蕃頭様  
(意尊)

御先供

〇七 英艦ニ対スル薩藩防禦ノ御沙汰書  
(包紙ウラ書)(朱)  
「癸亥」

二月晦日夕刻

野宮殿より被相渡候

御沙汰書写

島津淡路守  
(忠寛)

為自国警衛、急速帰国致度趣、尤之儀ニ思召候、殊島津家は英夷申立之ヶ条ニ茂關係致候間、修理太夫・三郎等ニ茂上京之儀、暫為相見合共ニ尽力有之候様被仰出候事、

〔本文書ハ〕鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二一号文  
書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・九種 包紙原寸 縦二七・八種

横三八・二種

横四一・二種

榊原兵部大輔様(式部、政教)

御跡押

松平隠岐守様(久松勝成)

御側衆  
御用取次

堀内伊豆守様(丹内、保之)

室賀美作守様(正徳)

村松出羽守様(武徳)

文書原寸 縦一六・九種 横二八・九種

野宮殿より被相渡候

御沙汰書写

三郎儀為相見合候様

御沙汰之処、若国許発足旅中ニ候は一先上京可致段、更

ニ

御沙汰之事、

二月

文書原寸 縦一五・八種 包紙原寸 縦二七・八種

横三一・一種

横四〇・八種

○宛 英艦来襲ニ備フル久光公ノ諭書

野宮宰相中将ヨリ伝達ノ御沙汰書

久光公上京ノ件

(包紙ウツ書)(朱)  
「癸亥」

三月朔日暁

野宮 久光公ヨリ茂久公へ内話之扣

茂久公ノ参府猶予久光公上京ノ件

(端裏朱書)  
「癸亥春」

内話之扣

今般高崎下向一条終夜致勘考候処、何分不容易儀と存候、  
子細は案内通当春以来我等周旋之事、於幕何様引受可有  
之哉、決而不快ニ可有之と存候、且江戸滞府中之形勢等

中々此節之様都合可相成とも不被存候処、誠ニ案外之次第ニ相成候儀如何相考可申哉、我等勘考ニは岩下杯之士正義ヲ唱へ諸方へ致奔走、殊ニ此度家督參勤御猶予ニ而我等御上京之

御内命被 仰渡候は畢竟彼等之設候儀、其元は遙ニ当国より致指揮候儀と於幕は疑念ヲ生し、上辺ハ甘言ヲ以すかし置、内実甚憤怨之儀欤と存候、且は帯刀出府之上、越・土又は水野等江致論判候事共、彼方は表ニ同意之趣ヲ見せ候得共内心難計儀ニ候、又此度兩侯之書簡、且伝言之儀も内心より之儀とも不被存、高崎之激論ニ而醸出し候欤、又は守護職之

御内命、於幕押留候事も出来兼、或は明春御上洛之供奉家督不參と申候而は甚不都合之事より起り候欤、或ハ長之讒口より発候欤、何分上都合とは不被存、実以危急存亡之秋とは此事ニ可在之と存候、次ニは生麦一条も甚不快ニ可有之候得共、是以力を以庄付候事は出来兼、只脇道よりスカシ付候趣向等帯刀江越よりの返答ニ而被推察

候、右旁ニ付、此節は

御内命通、家督參府御猶予不被 仰出候得は、我等も発途難致存候間、右等之処篤と内評有之、何分承度存候事、一此方初之所存は今般帰国之上は無何事家督出府相成、

官位昇進等相運バセ、只平常之所ニ而滞留期日相成候ハ、速ニ帰国可有之、於爰許は富国強兵之策略十分ヲ尽シ、事あるの節ニ臨み迅速ニ勤王之兵ヲ発シ候様致度故ヲ以、家督參府候処類ニ申聞候得共、其方達迎も承服之勢ニ無之、兎角いたし候内、江戸大奥引払之事起り、引統藤井下着、上京之

御内命致承知候得共、何分家督參府又々我等上京ト申候而は大粧之事ニ付、參府御猶予之処、関東江被 仰下候様奉歎願候次第ニ而、実々無抛処より事起り候、然処此節体之事ニ相成、此上は片時も早く発足いたし候社当然ニ候得共、越之伝言・書簡等之趣意甚不安心之模様故、一日も早く家督參府御猶予一条相運ハセ度義と存候、右通無之候而は我等発足も出来兼進退難致

心痛至極之事ニ候条、是等之如能々勘考存慮承度候事、  
 一越之伝言通相運ひ候は申迄も無之、倫理ヲ破り候義、  
 甚以不可然、殊ニ当夏於江戸、堀一条は第一此事ニ候、  
 然るを此節再彼方より申出候儀、何共不審千万之至ニ  
 候、能々勘考有之度存候、我等推量は前文三四ヶ条之  
 外ニ不出儀と被察評議承度候事、

一板倉出役一条別而不審之第一、且一・越不和、又は越・  
 土速ニ上京も同断之事、是以如何勘考有之候哉、

一前条家督参府御猶予一条も最早遅く相成候欤、然らば  
 無致方事候ニ付病氣申出之外有之間敷、就而は我等発  
 途延引も出来ましく彼是心配至極ニ候事、

文書原寸 縦一五・七種 横六五種

### 五〇三 軍艦製造等ニ付長崎へ見習生派遣ノ件

一今般御軍艦御製造并ニ魯西亞蒸氣罐<sup>（籠）</sup>製作ニ付、河野一  
 郎左衛門為見習御差出相成候へ、天祐丸銅庫取払茂  
 相兼候而至極難有奉存候、

一先日一寸奉入御覽候ダラキバンク絵図面九拾枚余右ニ  
 相添候、原書一冊銀錢九枚欤拾枚欤ト被存候間、御国  
 許江御在合無御座候へ、御取入之御都合御取計被下  
 候へ、折々伝習江追々書入等仕置度候、

一御覽之通りダラキバンク之装置ハいつれ之筋、兎共よ  
 り仕立不申候而ハ伝習無覚束候間、一日ニ而も早目御  
 差出相成候様、竹下<sup>（箱）</sup>清右衛門江も申遣置候間、右之趣  
 御含置被下、猶又御都合御尋申上候事、

一天祐丸銅庫製造ニ付而ハ丁度御覽之通 公義向ハ勿論  
 蘭人之都合、職人等之氣受も今成ニ而ハ至極之都合ニ  
 御座候へ共、御趣法方より之御下ヶ品等速ニ運兼、於  
 当所市中御買入等相成候へ、不容ノ御失費之事有  
 之込入候仕合御座候、御案内之通爰元之儀ハ 公辺向  
 キ蘭人等江致關係候儀も有之、色々入込之儀も御座候  
 間、是非御趣法之儀ハ中村庄助殿老人掛り被仰付候へ  
 共、今御老人御掛り被仰付被下候へ、追々申上候情  
 態等猶又能々相通候御儀も候半、乍恐奉存候、

文書原寸 縦一七・八種 横八〇・三種

三三 生麦事件ニ付英国ヨリ幕府ヘノ償金要求

十二万五千磅銀貨ニシテ六十二万五千枚

アドミラルル海軍提督 キュベル人 神奈川辺英人殺害ノ事

ニ付キ 日本政府ヨリ十二万五千ポンドステルリング銀

六十二万五千枚許 フ得ムコトヲ望ムベシ、若シ之ヲ得ザル時ハ直

ニ港ヲ閉ムトス港ヲ閉ツルハ交易ヲ止メ戦争ヲ始ムルヲ云フ、

古香港新聞紙ニ相見得候由御座候得共、実否之処ハ難

計御座候、新聞紙ハ虚説を出し候事甚タ多く御座候由、

又外ニシヤワ新聞紙ニモ英人殺害一条相見得申候得共

不足取事ニ御座候間不申上候、

文書原寸 縦二四・五種 横三三・六種

三四 生麦事件ニ付江戸町触

江戸市民避難ノ状況

三通

三五 学習院開筵ト学則

三六 一橋中納言ヨリ近衛閑白ヘノ呈書

英艦横浜渡来撰海警備ニ付帰府延引ノ件

(包紙ウツ書)(朱)

「癸亥」

三月七日

御書付

(朱)

三月十日、前殿下江一橋持参書付

此度、大樹上洛ニ付而は十日之間致滞京、帰府後二十日  
相立候而攘夷之談判ニ取掛可申段、兼而申上置候処、右  
様ニ而は事遅々ニ及如何ニ奉存候、加之今般横浜江英船  
渡来、手強く申立等有之、何時彼より兵端相開可申も難計  
候付、速ニ水戸中納言江戸表江差遣し、戦争相起候ハ、  
嚴重防禦為仕可申、若又平穩ニ事済候共引統談判通商相  
断可申奉存候、且亦戦争等相始め候得は撰海辺江異船渡  
来可仕も難計、就而は幸在京中之事故、今暫滞京ニ而御  
守衛向手配等仕候上致帰府度志願ニ御座候、此段奉申上  
候、

慶喜

殿下

文書原寸 縦一六・五種 包紙原寸 縦二七・五種

横 六五種 横 四〇種

揮可有之、公武御一和人心帰嚮之処置有之候上帰府候様、御沙汰之事、

文書原寸 縦一六・五種 横三七・五種

(別紙) 近衛様 一条様

九条様

文書原寸 縦一八種 横一〇種

吾只 加茂行幸ノ際御製二首 將軍へ下賜ノ御製一首

(朱) 「癸亥」

加茂

行幸之節

御奉納之 御製

朝夕に民安かれと祈る身の

ころにかゝる沖つしら浪

すまぬ井の水に我身ハ沈とも

にごしハせしなよろつ国民

加茂ニ而 大樹江被下候

御製

民草に露の情をかけよかけ

吾只 慶喜春嶽へ公武一和外艦防禦ノ御沙汰書

(端裏書) (朱) 「一癸亥」

姉小路持参書取

三月十日伝奏於里亭公家江申渡」

攘夷期限之儀ニ付

大樹公京師滞在十日之旨、兼而被

仰出有之候処、英船渡来、不待期限可及戦争、先日之形

勢と相反候世態ニ付、後見惣裁之内急々帰府防禦万端指

治まれる世をうけし身なれハ

文書原寸 縦一六・二種 横二〇・五種

○五〇 中山中左衛門書翰

攘夷御親征ノ件

宛名ナシ

五〇〇 本田弥右衛門ヨリ小松帯刀へ

久光公入京ノ準備ニ就テ

(端裏朱書)  
「癸亥三月十二日 本田弥右衛門」

三郎様益御機嫌能、昨日朝五半時兵庫へ被遊

御光着候段奉承知、恐悦御同意奉存上候、右之趣早速

近衛様

中川宮様江言上仕候処、別而御満足被 思召上候、左

候而

大樹公御滞京云々之条、高崎猪太郎江御申含め之御内

用、今朝

中川宮様江拜謁等を申上候而、

且

御直書一封も差上奉り候処、

大樹公今十二日御暇乞参 内迄茂被 仰出置候得共、

御朝議之趣被為在御延引之儀、去ル十日、別紙之通滞

京被 仰出、尤御日限もいまた

御沙汰無之、然処同日

幕府よりも一橋中納言殿より別紙一通被差出、 公武

一時ニ右之趣意符合ニ而幸之仕合、右ニ付別段

御両所様御尽力ニも不及、

三郎様御上京も御間ニ被遊御逢、無上幸ニ奉存上候、

御安心可被下候、左候而

宮様江被進候 御直書之儀、別段不被遊御返答、前文

之別紙式通被遊御渡候間、其段伏見駅ニ而也とも申上

候様、

宮様御沙汰ニ而候、左様被 仰上置可被下候、

一御着京当日 陽明家江被遊御参 殿候 思召ニ付、

宮様・一橋殿・越前侯御出会云々之儀、是又申上候処、



被遊御承知候、

三郎様御口上之内ニハ無之候得共、

鷹司閔白殿下ニ茂御出会不被為在候而は御不都合ニ可

有之被 思召候、猶

陽明前殿下尊慮も奉伺候様承知仕候付、則其段奉伺上

候処、尤御同意ニ而鷹司家・一橋家江は、自

陽明様可被仰進との御事ニ候、左候而松平春嶽様御事、

去ル九日頃より御所勞と被称御引入、幕役ニさへ御面

会も無之、昨日

加茂行幸之供奉も御勤無之候間、御申進相成候共、所

詮御参会ハ有之間敷 思召候間、御省可被遊との事ニ

御座候、右御引入と申事も内実ハ朝廷駕御之道を被失

候より生候儀と痛歎ニ不堪、拝面い細可申上候、

一私事御用之儀有之、

御中途江罷出候様被 仰付候処、此節

御上京ニ付ハ万端御用却不捨置、且被仰含置候御内用

之儀共有之、先日

中川宮様より、居残ニ而、誰ぞ 御中途江は差上候様

可取計旨 御沙汰も有之、其余一日茂難逃次第柄共御

座候而、不得止罷止候而高崎猪太郎差上候、尤大阪迄

御迎として罷り居候趣、前広より申上置候得共、右之

仕合故、何卒可然様御執成被下度奉願上候、今日も唯

今御屋敷江罷帰候儀ニ而、誠ニ奉恐入候得共、伏見迄

罷出御直々可奉申上候間、深此段奉頼上候、

一当地知恩院江可被遊

御着御都合ニ御取計御座候間、手当之形行、兵庫ニお

ひて被成御聞候間、い細取調へ申上候様、先日被仰越

趣承知仕候、前文申上候通、近日内外御用取紛、何分

申上候儀も行届不申候次第、甚恐入奉存候、凡被仰置

候ヶ条之儀ハ勿論、昨年

御上京之節之振合を以、諸御手当申付置、且又御賄被

下候て、都合ハ焚出シ御春屋之振合ニ而、諸人江ハ器

物ニ入付渡之筋ニ而、右式御取入等相成、其外守衛人

数は都而先より参り居候分も無親疎皆共院内江被召置

御門ニ而出入帳留いたし、見聞役相詰、其外ニ御番所

三ヶ所江守衛人数繰廻シ、兩人ツ、上番ニ而足輕中番

五人位ツ、被召置、御門刻限之儀ハ

御光着之上被 仰出候様奉存候而、右之張番所取柙置

申候、其他細大可申上儀段々御座候得共、御着之上可

申上候、

一 近衛様へ御参 殿之儀、御着京御行形ニ而候ハ、凡

何時頃可相成哉、暮時分ニ而も相成儀ニ御座候ハ、

翌日之方都合可宜との

御沙汰ニ而候、右ニ付伏見より直ニ 御参殿之御賦ニ

而手当可仕候間、一応知恩院へ御入被為在候上ニ候哉、

右之処御差図被仰越度奉存候、右御内用申上度急飛脚

差立 御中途迄差上候、何分御差図急御頼申上候、以

上、

三月十二日

京都

本田弥右衛門

帯刀様

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二四号文

書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・五種 横三〇七種

三二 近衛邸ノ会議ニ於テ久光公提出ノ意見書

久光公ヨリ朝廷及ヒ幕府へノ届書草案

別紙共

久光公ヨリ近衛家へノ願書草案

五一ノ一

亥 三月十七日 於京都 公武江差出候草稿

今般私儀奉蒙

御内命上京仕、輦下之形勢詳ニ觀察仕候処、

皇国之御危急且夕ニ迫リ候趣顯然相見得候ニ付、愚魯之

身を不顧、

公武之御重職方江存慮十分献言仕候得共、迎も御採用被

為在候御模様ニ無御座、慷慨嘆息之外無御座候、就而は

無用之小臣長々滞京仕候而は、却而

公武之御為不相成、讒口紛々と沸騰仕、終ニは於

御目前騒亂を生し候は、案中と奉存候、殊ニ攘夷御決議之上は、国元之儀三面之海岸、寸地も醜虜ニ掠奪不被致様、防戦之用意嚴重不申付候而は、御国威を奉貶候場ニ相当り、別而恐入奉存候間、不得止明日発足仕候、急速之儀御疑も可有御座候得共、右申上候外所存無御座候、是等之趣不惡御聞取被成下度、伏而奉願上候、誠惶誠恐謹言、

三月十七日

別紙

此節攘夷之嚴令承知仕候ニ付、夷舶一艘ニ而も国元江致碇泊候ハ、不及応接、早速加誅伐候所存ニ御座候、且時宜ニ依候而は、蛮夷為征討、軍艦差遣候儀も可有之候間、御聞置被下度奉存候、以上、

同日

五二ノ二

三月十九日

大坂より

陽明家江差上候書取

昨十七日御届申上候通、今日出京着坂仕候処、英夷国元江来舶之模様申来候、就而は修理大夫在国之事ニは御座候得共、未若年之故、行届兼候義も有之、六百年來御預之王土、聊ニ而も彼か蹂躪を受候而は、御国辱は勿論、奉対

祖宗之神靈無申訳義、恐入奉存候ニ付、一日も早く帰国仕、守禦之策略十分を尽し、必死ニ防戦仕、夷賊一人も不残加誅戮、数十代之奉報

朝恩度赤心ニ御座候間、無抛早々出船仕候、当時於

御膝下守衛は、

大樹公御滞留之上、諸国之大小名在京之事御座候得は、

御手薄之義も被為在間敷と、乍恐奉存候、且又関東応接之次第ニ依り、夷賊承伏仕候ハ、天下国家之大幸、無

此上御事と奉存候、其節は速ニ上京仕、奉謝莫大之

天恩度含ニ御座候、若免足後 御差留之

朝命被為在候御事も難計奉存候間、右之趣意宜御汲取被成下、

御都合可然様御執成被仰上被下度、伏而奉願上候、

誠惶——

文書原寸 縦一六・三糎 横六八糎 (表裏一枚書)

五一ノ三

〔卷〕  
〔亥三月〕

一今日ハ無腹蔵十分言上仕候間、忌諱嫌疑等御有捨願候事、

一攘夷御決議輕卒之儀不可然事、

一後見惣裁ヲ奴僕之如く御対遇、浮浪藩士之暴説御信用

尤不可然、且於御膝下法外之義有之、心ヲ其俣ニ被召

置候義 朝憲 幕令も不行姿、只々乱世之基、嘆息ニ

不堪事、

一右ニ付暴説御信用之堂上方速ニ御退、浮浪藩士之暴説家ハ幕より処置可有之事、

一宮・前関白・中山・正親町三条等以前之如く御委任等

之事、

一(重徳)大原御有免之事、

一一天之下の大政征夷江御委任之事、

一長州父子所存、後見より質問之事、

一御親兵一条之事、

一無用之諸大名藩士等都而帰国之事、

一主命之外藩士江御面会無用之事、浮浪ハ尤不可然事、

一主家亡命之者御信用不可然等之事、

一英夷一条、諸夷一条、

一神宮御守衛として親王方被差遣候義、尤不可然事、是

は其近国之大名江被命至当之事、

一浮浪藩士之心底能々御勘弁有之度事、

猶、同文書ノ後半部ハ五一ノ一号文書ト同文ニ付省略ス

文書原寸 縦一〇・五糎 横二七・五糎

三三 伊達伊予守より島津久光公へ

袂別之辭

〔包紙ウツ書〕  
「島津老明公

内用

予島老送

〔封紙ウツ書〕  
「薩府老英忠明公

密用

伊与守

弥御清穆奉大賀候、扱昨夕は初而得御面晤候処、如旧知

己御互ニ心緒吐露、本懐之至、卓論高議御懇示、感佩多

々大愉快、不可忘奉存候、

公武御為至誠懇篤超然挽回之奇策御施為難被成候段、時

運とハ乍申、切齒痛歎泣血申上候、尤尚又

神州遠国之至候事故、此上被竭御鼎力候処ハ、伏而奉仰

頼居候、弥明日ハ御発軔ニ御決断御座候や、相伺度存候、

御日合延ひ候ハ、如何ニも一面識御離別も遺憾ニ付、

今一度得拜眉度と存居候、扱此両品持越居候条、聊御饒

別表寸志迄進呈仕候、御座留候ハ、大慶之至御座候、恐

惶謹言、

晩春旬七

二伸、時下為

皇国御保護被為在度奉祈候、昨日も申上候通り、此  
度ハ最早不得拜芝候とも、又再会之程必奉期居候、

頓首、

文書原寸 縦 一七種 包紙原寸 縦 二八種

横六一・五種

横二〇・五種

三三 本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門へ

久光公ノ帰国差止ノ件

〔封紙ウツ書〕  
「御中途

中山中左衛門殿 京都 本田弥右衛門

御内用

〔朱〕  
「癸亥 三月十八日」

御発駕後、別紙之通到来候、左候而引続キ御使者林日向

介参上、前関白殿下昨夜より 御配慮ニ而、今日は

中川宮様 関白様被遊 御出会

良節様

ノ

┌

御前江御談合被遊御趣被為在候間、是非今日之御発駕ハ、  
御延引御座候様との趣被仰進、右御使者并別紙之趣も

弥御安全奉賀候、然は 三郎様今日御発途之儀、鷹司殿

陽明江私参 殿之中途ニ而行逢候付、今早朝御発駕ニ而  
候間、跡越之事故、無致方段申答候処、何分御中途迄也

下井中川宮等 三郎様江可被 仰談御趣意被為在間、指  
懸り今日之処右御発途之儀、御延引ニ相成候様、殿下宮

共、前条之趣申上越呉候様、類ニ承申候間、此段別紙相  
添早々申上越候、何分私参 殿之上、御直ニ奉承知、右  
之御次第例ニ寄り、猶亦早々可申上候、右御届如是御座  
候、以上、

等より之御口上從此御方御伝ニ相成候様、被仰進候ニ付、  
此段早々申入候、猶引統御使可被進候へとも、指急先申  
入度、宜敷御取計可被下候、早々、以上、

三月十八日

三十八

文書原寸 縦一六糎 横九一糎

文書原寸 縦一六糎 横四三・五糎

三四 進藤式部権少輔ヨリ本田弥右衛門藤井良

節へ

三五 二条城ニ於テ將軍ヨリ諸大名へノ達書

將軍へ大政御委任ノ件

久光公ノ帰国引留

幕府ヨリ十萬石以上ノ諸大名へ禁裏御守  
衛兵差出ノ件令達

(封紙ウツ書)  
「弥右衛門様」

式部権少輔

(端裏朱書)  
「亥三月」

写

大樹帰府之事、段々以

勅諭被 召止候事、先日

御沙汰被為在候通、將軍職万事是迄之通御委任ニ候、就

而は諸大名以下守衛万端指揮於被致は、

御安心ニ候事、事ニ仍候而は、

御親征茂被為遊度程之 思召候事、

三月

畏御請奉申上候、

御諱

右於京都三月廿一日在京之大名 二条御城江出仕、  
於大広間老中列座被相達候由、

大目付江

禁裏 御所為御守衛、十万石以上之面々より、老万石ニ  
付家来者人ツ、之割ヲ以、身体強壯行状宜勇幹之者相撰、

京地江差出御警衛為相動可申候、尤取締向は主人々々ニ  
而厚く致世話、一か年宛ニ而交代為致可申候、

右之趣

御所より

御沙汰之趣も有之候間、被得其意、早々人撰差出候様可

被致候、委細之義は牧野備前守可被承合候、

右之趣拾万石以上之向江不洩様可被相触候、

三月

右三月廿九日老中水野和泉守(忠勝)より於京師相達ス、

文書原寸 縦一七糎 横七九・五糎

三六 近衛忠熙卿ヨリ島津三郎殿

久光公ノ上京ヲ促ス

〔包紙ウツ書②〕  
御直書

〔朱〕〔紙〕三ツ同シ  
□ □

亥四月十四日達ス 御請書済

□

┌

〔包紙ウツ書①〕  
極内密早々

島津三郎殿 忠熙  
几下 忠房

〔朱〕誠三ツ同シ〕

〔封紙ウツ書〕  
極内密

島津三郎殿 忠熙  
几下 急々

〔朱〕誠

尚々大乱書御推覧希入存候事、

春暖之節弥御勇猛珍重候、抑去ル十四日ニハ御上京ニ而、  
久々面謁申入、喜悅之至ニ候、併誠ニ急速御出足、何共  
〳〵申条無之痛心候、前夜ニ初テ御出足之趣承知致、誠  
ニ驚ニ入、何も不取敢中川宮へ談合、中川宮・忠熙等よ  
り関白江申入、段々苦心之仕合、何分何事慕取兼、其夜  
モ天明ニ及、実以苦心難堪、忠熙家来ヲ智恩院迄差向、  
段々申入度儀も在之候処、最早御出立後ニ相成、甚不都  
合〳〵、何共〳〵苦慮無限候、夫より段々中川宮共々ニ

談合、関白江申入、更ニ早々御上京之様 御沙汰ニ相成  
候へ共、最早御出帆後之趣、本多・高崎両人下坂仕候へ  
共、右故空敷立戻り、甚々心痛無限候、度々以

勅書、段々 叡慮之程伺候ハ、実以何共恐入候事ニ而  
何レ其許今度御上京ニ相成候ハ、昨年 叡決之通守護  
職辺被 仰出候 思召之趣、然ル処、当節邪魔已入込、  
甚々御痛心之趣、委細ニ

御沙汰共被為在候御事ニ而、深々恐入候事ニ候、先々此  
頃ニ至リ、慕激之堂上モ大ニ和キ至当之論モ相発シ、少  
々ハ宜模様ニ候、尤就中慕激之人体ハ

朝廷ヲ退キ、其後行方知レ兼候事ニ候、併却テ穩ニ趣候  
哉ト、聊安心之事ニ候、何分方今忠熙ニハ人望ヲ失ヒ、  
何事ヲ申出候共、更ニ人々不応、唯々致方無之候、内  
覧之蒙 仰居候へ共、誠ニ有名無実、何事も被 仰出後  
他より承知仕、是ハ甚不相濟御事ト存候儀、毎度之事ニ  
而、実ニ名有テ実無キ役人トハ忠熙之事ニ而、逆モ勤仕  
之詮無之、其上持病モ時々相発、苦心不一方仕合、内



覽辞表差出、段々願立候処、一昨夜願之通被 聞召、深々畏々安堵之事ニ候、最早是よりハ天下之形勢如何相行候事哉ト御案事申上、拜見仕候已ノ外無之と決心之事ニ候、其許昨年格別之御忠節ヲ被立候故、屹と御賞も可在之ト被存候、右辺モ如何ニ相成候事哉、何分最早役人ニ無之、只々形勢已拜見ト決心之事ニ候、何分実々 朝廷(幕)之処、慕ハ少し退き事故、何卒此上之処、 朝憲相立候様、御上京御周旋御忠節相立候様、分而申入度存候、只々御上京無而ハ、御不忠無限候、仍早々申入度存候事候、

三月廿八日

二白、

大樹公ニ茂過日ハ御届捨ニ而帰府之趣ニ而、誠ニ大混雜し候、俄ニ参 内被 仰付、段々之以 叡慮滯在之様 御沙汰ニ相成、御受被申上候事ニ候、何分ニも大樹帰府ニ而も致候而ハ、折角即今御一和之立掛ケ候処、実以恐入候事ニ候、以上、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第二五号文

書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一八種 包紙原寸 縦 三三種

横二〇九・五種 横四四・五種 二枚

五七 近衛忠熙卿ヨリ久光ノ上京ヲ促ス書

本文書ハ五一六号文書ト同文ニ付省略ス

冊子原寸 縦二七・五種 横二〇種 三枚

五六 近衛忠熙卿ヨリ島津三郎公へ

貞姫婚儀ノ件

(包紙ウツ書)

島津三郎殿 内々 忠熙

几下

〔朱〕 〔亥三月廿九日〕

〔封紙ウツ書〕 島津三郎殿 忠熙

几下

〔朱〕 〔朱〕

兎角不正之時令ニ候、弥御勇猛珍重存候、誠ニ過日も申

入候通、時勢何共く恐入候儀ニ候、先日速ニ御出立之儀、実以痛心ニ不堪候事ニ候、極内種々申入度儀モ有之、昨年来御待申入候詮も無之、残懷難申尽候、日夜苦心ノミニ候、何卒く御上京之程、偏ニくく希度事ニ候、如何成行候哉と、実ニ悲歎之事共ニ候、忠熙ニも内覽辭退願之通被

聞食、諸事御免ニ相成、其段ハ畏入候、御吹聴申入候、扱貞姫方引取之儀、何卒早行ニ致度、良節事<sup>(藤井)</sup>帰国ニ付、委細申含候、御聞取希度候、か様之時勢故延引致候テハ、却而大延引ニ成候半と甚心急、御都合も可有之なから、何卒暑氣ニ不相成内、御旅行ニ相成候様致度、御勘考希候、何も荒々良節下向急ニ成候故申残候、所勞頭痛氣大乱書御推覽可給候也、

三月廿九日夜認

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二六号文 書卜同文ナリ)

文書原寸 縦一五・七糎 包紙原寸 縦三三糎

横 八八糎 横四四糎

三九 兵庫其他警衛諸藩ノ任免

薩藩ノ兵庫警衛ヲ免ス

(續實朱書) 一癸亥 三月晦日

松平三河守

摂州湊川辺より武庫川迄御固被 仰付候間、守衛向敵重可被相心得候、尤場所之儀は於彼地割渡可申候、亀井隠岐守・中川修理大夫も同様被 仰付候間、申合可被相勤候、且又摂州・播州境川より湊川辺迄之御固酒井若狭守江被仰付候間、為心得相達置候、

亀井隠岐守

同文言

中川修理大夫

同文言

酒井若狭守

摂州・播州境川より湊川辺迄之御固被仰付候間、守衛向其外同様、

右亥三月晦日水野和泉守様より家来御呼出之上御達、

松平大膳大夫

右兵庫表御警衛御免、

松平(藤倫)三河守

酒井(忠氏)若狹守

亀井(益重)隠岐守

中川(久昭)修理大夫

右撰津・播州境川より武庫川迄御警衛被仰付、

松平大膳大夫

右対州表御警衛被仰付、粮米・援兵差向方之儀共被仰付候、

右之通三月晦日被仰付候旨承得申候、

(米)「突亥」

文書原寸 縦一六・三種 横五一・五種

三〇 本田弥右衛門ヨリ島津主殿等へ  
久光公御上洛 佐土原侯帰国ノ件

(編裏朱書)「突亥 三月晦日」

以飛札申上越候、

三郎様益御機嫌能被遊御座、追々兵庫 御着船之御儀と  
恐悦奉存上候、然は島津淡路守様此程御上京ニ而、  
(忠寛)

三郎様御上京を御待之処、英夷一条ニ付、諸大名御暇被  
仰出、御同人様も昨日御参

内被仰付、昨七時半過、伝奏野宮殿より御別紙之通御書  
(定功)

付を以被仰出、然処再同日夜七半時野宮殿より淡州御家  
来御呼出ニ而、今晚御別紙之通、更ニ被

仰出ニ相成、淡路守様より早速私方江被相渡、左候而御  
同人様より可被仰進管候得共、私方より早々申上遣具候  
様御頼ニ而候、私ニも大坂江罷出、御迎申上ル賦御座候  
得共、何分兵庫江此形行申上置度、前広申上越候、尤下  
之関江も別段申上置候得共、御間ニ逢候程も難計、為念  
此旨申上候間、御別紙式通被差上候儀共、可然様御取計  
可被成下候、以上、

三月晦日

京都

本田弥右衛門

兵庫御本陣

島津主殿殿

中山中左衛門殿

文書原寸 縦一五・八糎 横九二糎

三三 松平春嶽政事総裁免職逼塞ノ朝命

(端裏朱書)  
「癸亥」

松平春嶽

名代

田付主計

松平春嶽義御政事総裁職御免相願候上、御許容無之處、  
勝手ニ当地発足致候段相届、且引戻之義相達候処、否之  
御請茂不申上、旅行帰国致候段、如何之事ニ候、  
叡慮を以総裁職被仰付、既ニ御免願達  
叡慮、御聞届無之内前達候始抹、对 朝廷別而不束ニ付  
急度茂可仰付之處、是迄出精相勤候付、出格之御有免を

以、総裁職御免、逼塞被仰付候、

右於和泉守旅宿同人申渡ス、周防守列座、大目付岡田

(長常) 駿河守、御目付松平伊次郎相越ス、  
(甲) (乗接)

文書原寸 縦一六・五糎 横四〇糎

〇三三 茂久公ヨリ英艦ノ襲来ニ備フベキ訓諭

二通

三三 山階宮ヨリ島津久光公へ

御面談ノ件

弥々春暖相催候処、益御安福令恭賀候、同衆無事、乍憚  
御休意可給候、抑今度御入洛、千万々々御苦勞令存候、  
天朝ニも無々御満足ト奉恐察候、扱  
御用多とハ存候へ共、何卒ノ同衆方へ御入来希入令存  
候、久々而  
公私種々御咄し申入度候間、拝眉伏而令渴望候、書外期  
拜面候也、

恐々謹言、

三月

二白、不序之時令、随分く御加養希入候ハ、早  
春如前例、急々書而年始一品令奏上候、定近臣沙汰  
之事ト存候、修理大夫殿へも同断、年始一封一箱令  
奏上候、是亦同断ト存候、初春は表より御使而、年  
頭如例御懇命忝存候、公私愆而拝眉共令書略候也、

敬白

文書原寸 縦一七・二種 横八二種

三四 丹生助右衛門ヨリ彦根藩情探索報告書

〔表紙〕  
上 上

彦藩動静之儀ニ付、去月廿三日付を以、大頭御届  
申上候後、尚又内密致探索候次第左条ニ申上候、  
(井伊直憲)  
一掃部頭殿亡父重罪ニ付、追々本領被召上、且慎被仰付  
候処必至と、愁歎ニ被差迫、既ニ一往は自殺被致度格

護ニも被相及候処、役筋様々申有メ、右時機ニは不至  
由候得共、昼夜一向歎息之趣ニ付、一体之藩風只狼狽  
之姿ニ而、家財諸道具類を売却いたし、金を畜へ、専  
国替等之心構いたし、然共中ニは志氣を震ひ、此上御  
取縮メ、国替等之時機成立候ハ、手を空しくハ難成  
京都へ強訴位ハ可致なと申者も有之候得共、当分相慎  
ミ鎮静いたし候、

(付巻)  
一本文ニ付、側役中井弥五八混と倍従いたし、主君之歎息を  
慰め周旋之者ニ御座候、

一慎中城門は不及申、家中一同大門メ切、小門より出入  
いたし、其外寺院町家迄も同様ニ而、士分ハ勿論仲間  
小者ニ至迄、長髪いたし、役場之儀茂差掛用向有之分  
出勤いたし、余ハ不致出勤、城内出入蔽敷相改、見付  
より内町江ハ行先慥ニ不相知候へは通し不申候由、  
一藩中士分又は輕輩之内、近代至誠組と相唱、  
勤王有志之者共追々有之、去年八月初旬頃、右之内四  
五拾人申談、建白取仕立、番頭岡本半介宅江差越、即

刻主君へ披露相遂呉候様、若否哉於有之は、即座ニ一同可致切腹旨申入、其時分半介要務不相預候得共、右通遮而相逼り候付、無抛押而及言上候処、掃部頭殿許容有之、夫迄専政事致取扱候家老木俣清左衛門・庵原助右衛門、直様退役蟄居被申付、右代三浦内膳取扱候様、右半介儀も同様召出、追々旧弊及変態、左候而前文至誠組頭分之者ニは、藩中一同教導方被申付、若不得心之者は右頭取決着ニ而打捨候様、殊之外威勢を被持せ候趣ニ付、追々可致一新哉ニも相聞得申候、

但藩中紫白之二色禁制候得共、右教導方之者柄糸又ハ下緒類相用候儀被差免候由、

一岡本半介事、亡主先年大老職被仰付、家中一同恐悅申出候節、半介ニ茂同様罷出、其場ニ而国政さへ届兼候而、天下之御政事不存寄事ニ候、早々御退役可然申出、殊之外蒙不興、一往蟄居いたし居候処、其後再勤、去秋家老江被召出、無程熊井某と変名いたし、表向ハ京都鞍馬口屋敷會津家江引渡、金談一条之筋を以致上京、

其後国元騒働も不差構、内事は是非求手寄、旧領復し度右願意一定ならず、越前より湖水へ水道堀割、国役相勤度、又は当主隠居相願、罪を謝して、他家より養子家督安堵いたし度、或ハ武器不残献上いたし度など、都而其事情、尚此後減石又は国替被仰出候半欵と、深く相恐れ、如何様ニも取すかり、本領安堵いたし度趣意ニ相聞得申候、

(付箋)

一本文越前敦賀より湖水へ七里計之間川筋有之、右堀さらへ候得は加賀米廻船落中格別融通相成候付、先年より京都役向度々吟味有之、見分ニも相及たる由、左候へは江州米下落ニ付、彦藩役筋共より様々賄賂及手入、前文掘わり方取止相成候場所之由御座候、

一長州様ニは往古井伊直政江重恩有之、其時分格別懇意を被結置、何そ御血縁は無之候得共、御入部御家督等之節は、于今不絶、国元より国元江互ニ慶祝之御使者等も被差立、別段之御会釈柄ニ候由、然処近年井伊家京都警衛六門江番所被相建、昨年長州御上京之砌、右

番人下座式礼等不致、不敬ニ付長藩ニ而内々評儀ニ被

相及候哉、何そ表立御使者ニハ無之候得共、同藩有志

之者共屯兩人、彦根城下江差越、自己之所存を以彦藩

心得方及尋問候処、其筋は勿論前件半介ニも出會、右

不敬之儀を厚く挨拶申述、左候而殊之外丁噂を尽差返、

其後右半介より長藩番頭穴戸九郎兵衛へ掛合候趣は、

右挨拶之使者として、内々上京、且国事周旋いたし度、

如何可有之哉之旨、掛合候処、右周旋方等ニ付、預談

合ニ候儀は決而不相叶候得共、内々上京、其身周旋之

儀は苦かる間敷、穴戸返答ニ付、半介致上京、長藩江

右使者相勤候節、穴戸屯人ニ而面會いたし候儀、外聞

嫌疑を恐れ、同藩兩三人列席ニ而応答いたし候由、

(付箋)  
一本文半介事、伏見街道五条下ル桶屋何某隠居当時醍醐殿六

位板倉筑前介、同人弟境町四条上ル江馬某、右兩人本彦根

産之者ニ而、其因ニより様々周旋いたし、且右両所問へ寄

宿いたし居候趣ニ御座候、」  
一当分彦根并長浜辺之童謡に

イ、子ナケ／＼ナク子ハカワイ

ヤカテモリ子カダイテヤル

右もりうた専流行いたし候付、長州之族より養子相続

可有之なと下説いたし候由、

一彦藩一同去夏頃より俄ニ武芸相励ミ、百姓町人たり共

望之者ハ稽古場江出席いたし候様達有之、執行いたし

候得共、当分懐中相休候由、

一同藩下評ニは、能場所計拾五万石被召上、此末食物ニ

差詰り候は眼前候間、死物狂ハ當時を可申欵、水戸と

薩摩と同腹ニ而、此度は薩摩より申出、ケ様成立候な

といつれも我悪事は捨置、恨之数々申合候由、

一先書ニ御届申上置候、右同領内強富者共へ借金被相及

候儀は、同様相聞得候得共、軍用金之義は過分積金有

之、右積立之次第は家中知行高巻石ニ付銀七匁ツ、奉

納銀と名付年々致上納候、往古より之趣法立ニ而、于

今廃シ不申、別段被置置候由、  
一当正月十二日、家中一同城内へ呼出、銘々江達有之候

趣、左之通、

今日被仰渡候儀ハ其思召候処、下々迄不致承知候而  
心得違之者出来候而ハ不宜候付、乍此節被仰出候儀  
可有之候間、其旨相心得可被申候、此度從公辺御先  
代様御勤役中之儀ニ付、御咎被仰出候、就中公武  
御合体ニモ差響、被為腦(惱カ)

宸襟候御儀絶言語ニ恐入候事ニ而、我等若年ト申  
是迄承知不致罷過候段、不束之至後悔不過之候、実

ニ天地ニ身を容ヘからざる心地ニ而、既往ニ不可陳  
候ヘハ、此上ハ我等身命ニ限り士民を撫育し本ノマあい、

武文之道を研究し、何時ニ而茂国家之御大事之節、  
上下一致之力を戮セ、粉骨碎身して無二之忠節を表

し、直政祥寿院様・直孝久昌院様之御遺勲を継来り、今日之  
汚辱を雪ぎ度存念ニ候得共、何分若年不肖之我等、

教導撫育も行届兼候ヘハ、各初家中一同補翼之力を  
借、我等志願相進候様、精勤頼所候、尤当今之時勢

天朝公辺之御趣意堅く相守、尊王攘夷之大義厚く

相心得候儀專要候、将亦今度被仰出候儀、士民之内  
吾人ニ而も自己之存込を以心得違致し候而ハ、我等  
之不為と相成候間、家中末々在町ニ至迄、我等今日  
之存念告知しめ、万事謹書ニ罷在、自分職業無油断  
相助ミ、赤心報国之外他事無之候間、右之趣意厚く  
心掛、決而心得違不致候様、呉々も頼存候事、

尚又国家之御变革之折柄ニ候得ハ、此末何事ニ而  
も

皇国之御為筋ニ相成候事も存付候ハ、身分差別  
無之、早々可申出、依事柄ニ末々之者たり共、其  
手用向可申付事、

一去年十二月廿四日、彦根并長浜其外へ触書、左之通、

此度難決之者江米札救出度願申上候処、御免有之候  
間、当分借救實度者有之候ハ、半紙横折ニ名前相  
認、明廿五日中午指出し可申候、此段申渡候、

宝村某

右は全く彦主より之取計ニ候得共、慎中故他名を借、



民心を離さる策と相聞得申候、

一右同月町在へ左之通、

他所之者指置候儀へ勿論、無届ニ而止宿為致候儀無  
之様、役人共組人別時々取調、相違無之様可致、

尚又町々廻り方へ無油断相廻り、若少ニ而も怪數者

入込候へ、如何様ともいたし取留置、可訴出候、

一去秋京都警衛御免被仰出、引統領地五万石被召上候、

場所へ蒲生郡又へ神崎郡之内ニ而、村數百六ヶ村有之、

至而内福之百姓商人共余多罷居、領主へ借上金等も過

分有之、右五万石ニ而正米貳拾万石余取納相成候付、

彦根納戸蔵と申伝候場所御座候由、

一去冬被召上候拾万石は、犬上郡之内長浜方限ニ而、御

領預所迄被召上、右長浜之儀へ縮緬并蚊帳等過分産物

有之、縮緬壹疋ニ付運上銀四匁ツ、蚊帳壹張ニ付同

四分ツ、此金年分ニハ老万千兩余ニ相及、其外ニも

品々運上有之、前条蒲生・神崎へ続而能場所ニ御座候

由、

(付箋)

一本文蒲生并神崎郡之民を先書ニ犬上郡と申上置、不束之至

奉存候、

一木保清左衛門知行高老万石之内、七千百石取揚、残り

貳千九百石被下置、悴繁之進士佐と改名、家老被申付

候由、

一長野主膳跡知行高四千石之内、三千百石取揚、残り九

百石被宛行候由、

右両条当正月廿九日達有之、其外一藩之知行高并扶持

米等格別減少有之、高老石ニ付四斗俵壹俵之割ニ御座

候由、

一家老貫名筑後儀は、亡掃部頭殿違腹之兄弟ニ而、去秋

より上京、鞍馬口屋敷江相詰居候得共、當時在彦いた

し、随分人望も有之、勢ひ有者之由、右筑後并岡本半

介儀へ藩中之骨と相聞得申候、

一京都鞍馬口彦根屋敷之儀へ、先達而会津へ引渡有之、

同所川原町江屋敷壹ヶ所所有之候得共、至極手挾ニ有之、

當時番人共貳三軒住居迄ニ御座候、

右件之通一体之進退事情定らす、当分動搖不相見得候得共、慎限日も満テ政事之沙汰相成候節、是迄之物成とハ格別減少ニ付、衆儀約り兼、變動いたし候儀難計、且右一藩ニ不限当時京撰追々物騒之趣相聞得候付、乍恐幾重ニ茂

御身辺御警衛向肝要之御時節柄と奉存、此段申上候、以上、

亥 御徒目付勤  
丹生助右衛門

冊子原寸 縦二七・二種 横一九・五種 九枚

三三 丹生助右衛門ヨリ藩庁ヘノ届書

諸国ヨリ毎年京都ヘノ入米調

一米貳拾四万石

俵ニして六拾万表(俵)

但四斗入

内

一七万俵

右彦根領より例年出米御座候処、昨戌年ハ貳万俵位売出候而、其後払米不致候、

一貳万俵位

右郡山領より例年出高、

一八千俵位

右仙台領より同断候由御座候得共、昨年払米無之、

一右同俵位

右尾州領より同断御座候得共、昨年売米無之、本行

員数買上有之候由、

一壹万俵位

右淀領より年々出高、

一七八千俵

右三州吉田領より右同、

右之外諸侯方領分并商人売米、昨戌年相除一昨酉年迄

拾ヶ年引并シ、凡本行通御座候、

一若狭米貳万俵位

右廻米いたし来候処、近年貳千俵位差廻候由、

一 江州米之儀は余国へ売米堅く御停止之由御座候得共、

相場次第ニ而伊勢并美濃辺江出米いたし候哉ニ御座候

一米貳拾貳万七千石位

但老日六百三拾石ツ、

内老日百五拾石ツ、

ノ五万四千石

右伏見届

右大坂堂島米問屋大和屋彦七外ニ貳拾軒余之者共より

日々伏見并京都江積登候定規ニ而其余差登候儀は町奉

行前より差留候由、

一同拾貳万石位

右京都近在年々出来高ニ御座候由、

一 丹波米前条員數位相廻由御座候得共、しかと分兼候付、

追而取調申上候様可仕候、

右は江州其外近国より京都江廻米、

右之通承得申候間、此段御届申上候、以上、

亥

御徒目付勤

三月

丹生助右衛門

文書原寸 縦一六・五 横一〇六 横

三六 伏見ニ於テ久光公申渡

英艦襲来日英戦争ノ件

(端裏朱書)

「癸亥三月於伏見申渡」

今般英夷軍艦横浜江渡来、重大之事件申立、於幕府御許容難相成趣之由、畢竟去秋生麦一条と相聞得候、就而は当家より事起り

皇国之御大難成立候条、彼より強暴申募り、兵端相開候節は、天下国家之為抽他藩、一統粉骨碎身夷賊誅伐有之度存候事、

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第二卷第二五五号

文書ノ一部ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二 横四五・五 横

三三 本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門大久保一

藏へ

近衛前関白ヨリ久光公へノ書翰

〔包紙ウツ書〕  
中山中左衛門殿

本田弥右衛門

大久保一藏殿

文書原寸 縦一四・二種 包紙原寸 縦二八種  
横五〇・五種 横二二種

大久保一藏殿

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第二九号文  
書ト同文ナリ〕

〔朱〕  
「癸亥四月朔日 京」

御直書入御封書一通

前関白様より

三郎様より

右は去ル廿七日參

殿仕候処、早々相達候様可取計旨 御沙汰被為 在候付

今日急飛脚申渡差立申候間、可然様御取計被下度、此段

御間合申上越候、以上、

亥

四月朔日

京都

本田弥右衛門

中山中左衛門殿

三三 本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門大久保一  
藏へ

京都守衛兵ノ件

〔編纂朱書〕  
「癸亥四月二日 京本田」

先便申上候、

禁闕御守衛人数云々一条、何分早目取究申上候様、尤其  
後度々御用ニ而、仰出之日より廿日之内差出可申旨も奉  
承知候間、遠国之事故、早々申越置候付、仰出通廿日之  
日数ニ而限りて御受ハ出来不申之旨申出置、其通坊城家  
ニ而御聞濟相成、且諸藩之例ニ倣候而、當時在京之人數  
を以、精撰まで之間差出置候様との雜掌より内差図有之  
候間、其通取計置申候、何分御決議之上、御差図有御座

度奉存候、最早御吟味も被仰越候儀と奉存候得共、為念  
右御達振之形行、猶又申上越候、已上、

四月二日

京都

本田弥右衛門

中山中左衛門殿

大久保一蔵殿

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三二一号文  
書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・七糎 横七二・五糎

三六 本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門大久保一

蔵へ

合二通

久光公帰国後ノ京都ノ形勢及堂上六十八人ノ  
献言書

五二九ノ一

(端裏朱書)

「癸亥四月二日」

当地形勢之儀ハ日々相変、取究何共難申上候得共、今  
日まで之処大略申上候、

御発駕後前便ニも申上候通、御留メ之事類ニ相起候得  
共、今ニ至りてハ夫も相止候模様ニ被伺候、

一尾州前巫相様  
(徳川慶勝)

公武一和之篇、当時之弊を御改之御周旋有来候処、

御所御献穀十五万石之賦、多少之論并生麦一条幕府へ

御任せ、全御委任無之辺より大失望ニ而、三五日跡即

日御暇帰府之願相成処、御許容なく滞京ニ而候、然処

堂上方ニも高松殿(保志)を始六十八人別紙之通上書有之、引

続キ参政・寄人等之儀不服、御取止之事申出候賦之処、

尾州之一条ニ而後楯空しく相成故欤、上書限ニ而参政

云々之建白ハ、今日迄茂寂として不相聞得、宮ニも

大ニ御楽ニ被思召候処、右之次第、乍然六十八人も別

段御卓見有之御方ニ而もなく候故、たとひ此説を御採

用候共、是を列中より御撰挙ハ不被成、一参政を除而

又一参政を生候ニ至へくとの

宮思召ニ而候得共、前文通今日迄為何事も無之候、

一来ル四日、石清水

行幸あるへき御治定之処、去ル廿九日夜、俄ニ  
思食旨被為

在、御延引被 仰出、右ニ付ハ參政其外議論沸騰色々  
候得共、何分

断然御延引相成候故無致方、又此末如何可相成や、此  
一条ハ世上之風評、若も

行幸有之時ハ、不容易筋ニ粉々申居候折柄、先安堵之  
思ニ御座候、猶曲折ハ誰そ帰国之上、情実詳ニ口演可  
申上候、無左候而ハ紙上ニ難尽候、

一今日ハ 大樹公參

内被 仰出、於御学問所御間之物御相伴御料理被下と  
申事ニ而、御酒宴を給り候之格を、右通名目ニ而

宮始奉り、一人三公御參之筈ニ而候、

(慶應)  
一橋公御憤励種々御献言之内、

中川宮を関白職之場ニ万機御知司之事并諸藩守兵之御

総督を、

宮江御引受之処、

將軍より献言之賦、一昨日より議論一定いたし、左候  
而

大樹公ニも御治定之上御帰府と申論決之由ニ御座候、  
一大樹公より 宮江御大刀備前御献進、御拵料式百金相

添候得共、金ハ御返却相成候、一橋公御使ニ而御持  
越ニ而候、其余瑣々たる事件も種々御座候得共、申上  
候程之事ニも無之候、先右等之趣早々申上越置候、追  
々御注進可申上存候、以上、

四月二日 京都 本田弥右衛門

中山中左衛門殿  
大久保一藏殿

(本文書ハ「鹿児島史料 忠義公史料」第三卷第三〇号文  
書下同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二種 横一八二種

五二九ノ二  
(端裏書)朱  
「一癸亥」

三月廿八日堂上六拾八人連署被差出候書面写」

文書原寸 縦一八種 横六二種

御時勢不穩候ニ付

御朝議之大意光有以下一同不願恐懼相伺候ニ付、去月廿八日以来之

御朝議以御書取被

仰渡、一同畏入拜見候処、

公武数度之御往復於

觀慮格出之御慈憐於幕府茂遵奉仕、一端之不正之取計深恐懼之旨、言上候趣ニモ被相伺候、左候得は君臣之名分相立候儀ト奉存候、然ルニ何欵御差懸之事モ被為在候而は如何と恐入候、国家御安危御切迫之御時節、殊以攘夷期限之折柄ニモ候得は、一日モ早ク

公武御協和之程何卒一同奉歎願度候、左候は大樹初有志之諸藩等遵奉致候ハ勿論之儀ト存候、実々

国家危急之時ニ候得は弥

公武御隔絶無之様ニ存候儀ト、同志一同不願願上度候也、

言 税所容八ヨリ中山中左衛門へ

久光公帰国後ノ京師ノ情況

（端裏朱書）  
一 癸亥四月二日 京 税所容八」

一 御下向後之風評格別申上程之儀も無御座候、越前は廿

一日届一ツニ而発京、容堂ハ廿五日帰国、

一 廿三日中山侍従・久坂玄瑞同道亡命之由相聞得、段々

探索仕候処、廿八九日頃、玄瑞は弥在京無相違儀承得

申候、定而一緒ニ出、坊主丈ハ帰京為仕ニ而可有之欵、

中山ハ未所在相分不申候、摩耶ニ巢を構候儀、必定トの説も有

一 来四日、八幡行幸相決候処、廿九日御延引、初より宮御不同意ニ而

段々被仰立趣有之候得共、既ニ御決定相成居申候由、行幸ニ付御暴発之淨説御聞相成、廿九日朝より夜ニ掛て終ニ御延引相成申候

一 右雜説一橋江廿九日夜 宮江推参、関白云々、親兵惣督云々之儀申

上候序ニ、

宮より被仰入候処憤然ト勃起、早速今夜より京中は手を付、摩耶は外廊を取囲、御沙汰を可相待旨御受申上

夜九ツ過退 殿、当夜より京中暴論之徒  
則間者を入候

一行幸再取興候勢、既ニ三条より 宮江申上趣有之、

宮大ニ御立腹、三条屈服、昨日迄は先御延引之方ニ候

得共、此儀ハ未何様共極決出来不申候、長門守供奉之心組  
公武より御召

も無ニ 大ニ紛々擾々、仍而御延引被仰出ニハ相成候得

共、例之腹立ニ又いか様相成候歟も難計、実大事之場

合と疑懼不一方候、

一一 一条折角手を付候折柄、雑説紛々ニ而万一事決候得は

どこニ暴を出候も難測、甚懸念之儀共ニ而、今五日を

不過候而は手も不被下時宜御座候、決而優柔不断ニ而

は無御座候、百方手を尽し時機之熟するを以召集考御

座候、

右之央伏水一条再発頻ニ長より申立、言上之筋小南

五郎右衛門より為知相成、武市中ニ入、此御方之御

内命も有之ニ付、此儀は先暫預ニ成給度、同人より

本田江引合も御座候、大ニ入組之儀も御座候、

一 御借船一条沢勘七郎未返事相決不申候、折角本田・内

田へ催促仕候、

一 御邸中も表廻サツハリ手を引、 宮弥陽明家出入等も

先ニ潜行勝ニ御座候、藤高猷ハ近々罷下筋ニ相決候得

共、当分之勢ニ而ハ、一人之懸念所ニ而は無御座候間、

先取止ニ相成申候、

右概略草卒甚恐入候得共、本田より大要申上候通御

座候、御当地之実態同相場ニ而、今五六日も不過候

而は、何共かとも不被申、雨晴寒暖入交り決定不仕

候、どの筋見留メ付不申候へハ、滯京之含罷在候間、

左様思召置可被下候、昨日迄之所荒々申上候、宜御

推覧奉願候、恐惶謹言、

四月二日

税所容八(簡)

中山中左衛門様

追而只今之形勢ニ而は、いつれ変事到来も難計、六

ヶ国之合体ニ比し候へハ、実ニ御手薄之儀と奉存候、

御見留を以早々跡々之御示処、御取急被為在度奉至



願候、蒸気船御差廻置之儀、本田へ相咄候処、此儀

ハ追付可相廻咄ニ御座候、如何御座候哉、第一此事

ニ御座候、再拜、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三二号文  
書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六種 横二四三種

三 島津淡路守ヨリ小松帯刀へノ礼状

久光公佐土原一泊其他ニ付

(包紙ウツ書)  
「小松帯刀様 島津淡路守

人々御中

□(朱・紙)

愈御安剛御勤仕奉賀候、然は先般

三郎様日州口御通路付、御立寄御一宿被為在、難有仕合

奉存候、其後御機嫌能、最早

御光着被為在候御義と奉恐悦候、右御礼且又御機嫌伺、

宜敷御序奉頼候、猶又其砌は段々御懇切ニ被仰下、誠に

難有奉存候、早速夫々申付候事ニ候、細事は中山江申越

候間、尚又宜敷奉頼候、来月中旬過参府仕度、御都合奉

候候、是亦宜敷奉頼候、先日相願置候通り、御軍制方為

稽古八九人差出申候、其係より伝受之義、御沙汰奉願候、

右旁之御礼申上度、如斯御座候、頓首、

四月十三日

島津淡路守

小松帯刀様

人々御中

尚々時下折角御自愛專一奉存候、

文書原寸 縦一九種 包紙原寸 縦二九・三種

横一三〇種 横 四三種

三 久光公ヨリ近衛忠熙卿へノ答書草案

久光公上京延引ノ件

別紙

伏見寺田屋事変及守護職ノ件

右一通一紙

五三二ノ一

(續前朱書)  
「癸亥夏」

先月廿八日之 尊書一昨十四日相達、難有謹而拜見仕候、  
先以追日向暑相成候処、御兩殿様御揃益御機嫌能被遊御  
座、恐悅御儀奉存候、然は先般上京參殿、拜謁仕候処、  
種々御懇篤被仰下、別而難有仕合奉存候、殊官武御重職  
方御談判之御末席ニ相連り候義、重疊難有奉存候、其節  
至愚之鄙見申上候通ニ而、外ニ

皇国之御為ニ相成候義も存付不申、赤面至極奉存候、就  
而御届申上候通之趣御座候ニ付、不得止出京、去ル十一  
日無事帰国仕候、然処其後之御事共、本田弥右衛門より  
委曲申越、御差留之御沙汰も被為在候由、且尊書を以  
細々被仰下趣、逐一奉承知、誠以不都合之至、何共奉恐  
縮次第御座候、此上は何様之罪科ニ被処候とも、更ニ可  
奉恨義ニ無御座候処、再上京仕候様被仰下、誠以御宥恕  
之御沙汰難有、先般多分ニ付、速ニ発足仕御礼旁申上候  
義至当ニ御座候得共、英賊一条は勿論、攘夷拒絶被 仰  
渡候ニ付而は、御届申上候通之義故、今更贅言不仕候、

且又

殿下ニも内覽御辞表被仰上候処、御願之通被聞召被遊御  
安堵候、最早是よりは天下之形勢被遊御傍觀候御事共、  
細々被仰下趣奉承知候、何共遺憾之次第奉存候、乍恐  
撰家之御身之上ニ而、右様御傍觀之御事御座候得は、於  
外臣は猶更之義欤と奉存候、殊ニ井蛙固陋之小臣、迎も  
此以後

朝廷之御大計ニ關係仕候義、恐多奉存候ニ付、右旁之次  
第故、再上京之義、偏ニ御猶予被成下度、伏而奉願上候、  
撰府より申上候通、英賊一条無事相濟候ハ、其節上京  
仕奉謝是迄之天恩含御座候、乍併是以  
公武より御沙汰無之候而は、迎も発足難仕義ニ御座候、  
尤幾重ニも恐多申上事ニは御座候得共、方今之御模様ニ  
而は、  
公武御一和之御実意貫徹不仕、諸藩之面々正邪明白之御  
処置も相付不申、去秋も粗申上候通、姦雄割拠之勢已ニ  
相頭、長大息此事ニ御座候、

「(以下抹消)小臣因循之名ヲ蒙リ候義は、去秋攘夷之鄙見申上候故之義と奉存候、彼義は

捧愚札候、

中川宮様・三条家ならてハ、外ニ御存之御方も無御座候、就而三条家より暴論家江御吹聴有之候ニ相違有之間敷、其節御異論有之候ハ、承知いたし度、再三申上候得共、何も御異論無之至当之由御答承知いたし候得共、今ニ至り愚意安堵難仕御座候、同人是迄は明白不申上候得共、長藩之内情不審難晴、摩耶山之一条も姦謀有之哉と愚察仕候、就而是迄之罪状御糺明被為在度、左様無之候而は誠忠之者共失望仕候は案中御座候去夏伏見一条御赦之義、彼より類ニ申立候由、則彼心底能々御觀察奉願上候、与党ニ相違無御座候間、右之処を以屹度罪科ニ被処度、泣血百拜奉歎願候、左様無御座候而は、」

就而賞罰分明之御沙汰無御座候而は、誠忠之士失望之基と、乍恐奉存候、何を申上候も

皇國之御為と奉存、不顧多罪献言仕候、先は右御請旁奉

再白、大樹公ニも參内被仰出、滯京被命御受御座候由、恐悅奉存候、即今 大樹公発京相成候ハ、姦賊愈志ヲ得、

御目前騒乱之巷と可相成は案中と奉存候、何卒右之辺深御評議被為在、何篇治定之上歸府被命候様仕度奉存候、幾重ニも私此節御暇も不奉願御届迄ニ而出立仕候義、恐入奉存候得共、実以長々滯在仕候得は、家臣之中固陋短慮之者共多々有之候段、終ニは暴論家へ対し何様之違変ヲ起し候も難計、若右次第ニ至り候而は申訳も無之次第存候ニ付、急速発足仕候、何も不臣之心底毫髪も無御座、此義は天地神明之照覽も可被為在と、乍恐奉存候、右之趣不惡御聞取被成下度、伏而奉願候、頓首敬白、

先般參殿仕候節申上殘候ニ付、書添申上候、去夏伏見一

条之者共、御赦之儀去秋も、御沙汰相成筈之処、殿下ヲ

奉始、御周旋之故ヲ以御取止相成候、然処当春右之訳ニ

而、大原卿御勘氣ヲ被蒙候由、乍恐如何様之御評議ニ御

座候哉、疑惑不一方奉存候、彼一条ニ付而は、最初左大

将家江言上仕、中山・正親町之両議奏御評議之上御伺相

成候処、是非鎮靜可仕之敝命承知仕、早速右趣意ヲ以再

三理解為仕候得共、終ニ承服不仕、彼挙動ニ相及候義、

違勅顯然之者候処、御赦之事申上立候者共御座候は、何共

奉恐入候得共、明白之御賞罰無御座故慨嘆之至ニ不奉堪

義ニ御座候、御赦申上候者之心底何様被思召候哉、則彼

与党ニ相違無御座候ニ付、此節は是非敝科ニ被処候而社

賞罰之至当とも可奉申候処、何等之御沙汰も無之、夫成

被召置候は、小臣疑惑之第一ニ御座候、若彼一条小臣処

置不当と被思召候へ、如何様とも罪科ニ被処被下度奉

存候、左様無御座候而は、天下之人心瓦解之基、乍恐

朝政之御疵と奉存候、何様にも明白之敝命承知仕度、幾

重ニも奉希望候、

一守護職之

朝命被為在候由被仰下、恐入奉拝承候、此義は会津藩

幕命ニ而勤仕之上、細川へも被命候哉之由、伝承仕候、

然上は乍恐於

鳳闕警衛御手薄之事も被為在間敷と奉存候、弊藩は僻

遠之地、先般も申上通三面之海岸、攘夷ニ付而は守禦

十分行届兼候而は、彼か掠奪ヲ受候義は案中ニ而、私

之事ニも無御座、普天之下畢竟王土之事ニ御座候得は、

何方ヲ守衛仕候も同く、

皇国之御為と奉存候ニ付、守護職之義は幾重ニも御断

申上度奉存候、乍併是非被命候 朝義ニ御座候へ、

其代リニて九国之藩鎮ヲ被仰付、十万石以下之大名は

皆総替仕候様承知仕度、乍恐奉願候、誠以自由千万之

願意ニ御座候得共、此旨不惡御汲取被成下度、伏而奉

願上候、

右は本書ニも種々不敬之義共申上候上、猶不願恐懼

多罪、愚意不差置申上候間、御都合ヲ以宜 御執成  
被下度奉歎願候、

文書原寸 縦一七糎 横一一五糎(表裏一枚書)

三三 小松帯刀ヨリ大久保一蔵へ

京都ニテ斉彬公神号御下賜ノ當時

(封紙ウツ書)

「大久保閣下

貴報

小松

封

」

御紙表致拜誦候、御來臨之御約速申上置候処、御不例ニ  
而御断之義態々被仰聞、誠ニ御念入候事ニ御座候、か様  
不順之時季、殊ニ先日より押而御外勤にも被成候上之事  
御座候間、折角御取切御養生被成度奉存候、被仰聞候通  
当分御老人之事御座候間、御引入ニ相成候而は旁差支申  
候、返すくも御養生緊要と奉存候、さて被仰聞候御用  
筋之義は委細致承知候、藤井(良節)・松方(正徳)も参り居申候付談判  
可仕候、尚明日は藤井・松之両人も出勤之筋申聞置候間、

其上尚亦御示談可申上候、此旨御報迄早々如斯御座候、  
何も明日拜眉と致筆略候、可悦、

四月十九日

追而藤井ニ茂蒸気より上京之身、当人ニも旅はまり

ニ而、随分被差替候方至極可宜と相考申候、何も明

日御直ならてハ申解兼候、かへすくも御療養第一

ニ奉存候、

文書原寸 縦一六・五糎 横九四糎

三三 十万石以上諸侯亥年京都警衛氏名

同年四月ヨリ十二月ニ至ル三ヶ月交代

(御裏朱書)  
「癸亥三月十八日」

京都御警衛

四月より  
六月迄詰

上杉弾正大弼(齊憲)  
安芸守名代(後野茂勲)  
松平肥後守(容保)  
奥平大膳太夫(昌服)

七月より九月迄

同断

十月より十二月迄

同断

加賀中納言(前田齊泰)

南部美濃守(利剛)

松平備前守(池田茂政)

立花飛驒守(鑑寛)

丹羽左京大夫(長因)

戸田采女正(氏彬)

四月十八日

水野和泉様御渡、伊沢美作守御達、

大目付江

京都御警衛御用懸三条中納言被仰付候旨、

御所より被仰出候間、為心得相達候、尤御守衛人数書等

三条中納言方へ差出候様可致候、

右之趣拾万石已上之面々江可被相触候、

四月

大目付江

今般拾万石已上之面々、京都為御警衛在京被仰付候、当

亥年之儀は、別紙之割合ニ相心得、国村より出京、御警

衛向嚴重ニ可被取計候、尤交代之積り可被相心得候、右

之趣拾万石已上之面々江可被相触候、

四月

右之通被仰出候由御座候、已上、

四月廿二日

文書原寸 縦一六・五糎 横六二・五糎

三三 松平左兵衛督松平大和守ヨリ諸大名へノ

廻状

横濱鎖港攘夷実行ノ件

〔癸〕亥四月廿二日卯中刻

松平左兵衛督様・松平大和守様衆より持廻り廻状、

御同席触到来、

尚以今日御出勤不被成候御方様、且御在国御在邑之

御方様并

御嫡子様江茂御通達ニ及候様、是亦大御目付被仰聞候、

以廻状致啓上候、然は大御目付様より依御達、今日左兵衛督・大和守登

城被致候処、御白書院御下段ニ於て、松平豊前守様・井

上河内守様御列座ニ而、御達之儀ニ無之候得共、不廉立

様御演達御座候ハ、別紙御書付之通、此度横浜鎖港応接

御取掛相成候付而は、第一曲直名義を御正シ無之候半而

は不相成ニ付、於生麦被害候者ニ為諸養償金、被差遣候

儀ニ有之、右償金被差出候茂畢竟鎖港之談判ニ相成候処

より之儀ニ有之候、右様相成候而も、家来下々迄、自然

心得違之所致無之様、厚く可申付、乍去軍艦も滞留之事

故、万一彼よりは何様之儀仕出候も難計ニ付、此処は兼

而覚悟有之様ニと反復被仰聞、依之大御目付様より御渡

候書付写書、早々各様江及御通達候様、左兵衛督・大和

守被申付、廻状数通相認持廻申付候、以上、

松平大和守内

原 弥五郎

小笠原源次

松平左兵衛督内

増尾新兵衛

御次第不同

御名様

御留守居中様

今度英国軍艦渡来之主意、曲直を正し名義を明し、随而

鎖港之談判ニ可及候間、右談判中は家来下々迄、無謀過

激之所業無之様能々可申付、依時宜戦争ニ相成候節は一

心同力、御国威相立候様、前以銘々覚悟可有之候、

右之通、万石以上以下之面々江可被達候、

(付箋) 一本文御名様と有之候ハ

上様御名ニ而ハ無之、江戸ニ而諸大名江廻状之写連名相省

候得ニ而候事、」

文書原寸 縦一五・七極 横一三五極

○壹六 尹宮へノ密宸翰

○壹七 尹宮ノ奉答書

三頁 大僧都法印光映ヨリ近衛卿へ?

御親兵無用 公武合体急切論

(包紙ウツ書未)  
「癸亥四月廿八日 此書大僧都法印何人

ニヤ可相糺、  
「

抑近来何となく世上物騒敷相成、御同様困入候次第、右  
根元熟考仕見候処、泰平打統諸国共狐狸多く相成、別而  
西国筋古狐多分出来、種々之儀相企候哉之処、深宮ニ生  
立候御子供達右ニ被相化、共ニ騒立候より事起候哉ニ奉  
存、深く悲歎罷在候、(重徳)大原下向之儀は、昨五六月頃之様  
心得居候、未一年ニも相成不申候処、京師・東武共白昼

に人殺杯出来、其外乱妨狼藉之所業不少、全く乱世之風  
光と相成、扱々歎ケ敷次第ニ御座候、相治メ候は容易之  
儀ニ無御座候処、取乱し候は存外早俄所候ものと深恐縮  
仕候、就而は徳川家弑百余年之功業被 思召、一日も早  
く

公武御合体御座候様仕度、左様無御座候而は世の中持崩  
し、

神武天皇以来三千年之旧業廃滅ニ及ひ候儀、眼前之儀と  
乍恐血泣仕候、就中失策と奉存候は、列侯江夫役被 仰  
付、万石一人之割合ニ而人数差出し、京師警衛候様被  
仰付候趣、弥左様之儀ニも候ハ、以之外之儀と愚考仕  
候、子細は一致いたし居候得は、百人は百人、千人は千  
人丈之力有之候ものニ候得共、機々区々ニ候得は、何万  
人居合候ても、何之詮も無之ものニ御座候、左様候得は  
諸国之集りは全無益之儀と奉存候、其上大藩之風儀は、  
何れも其主其国ニ相誇候ものニ候得は、京師詰合中、春  
日秋夜之閑、月下花前之遊杯之節、互ニ其主其国ニ誇候



ハ、間隙はより生し、弥人情相募可申、且自然斥候とも相成、不容易御不都合之儀ニも可有之哉、御所表之様子、国々ニ而一向不心得居候へは、

御崇敬筋之都合茂可然候へ共、委細ニ様子柄心得候へ、如何可有之哉、万々一将門・純友様之者出来候へ、何と被遊候

思召ニ候哉、難計候得共、御手人御人少之中江間者御引入置被成、若非常之儀も出来候へ、累卵之急と千々万々心配仕候、何進董卓を引入漢室を亡し、梁武侯景を呼込其家を破候先蹤も御座候得は、能々御工夫有之度、起一事候は止一事候ニ不若と申教も御座候へは、右様之御新法は御企無之方可然哉ニ奉存候、北条泰時之構余り手薄故、其頃之諸侯致普請可進旨申出候処、泰时被申候ニは、国中之人民泰時ニ随ひ候へ、曠原平野ニ住居致し候共安泰ニ可有之、若人民相背候へ、金城湯池茂無益之儀ニ候得は、板厠位何之為ニも相成不申、左様候得は、厚志は去ル事なから不及其儀候旨被申候由、陪臣末々之

士ニ而も、治国家候ものハ格別と奉存候、近來

公武共、大臣・大侯屢々御來集ニ而、万々御談判御座候哉ニ承り候へ共、世の中は倍大變と相成、当今之様子ニ而は、無難生涯之儀は無覺束と深心痛仕候、幸

竜体御近辺御勤之儀ニも候へは、前条万々之儀御熟考被為成折茂候へ、品能御申立、衣冠は衣冠、武辺は武辺と申、式百余年之風儀ニ相復し、何卒文政・天保之世の中ニ相成候様御丹誠奉希候、攘夷・尊王之流言も勘考仕見候処、右様之詞無之以前も

御所表崇敬不仕ものハ一人も無之、却而尊王之議論相起候、以來御威光茂薄く相成候哉、御手近之場所ニ而干戈槍戟之沙汰も御座候様子、攘夷之儀は何れニも禽獸同様之者と交候儀は歎ケ敷儀ニも候得は、打払可然儀と奉存候へ共、申さは犬猫同様之醜虜、何程之儀可有之哉、関東ニ而弥攘夷御請不申候節は、諸侯之内一人御見立被仰付候へ、早速相片付可申、左様候得は、攘夷・尊王之流言杯ニ御迷無之様、幾重ニも奉折念候、先は前件極

内御心得迄ニ奉申上度、捧書札如斯御座候、猶期後喜之時候、恐惶謹言、

四月廿八日

大僧都法印

光映

取

文書原寸

縦一七櫃 包紙原寸  
横三七七櫃

縦二七・五櫃  
横四〇櫃

三瓦 筑前、久留米、佐賀三藩手控

(表紙) 手控

筑前

一 太守様御病氣ニ而御引入、御仏参等茂無之由、

一 若殿様当月中京地御発駕、中国路御通行ニ而長州御立

寄との事、

一 三月廿四日朝、牧市内と申者を足輕吉田太郎・神主松

尾出羽と申者切殺候事、

一 中村円太入牢いたし居候処、同夜浪人共四拾人計も参

り、牢番より鎗(鎗)を受取押明、牢番共々召連逃去、吉田

太郎・松尾出羽同船ニ而長州江渡候由ニ候、

一 春已来家中追々出奔、三拾人計り、

一 同月五日朝、中島橋ニ張札ニ、吉田太郎・松尾出羽、

牧市内を打果候由、外ニ立花弾正道中ニおゐて市内同

様打果候様之張札有之、

一家老其外中老・番頭衆、毎日御殿詰、夜ニ引取之事、

一 惣侍四千五拾人余

一 傍足輕三百人

一 平足輕七百人余

一 大円寺・照光寺、是ハ浪人共ヲ為致止宿候ニ付、只今

御吟味中、

久留米

一家老 五人

一 馬廻 三百人

一竹ノ間徒小姓 貳百人

一足輕 百五十拾人

一知行取浪人 七人

一平浪士 七拾人

一天保学 四十拾人

内

牧(真木) 和泉

長州渡 松尾勇次郎

大橋鉄之助

外人数は御咎中、

其外侍・足輕、和泉同類有之由、

佐賀

一惣侍四千余人

一足輕八百人余

一長州より追々使者往来、趣意相分不申、

一國中御政事向、万端至而靜謐之模様ニ相見へ候事、

一旅人取締方格別之処も無之、

一大殿様四月始御発駕之処御延引、未々御上京之程も相分不申候事、

一家老土肥玲左衛門為御名代、当分上京之由ニ候得共、

大殿御上京迄は御引留之事、

横帳原寸 縦一三・八種 横四〇種 四枚

〇〇 久光公ヨリ近衛前関白へノ復書

貞姫上京猶予ノ件

先月廿九日之 尊書、去十八日相達、難有謹而拜見仕候、

先以益御機——奉存候、

然は家臣藤井良節罷下候ニ付、被仰合御口上之趣、逐一

奉拝承候、私今般帰国之義ニ付而は、先書委曲申上置候

ニ付省略仕候、貞姫上京之一条御趣意之程委細奉畏候、

奉応 尊命、早速用意申付候考御座候得共、当人春中より

少々所勞ニ而、未快方無御座候ニ付、奉恐入候得共、向暑

之節長途之旅行難致候間、当秋迄御猶予被成下度奉希上

候、尚書余は家臣松方助左衛門江申含越候間、御聞取被

下度奉願候、先は右——

文書原寸 縦一七糎 横一七糎

書一 一万石以上ノ大名朝覲ノ御沙汰

万石以上之面々、向後朝覲之儀被

仰出候、尤屢出京候而は疲弊可及候間、家督之節上京

天氣相伺、夫より十ヶ年目一度ツ、朝覲候様可被心得候、

且又江戸參勤割合之儀は、是迄之通可被心得候、

但十万石以上之面々は、為御守衛交代上京之事ニ付、

別段為朝覲上京候ニは不及候、

右之趣、万石以上之面々江不洩様可被相触候事、

四月

文書原寸 縦一八糎 横二三・八糎

書三 攘夷決行ニ付長州小倉両藩打合セ往復

書翰

別ニ長州ヨリ薩藩ヘノ使者姓名書

四月廿七日

(毛利慶親) 膳太夫様御使者

先手物頭(正文) 国重徳次郎

御口上書

愈御堅固被為在珍重存候、然は此度攘夷之御国是

叡慮御決定之御旨、於

幕府御請被 仰上候、右ニ付而は破約申渡之義未タ其

御沙汰無之候得共、当四月中旬迄期限ニ仕候様

朝廷被 仰出候趣有之候ニ付、早速より可及掃攘決定

致候、右は此方限り之事ニ候得共、赤間関之義は其御

領出会之場所付入御承知置候、猶前断之義ニ付、打方

手組等及御談置義も有之、以使者得御意候付目録之通

令遣覽候、

御進物

鏢二ツ 串干海鼠沓箱

毛利左京亮様御使者  
(元周)  
寺社奉行  
(鎌カ)  
磯谷鎌蔵

御口上書

愈御堅勝可被成御在邑珍重奉存候、然は此度攘夷御一  
決之旨御旨趣ニ付、委細本家大膳大夫より得御意候通、  
其御領対向之場所ニ御座候間、御軍備策備等及御談度  
義も有之、以使者申述候ニ付、目錄之通致進上候、

御進物

素麵 沓捲

四月廿九日

一左之通長州江御返答

此度攘夷之義付、以使者被 仰入候趣被入御念義存候、  
尤於此方は、関東より御下知次第可及掃攘心得ニ候、  
就而は赤間関之義は当領出会之場所ニ付被 仰入候通

一前以及相談度義も候間、追而以使者可申述候、且又御  
国産之鏢・串海鼠預御惠贈忝存候、

一左之通長府江御返答

此度攘夷之義付、以御使者御申入之趣、猶又大膳大夫  
殿より被 仰入候次第被入御念義ニ存候、尤関東より  
御下知次第可及掃攘心得ニ付、其御領赤間関之義は対  
向之場所ニ候間御談申度義も候付、追而以使者委細可  
申述候、且又素麵沓箱預御惠贈忝存候、

一右御使者兩人江此方様打方役河野四郎・富永潤之助面  
会いたし候事、

五月廿四日

松平大膳大夫様御使者

大組

太田市之進

野村和作

毛利左京亮様御使者

打方役

生駒時三郎

寺社奉行(藤)  
磯谷謙藏

御側医

松木衛庵

一 左之通ヶ条書を以申述候、

一 五月十日攘夷期限之御沙汰、右付御台場等御出来之処、

夷船乗通節炮発無之儀如何ニ御座候哉、

一 隣国之儀、兼而救援は私ニ而も御助合可仕、況

皇国之御為筋ニ有之候処、無其儀様相当り申問敷哉、

一 合図之儀、藍島・馬島・堺鼻湊口・大里・葛葉・梶ヶ

鼻速戸等ニ而異船見掛次第、段々大炮三放ッ、御相凶

有之候様前以被仰越候処、先日以来兩度共無其儀如何

ニ御座候哉、

一 攘夷之儀、若弊藩と違却之筋合ニ共相成居候得は 京

師江伺立ニ不仕候而ハ不相濟事と存候、

一 夷船通行之節、一方海岸ニ而ハ一々打留候義も無覚束、

其節之模様ニ寄、強而矢先ニも難致關係御領地江着弾

も難計、此段入御承知置度候、

右ヶ条畢竟御隣国対向之場所柄付、双方共別而違乱之

儀無之様御熟談申上度罷越申候得共、兎角御引受彼是

御六ヶ敷候間、無余儀大意之処、一書を以申上置候、

以上、

五月廿四日

右御返答

一 五月十日攘夷期限之御沙汰、右は拒絕期限と相心得候、

猶又御談判中、家来末々ニ至迄無謀過激之所業無之様

被

仰出義ニ付、於此方不致炮発事ニ御座候、

一 救援之儀茂右ニ准候、乍去其御領自然危ニ至候は、人

数差出候は勿論之事ニ候、

一 合図之義茂弥被 仰出候上ニ無之候得ハ為致不申候、

一 攘夷之儀は前断之趣意ニ付、一ト通り通船碇泊等は不

打払心得ニ御座候間、貴国と相違之儀茂可有之候、

京師江御伺立之儀は御勝手次第可罷成候、於此方は先

達而被 仰出候通、

將軍職是迄之通、諸大名指揮御委任被為蒙 仰候上は  
將軍家之命則 叡慮と相心得候、

一 異船通行之節、一方海岸ニ而可被成御打留候儀、無覺  
束候段無余儀次第候、前断之趣意付於御領海御打払之  
義は何共難申、此方海岸之儀は猶御差込不打払以後  
ニ付、御打払不被下候共、御不覺ニは相成間敷様存候、  
襲来候は御直ニ救援可致候、

一 右ニ付御矢先之儀は成丈御断申度候旨、御取次を以口  
上申述候、

右之通申述候処、彼方より猶又左之通申述候、

一 危ニ至候節は援救之御人数御差出之趣承知ニ候得共、  
前以御人数ニ而も最寄ニ御差出置無之而は危究之間ニ  
合不申段申候ニ付、其儀兼而合図等も定置策致置候間  
ニ合七候覚語(橋カ)ニ候段及返答、

一 不打払御心得ニ御座候処、弊藩と相違之旨如何之御趣  
意哉と相尋候付、貴国ニは

勅諭を旨と被成候哉、関東御下知を旨と被成候哉、相  
違仕候処も有之哉ニ相聞候段申候処、憤怒之勢ニ而元  
より

勅諭を旨と申聞候、然は 御直被為請候

勅諭并從 公儀被 仰出候趣御扣留共御座候ハ、拜  
見仕度段申聞候処、御承知被成度候ハ、御重役ニ而も  
御使者ニ而も可被成御出、此方よりは毎々使者差立候  
儀付、尊藩よりも御使者被 差立可然様存候、且相違  
之儀と被仰候は如何哉と申聞候間、尊藩は御打払、此  
方は不打払之儀、毎々御談申候通拒絶襲来之旨趣、勘  
考之相違も有之様存候処より、右之通申述候段申置候、  
一 御領分通船ニ候得は、打払不申候而茂弊藩之不覺ニは  
不相成之旨合点不參候、打払之  
勅諭有之上は  
皇国一体之義ニ付、自他之差別は無之段申候之間、何  
分此方は前断申候通、関東より之御下知相待居、御下  
知有之候上は

皇国一体之勘考ニ而打払方可致覚語ニ付、当時意味相違ニ相成候様存候、何れ茂右不審之ヶ条、今一応御重役江尋呉候様申聞候付、如何様拙者共以勘合夫々御答申上候義ニ付、今一応重役江申聞御答可申述候間、暫時御見合被下度段申居候内、太田市之進・野村和作・磯谷鎌蔵出席ニ而内談之上、元席ニ直り、主人之勘考も可有之ニ付、此趣ニ而宜段申出引取申候、

五月廿五日

一右五人乗船之上御取次江宛、左之書状残置候、寸楮呈上仕候、然は尊藩御返答ヶ条付而は、乍失敬心事及御相談置候処、就中、弊藩炮発御領地江着丸之儀成丈御断との事御座候得共、此段寡君より兼而入御承知置度御達仕候事ニ而、尊藩一切御炮発無之候へ、奉対

共、猶篤と被 仰入被下候様、乍此上推而奉願上候、何れ茂勿々拜具、

五月廿五日

冊子原寸 縦二四・七糎 横一七・五糎 一一枚

〔端裏書〕 近衛前関白内覽氏長者等辞任ノ事

〔五月朔日〕

関白

辞関白内覽氏

長者隨身兵仗

等之事、

文書原寸 縦一六・五糎 横二三・五糎

〔端裏書〕 水戸藩京詰梅沢孫三郎へ同藩ヨリノ私書

幕府償金支払問題

〔端裏書〕 「水府京詰梅沢孫三郎江同藩より遣し候私書之写」

応接之義、満宮償金論ニ而、動すれハ曲直ヲ正し云々、



元より戦を不好内情故、既ニ償金御渡ニ御評決相成候由、然ル処、沢勘七郎(筆名)外国奉行被仰付候以来大ニ奮激、一旦攘夷之

勅命御尊奉被遊候上、拒絶ト御決断不被遊候而ハ、決而居合申間敷旨、断然申立候より、小笠原閣老又々同意致し、三・四日之処回復之勢御座候、殊ニ西方之御模様、一橋様御下向之御意氣、但至然相響き候事ニも有之、一昨二日夜、沢参殿致し、函書頭申付候由ニ而、断然拒絶ニ無之而は、此場合決而不相済之件と、悉く情理を尽し申上候処、一々尤之由被

思召、其通取計候様御下知被為在、昨日償金相渡候期日ニ候処、俄ニ日延之義申越候よし、然ル処、幕議未タ一決不致内情ニ而も可有之哉、小笠原閣老出仕無之趣ニ而、昨夜井上閣老(正意)・諏訪参政(忠誠)、其外松平对州(正色)・土屋民部(正徳)・浅野伊賀参殿申上候ニハ、此場合兎も角も函書頭申立候通なトでは治り申間敷候間、是非ニ御決断被為在候様、尚又函書頭義も出勤被致、応接等為取扱度旨願出候よし、

勿論 上公ニハ御満足被 思召、今日 御登城之上、御所置振御決断被為在候事ニ御座候、何分 一橋様御下向前、拒絶之義御取計ニ不相成候而は、殊之外御不都合とのよしニ而、何之道今日御決断ニ相成候事ト存候、尚又昨夜九ツ時、武田殿無御滞御下着被致候、御周旋方成否之義、後便可申上候得共、昨今之形勢十二八九ハ成功可有之、実以天下之為恐賀此事御座候、前文相運

尚一昨日迄之形勢実以不容易、何事も執政衆江御洩し無之、只々外説而已承り候処、頻りに御評判不宜、一真殿御初御心配不ト下方、色々御工夫も不為在候義、先々昨今之姿回復之氣を生候間、行過候事ゆへ委細不申上候、

沢ハ出立論も有之所置士田口文蔵入説ニ而、一段奮起致し候由、小笠原閣老は水野癡雲之説ニ迷ひ、頻りに償金論致候処、田口文蔵学師ニ而殊之外、小笠原家ニ而ハ優待被致候由大義を以弁難致候より大ニ悔悟、いよ／＼拒絶と決断致し、本文之勢ニ相成候事ニ御座候、文蔵之周旋実ニ可感、

一 償金論之謀主水野癡雲筑後守之由、満宮之有司癡雲之右

へ出候者一人も無之候ゆへ、何れも風靡ニ致候よし、

度々参 殿被致候御用談御座候、扱々可怪事ニ御座候、

併昨今之形勢ニは攘夷之義も多分押抜可申、実ニ千載

一時ニ御座候、

文書原寸 縦一七種 横二三〇種

五五 水戸中納言ヨリ鷹司閔白へ

英国へノ償金ノ件

〔編纂書〕  
「水戸殿より之書翰抜書」

上略

五月七日

慶篤

鷹司様

拜上

二白、時候折角御厭被遊候様奉存候、尚又生麦一件

ニ付、償金指出候筈ニ、尾州初役々一同評議仕候処、

於

京師は指出不申候方宜敷との思召ニ付、償金ハ一円

指出不申候様決定ニ相成候間、此段宜敷被 仰立被

下候様奉希候、以上、

文書原寸 縦一七種 横二六・五種

五六 原市之進覚書

幕府ノ償金其他

〔宋〕  
「癸亥」

五月七日出

一 〔徳川茂徳〕 尾州上京、攘夷御断申上、於 朝廷御承知無之節は、

將軍職御辞退、新將軍御撰任御勝手たるへく、八百万

石は元より戦功を以被領候事故、御奪も相成間敷、サ

スレハ一之大諸侯ニ相成候迄ニ付、其内恩顧之者追々

被致撫育、新將軍之過失を責、暫時ニ可致退様、万

一 左様不相成、徳川氏滅亡ニ相及候共、百万生靈ニ代り

候義ニ付、聊祖宗へ対し不苦候事、

一 〔安藤對馬守信徳〕〔正典〕〔盛孝〕〔久〕  
大田・酒井登用之儀は全く安対之余党久貝・黒川・早

川等之尽力ニ出候事〔小栗同意、譜代、大名〕、  
〔大〕  
其の〔か〕候事、

一奸説奥向へ十分手廻り不容易浮説有之、当節之模様ニ  
ては、(慶喜)一橋公之御一身甚御案申上候事、

一廿九日夜、水野癡雲参上、尾州上京之内計を逐一申上  
候ニ付御驚被遊、朔日御登城、悉く御破り被遊候、其

次第ニ依り二日御発駕御延引、三日ニ相成候事、

一奸党ニ而小笠原杯を浪士党ト相唱、同人へ応接被仰付  
候儀ハ不宜旨、芙蓉之間役人一同より建白有之、尤採  
用ハ無之、右書付返却之事、

一(長行)小笠原、廿九日より引込居候処、三日夜井上(忠誠)・  
(松平正之)・土屋正直

松対・土民等参上、御声掛相願、翌日より小笠原も出

勤被致候得共、何分奸党之邪焰甚しく、迎も防キ兼候  
付、自発西上、右之情態大樹公江申立候決心之処、同

夜閣老之内一人西上申来候付、同人西上ニ相決、九日

発艦之事、

一七日(金巻)神名川奉行より急飛申来、償金御渡無之ニ付、英

人憤激、今晚ハ進退相決、江戸城を襲ひ可申支度之旨

申来候、満宮大狼狽之事、

一橋公御下着前、奸人内策相廻し打退之策寸分相立、  
第一奥向へ讒説を流し、大樹公御帰殿ハ決而相成間敷、

御本丸へ直ニ御乗込、兵権御握可被成と之事ニ而、当  
節呪詛杯専被行候事、

一(信義)松平豊州籠居中、多分出勤は有ましく、奸人之内計ハ

破候儀ト存候へ共、其後尾州上京如何之周旋ニ可及哉  
御聞繕之事、

一竹本甲斐急登り、尾州之下周旋之事、  
(正雅)

右水人 原 市之進

文書原寸 縦一六・二櫃 横二二七櫃

五七 近衛関白ヨリ中山三条両大納言へ

近衛関白言上書

関白辞任ノ件及関白留任事情

(包紙ウツ書米)  
「癸亥五月八日」

五四七ノ一

厚以

叙慮度々御沙汰之辺、実以恐縮仕候、元来愚昧之性質、平常之御時節は格別、沖茂急務之御時節、当職は不存寄儀、既先年蒙内覽之

仰候節茂、全役人ニ被扶助候而暫時遂勤仕候得共、其後隱遁、累年月心氣相弛、唯々随意之進退、其上段々及老境健忘之症不絶相発、実以如此次第ニ而は無難之勤仕由境難相遂、万機之巨細違乱之儀出来候而は、翠山(近衛忠愍)は不及申、

朝廷之御不都合顯然之儀、深以恐懼仕候得共、難黙止勅命、仮令御請申上候共、前条之身体往々不都合之所置無覚束候ニ付而は、何卒二三箇月、或四五箇之中辞職仕度、此上之被垂

御憐愍、及其期必被

聞食候様、兼而深願上度、既先年公武御混雜之砌退去候

処、頃日厚以

御沙汰、可為平常之通旨蒙

仰、其上重職之

御沙汰、

天恩之程深々畏入候ニ付、不得止謹而御請可申上次第二候得共、不器之大任、又候如先年不都合之所置在之候而は、一身之瑕瑾相重候而已ニ無之、弥墜叙慮と申辺も可被為立、旁於翠山候而は、当職は申ニ不及、還俗辺之御沙汰被為在而は、

朝廷之御威光弥輕易ニ天下人臣可存上歎ケ敷次第、何卒篤ト御賢考ニ而、其辺宜敷御治定被為在候様奉願度、決而翠山謀退之辺ヲ以申上候儀ニ無之、先年来

朝廷之御次第余り歎ケ敷奉存候故、愚考之程再奉歎願候間、篤ト御勘弁有之、御取計之程偏希入候事、

五月八日

翠山

中山大納言殿

三条大納言殿

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三五号文書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙)縦一六糎 横四五糎 二枚

頃日は頻被伝厚

叡慮、不願恐懼強而御断可申上、一二之愚意兩卿へ篤と

可及御談話所存ニ候処、引統終ニ賜

勅書候期ニ至、此上は難背

叡慮御礼節ニ相迫り、固辞之念慮ヲ指置、無抛随意之念

願申立、暫時之処御請可申上旨及

勅答候得共、其以来日夜弥不堪心痛、何欵存統候処、此

度之儀は全先年之一件

朝威再被為立候

叡慮、就而は其節專御評議ニ預り、且ハ内覽蒙

仰候、翠山之儀旁厚蒙

御沙汰候事と奉存候、且又長薩藩杯凡而其含ニ而申立候

儀は必定之儀、乍去翠山当職ニ而は、是迄之

叡慮茂却而不相立、全彼偽

勅之辺、関東ニも疑念不晴儀、仮令長薩藩深情茂可在哉

ニハ候得共、即今翠山当職ニ而は、却而御趣意ハ不相立

御膝元大乱ニも可及事必定之至、且於諸藩士候而も、当  
職之人体ニ寄

叡慮も相立候様存込候而は、從元之

朝威も薄ク相当り、歎ケ敷儀と存上候、旁此度当職之儀、

他人へ被

宣下、重大之御政務被及周旋候得は真実之

朝威候儀、深々不堪恐懼候間、此辺厚被為

聞食分、及辞申候之期、速ニ可被

聞食之趣、方今蒙

勅約候上は、暫時之処御請可申上、不願恐懼不敬ニ心底

之假奉言上、実以多罪之儀、

御憐愍之程偏奉願上候事、

(本文書ハ「鹿児島史料 忠義公史料」第三卷第三四号文  
書下同文ナリ)

文書原寸 縦一六糎 包紙原寸 縦三一・八糎

横四五糎 二枚 横 四四糎

五、本田弥右衛門ヨリ朝廷ヘノ伺書

英國へ償金交付ノ件付朝廷ヨリノ符箋

(包紙ウツ書)  
一亥五月九日

朝廷江窺書

御付札 一

今般於関東、英夷江償金被差渡候哉ニ伝承仕候、昨年生  
麦一条之後、英夷申立より被差渡候儀ニ可有之、右申立  
之箇条は、何れ茂御採用難相成段は、

幕府御重職様方より被遂

奏聞候儀ニ而、今更償金被差渡候次第、如何ニ茂不審奉

存候、尤醜夷

神州を奉汚蔑候事、多年被為惱

宸襟、既ニ攘夷拒絶之

勅諭被相下

大樹公御請ニ而其期限をさへ

奏聞有之、遍天下ニ御布告ニ而

皇国之士民ニ至、拳而夷狄掃攘

神州多年之汚辱を雪候事、千載難得之機会此節と踊躍振

起仕候折柄故、於

天朝は猶以償金之事

勅許可被為 在御訳とも不奉存、勿論

神州之大恥ニ相成候儀を於

幕府不被奉經

奏聞、右之取計ニ及候儀、弥以無之咎ニ而、重疊疑惑仕

候、乍併何様之御訳柄に依りてか

奏聞之上

(付巻) 「勅許之儀決而無之候、」

勅許被為 在候哉は不奉存候、抑生麦ニ而弊藩之者英夷

を誅戮仕候儀は、彼より法外之失礼傲慢を極候付、不得

已ニ出候事故、理非曲直元より明白ニ而、不俟論儀ニ候、

唯今ニ而も生麦之如き所業有之候ハ、則切捨申覚悟ニ

候、是全

皇国之威武を不貶之義当然之事ニ而候、然るを償金を被

差渡候儀は、醜夷之無礼不法は度外ニ被措

皇國之大道廢棄ニ至をも不被為願詔と存候、依而右件

勅許之儀ニ候哉、亦は

幕府ニ而御取計之上、其詔

(付箋) 一去五日尾張大納言・水戸中納言より不得止次第第二而差遣候

由、殿下江言上有之候、」

奏聞を被奉経候哉、左候得は、右之

天裁如何被 仰達候哉、右等之次第

(付箋) 一亥七日松平肥後守水野和泉守江御尋有之候処、幕府江は一

切不申来旨返答、其後再三詰問有之候処、猶以同様候、重

大事件大樹江注進無之段、甚以御不審ニ 思召候、

勅許無之儀取行候段、於幕府如何所置候哉、急速ニ可有言

上申達候事、」

御沙汰之趣奉伺上、早速修理大夫并島津三郎江申遣、

公武之御趣意為奉承知度奉存候間、卑賤之身として誠ニ

奉忍入候得共

神州之大道興廢ニ関係仕候儀、且薩藩ニおひてハ、英夷

申立ニもの当仕候得は旁難黙止、此段奉伺候、以上、

五月九日

松平修理大夫内

本田弥右衛門

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第三一九号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 二一・三糎 包紙原寸 縦二七・五糎  
横 三一六・五糎 横 四〇糎

五五 幕府并水戸家へノ御沙汰書

英国へノ償金問題 二通トアレトモ一通欠

(包紙ウツ書) 一亥五月十日昼

幕府并水戸家江之

御沙汰書 二通 』

(端裏書) 一亥五月十日」

英夷申立償金之儀、尾張大納言・水戸中納言以取計相違

候旨、達

叡聞候、右償金之儀は御許容難被遊旨、先達 御沙汰之

次第茂有之候処、事情不得止臨機之所置トは乍申、不容

易事柄、

勅意ニ相背候取扱方如何ニ被 思召候、

幕府所置振言上可有之候、兼而被 仰出候外夷拒絕之儀、

弥以無相違

叡慮貫徹候様、屹度応接有之候様

御沙汰候事、

文書原寸 縦 一七種 包紙原寸 縦二八種  
横八六・五種 横四〇種

壺〇 攘夷ニ関スル勅諭

(包紙ウツ書)  
「亥五月十日夕刻

宸翰御達書写 一通」

五月十日

勅諭御沙汰書

抑攘夷拒絕之期限モ今日ニ相成候ニ付而は、弥諸臣一統  
其心得可有之当然ニ候、併償金一件、存外之義出来候得

共、今更致方無之候、以後加様之義無之

朝憲相立候様、示談專一ト存候、右辺より諸臣気合弛候

様之事ニ而は、兼而申出候通、奉対

皇祖神申訳無之、且は

両社參拝祈念、每朝拝詞等ニ茂相違、苦心不過之候、譬

皇國一端黒土ニ成候共、開港交易ハ決而不好候、就而は

右様不心得之義唱候者於有之は、急度沙汰可有之候候、

右所存之処貫徹候様申出候事、

文書原寸 縦 一七種 包紙原寸 縦二八種  
横一四二種 横四〇種

壺一 近衛関白ノ辞表ト留任

(包紙ウツ書)  
「癸亥五月十日

近衛関白之辞表」

昨日は賜

勅書、恐入謹奉拝見候、益御機嫌克被為成、恐悦不過之



奉存上候、扱は当職之儀、一昨日モ中山大納言・三条大納言江以一封又候歎願仕置候儀、定而被

聞食候御事と奉忍察、翠山如何様存候テモ、唯今当職辺、蒙

御沙汰候而は、度々奉言上候通、余り

朝威御為ニモ却而不相成、折角之

重慮も衆人如何ト存上候而は、実ニ此上恐多儀、且夫而已不成、先年来多病、別而逆上強健忘ニテ、家内ニテモ毎々不都合之儀在之候事、忠房江

御尋被為在候ハ、可申上、家内之儀スラ右之次第、急務之御用辺ニ左様之儀モ在之候テハ忽御不都合之御事と実ニ恐懼、旁再三色々ト歎願仕候事ナカラ、其上是非トモトノ

御沙汰、此上は何共進退之仕方モ無之、甚以痛心ニ候得共、其辺不被

聞食候上ハ、何共恐々入、御理之申上様無之、此上は

勅約ニ奉従、恐謹御請申上候、何卒

勅約 宸筆之御趣、御交革不被為在候様、不願恐懼奉歎願候、且又

勅約之宸翰可奉返上筈之処、辭職之期心儘ニ奉存上候間、乍恐何卒拝領致置度、宜被

聞食候様、偏奉願上候、御請迄奉言上候、 翠山

誠恐誠惶謹言

五月十日

文書原寸(折紙) 縦一六糎 包紙原寸 縦 二七糎

横四五糎 二枚 横三九・五糎

三 英国へノ償金問題ニ付朝廷ヨリ水戸中納

言へノ御沙汰書

本田弥右衛門ヨリ中山大久保へノ添書

合二通

五五二ノ一

(編覽卷)  
「亥五月十日」

水戸中納言

英夷申立償金之儀、事情不得止臨機之所置ヲ以相遣候旨、

達

叙聞候、右償金之儀は御許容難被遊旨、先達 御沙汰之  
次第も有之、不容易事柄

勅意ニ相背候取扱方、如何ニ被 思召候、応接之次第事  
実情態備被

聞食度候、委曲明白ニ言上可有之、 関白殿被命候事、

五月

文書原寸 縦一七糎 横七七・五糎

五五二ノ二

書添

償金一件ニ付三条殿江罷出候処、昨夜関東より着之由ニ  
而拜見、別紙一通水戸中納言殿より 殿下へ被差上候と  
(徳川慶篤)  
の御沙汰ニ而候、償金ハ不渡筋ニ評決之趣、去七日付之  
書面ニ而、尤御私書とも公用ともなく、ケ様之重大之事  
件、右通平々応し次第故、関東之廟議御察可被下候、是  
も此一書ニ而、弥被相渡候哉、いまた評決までニ而不相

渡候欵、取々ニハ候得共、自然三五日中ニハ関東より之

一左右も可有之、別紙書面写相添差上申候、武田耕雲斎  
早々江戸着ニ而、一橋其外京師形勢それニ而ハ不相濟と

申論を立候而、不相渡筋ニも再度相決候哉とも風評仕候、  
去四日頃江戸仕出之水府士等之書翰写一通差上申候、関

東も償金論ハ紛々之事と相見得申候事、

本田弥右衛門

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二巻第三四五ノ  
二号文書ト同文ナリ〕  
文書原寸 縦一六・七糎 横六五糎

五三 長州下之関ニ於テ外国船砲撃一件

下之関付近台場之図添

(編纂付巻)  
「癸亥五月十日」

一五月十日

イキリス船老艘、豊前田之浦江繋船仕候処、下之関よ

り長州様人を以、右異船瀬戸ヲ越候得は打払可申旨、御沙汰御座候処、色々断申出、御通可被下、尤神奈川出帆ニ而罷帰候船ニ而、御証文をも所持致候趣申出候処、冲茂通船難成候ニ付、上方之方ヲさして逃越候様其夜九ツ頃、下之関檀之浦台場より打放、且長州様御手船よりも打放、式三発は舟ニ当り候由、其内逃去、追打ニ長府より七十本銅打放候得共、是ハ不当候由、出帆後も数発打放玉之内、式ツ計豊前門司浦岸際ニ参り、卷ツハ同所山之手ニ打込候由、

一五月廿三日

フランチ船之由  
阿蘭陀之印之由、江戸より下り廿三日曉下之関ヲ通舟

之処、下之関台場より大砲打放、右之船よりも拾発計打放、其内蒸氣を烈敷焚、大早ニ而下之様逃去候而、ハツテラ一艘取落之俣出帆仕候由、

一五月廿六日

阿蘭陀舟老艘長崎より出帆之由ニ而、廿六日昼九ツ頃、下之関江向候処、同所より式三拾発打放、右舟よりも

同様打放、下之関破損所、左ニ、

一亀山宮拜殿打抜、

一同所之下番所石垣少シ打破、

一同所南部浜手蔵式ヶ所打抜、

一油屋庄兵衛宅江打込、柱拾五六本打折、

一山手ニも段々打込、

一北前船米積居候千石船表之方打積、(被)

一長州様御手船庚神丸上棚ヲ打抜、

一長州様より打放之大砲、右之船へ当り候得共、損所無之由ニ而、上方之方江通船、瀬戸江相趣候ニ付、檀

之浦台場より八十本銅打放、船ニ当り船廻り其俣出帆仕由、

一六月朔日

イキリス軍船老艘ノヲロシ上ヶ、昼八ツ頃、上之方より下之関岸際ニ寄相掛、如例台場より打放候得共、何之事茂無之候、長州様御手船庚神丸と蒸氣船之間ニならべ候処、両艘より打放、夫より少シ引下ケテ、合図之

ふへヲ吹、一同ニ炮穴ヲ開打放、凡四十発計と申事ニ候、右之庚神丸水際ヲ打抜其俣入水、蒸気舟方ニは長門守様御召船ニ相成居候由、夫ヲ向ケテともより打込、蒸気之竈打破、けが人拾余人之由、長門守様御事、直御上陸ニ相成候跡ハ水船ニ相成申候由、右外諸所ヲ打崩為申由、亦候合凶ヲ揚、上方之方江參為申由、長門守様御事、翌日御城下江御引取之由、

一 六月五日

イキリス軍艦大小式艘

大之方江大砲七拾挺位

小之方江右同三拾挺位

豊前田之浦へ繫候処、長府・下之関之間前田村台場より式三発打放候内、異船より数発打放候処、長州人数茂段々行散りと見趣歎、ハツテイラ六七艘ニ百人計乘込、大砲小砲を積、磯際ニ寄候ヲ、長州方より四拾人余抜身鎗を以抑寄候処、直ニ大砲小砲打放、即死手負等有之由、其内老式艘ハ上陸之者も有之由ニ而、異人

茂即死三四人為有之由、右様戦争ニおよひ候処、長州方も段々人少相成候故、右舟皆上陸いたし、前田台場打崩、前田村江火ヲ掛焼払、寺壱ヶ所、家数三拾軒計焼失、其節ハ長州方より老人も立向もの無之由、長州藩中老人進出、山内俊助とやら相働之噂申居、右之家来式人同様ニ而三人共即死、其余は山蔭亦は山手ニ混居、戦争ニおよひ候者無之由、当分右式之者御糺方最中ニ而切腹被仰付者も有之由、

一 前田村江御仮屋有之由、是ニは段々鑑其外陣道具等為有之由ニ而、番人共逃去明家ニ而、異人共踏込、鑑其外道具等取扱、諸方江引散らし為申由ニ御座候、鑑杯もぬすみたる由ニ承申候、

一 田之浦へ異船より使者と相見得三人上陸仕、同所在番ニ面会申出趣は、長州侯戦争を被好候ニ付、此度軍艦ニ差向及戦ニ、乍併豊前地ニは決而打放不申、御安心可被下と申出候而、仮名書ニ而相認差出候由、同夕方田之浦ヲ出帆、本山沖江繫居候由、翌日出帆

此書付田之浦在番江相渡為申由、

文書原寸 縦一四・三種 横二四〇種

(付紙)

フランス人此書ヲ田之浦庄屋江持參仕候写

ナガトノ。シウノ。スミヒトニ

フランス。タイシヨヲ。テイトク。ヨリ。ツゲシラサレ  
タリ。コノゴロ。ナカトシウノ。トノサマ。マツダイラ  
。ダイセンノタイウト。モウサル。ランタイシヨヲヨリ  
。フランスコクノ。ハタヲタツフネヲ。オウツ、ニテ。  
ウタサレタルトコロ。コレヲワガクニ、。タイジテ。ラ  
、イナル。ケイベツトゾンジテ。イマワレミキノ。トノ  
サマヲ。タ、スマエルケレドモ。ワレニムカワズ。ツミ  
ナキ。ナガトノシウチウノ。スミヒトヲ。マタソノツマ  
コトモ。ウチナドモウシガイス。コ、ロナカルユエニ。  
ソノナガトシウチウノ。スミヒトニ。オイテワ。スコシ  
モ。ヲドロクニ。ヲヨビマセズ。カエリテ。モシ。ナニ  
ノヨウジアリテ。ワガフネニ。ノルヒトアラハ。モトヨ

リノトウリムツバシウ。アラン。ステイコクト。ニツホ  
ンテイコクト。コンシンノ。ジャウヤク。ムスバレシト  
キヨリ。イマ、デノトウリ。ヨク々々。コンセツニ。ト  
リアツカワレルベシ。ハタマタ。シヨクモツヲ。ワカフ  
ネニ。モツテマエル。ヒトアラハ。ソウラウノ。ネダン  
ニテ。ハラワレ。マスミギラヲ。コンシンヲ。モツテ。ツゲ  
シラサル、コト。カクノコトクニ。サムラウ。キンゲン、



セコース

ニツホン文久三年亥六月四日

フランス千八百六十三年七月十九日

フランス  
大船大将  
テイトク

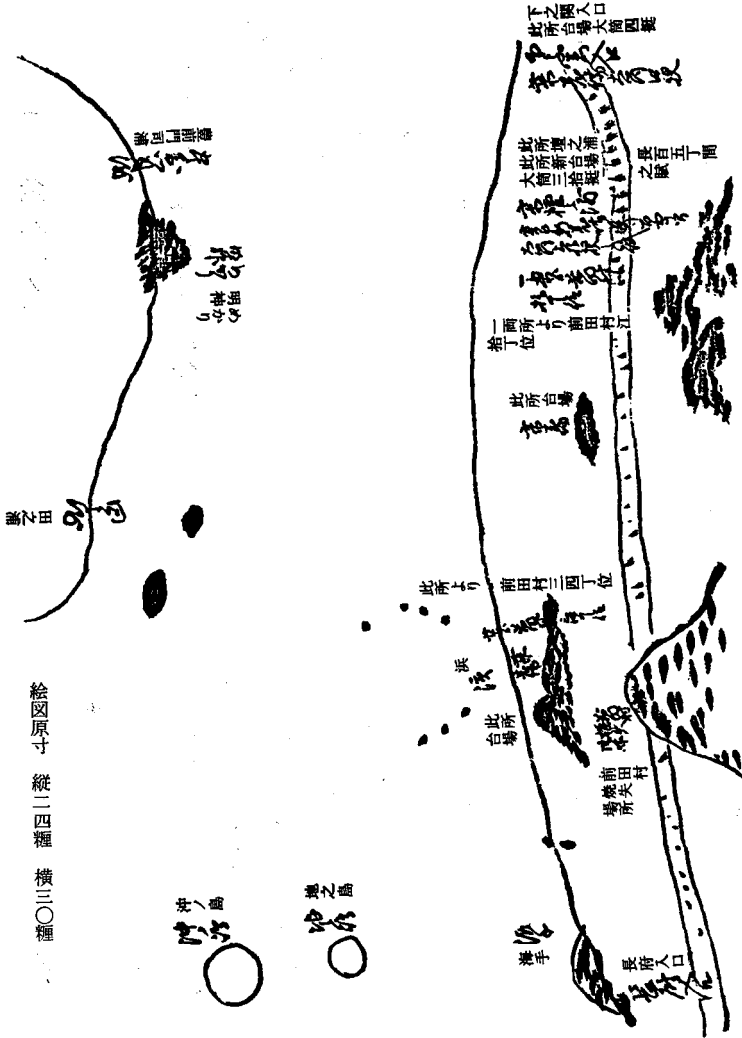
上陸三人名前

ヂイウル

フウラクマシ

文書原寸 縦二四種 横三七・八種

ボラリユ



絵図原寸 縦二四種 横三〇種

○書 尹宮ヨリ久光公ヘノ書翰

国家ノ為尽力ヲ望ム

書 近衛忠房卿より島津三郎公へ

貞姫上京及短刀所望の件

〔包紙ウツ書②〕  
御書

(朱)紙

亥五月廿二日達ス

〔包紙ウツ書①〕

島津三郎殿 内々  
几下 忠房

五月十二日認

紙

〔封紙ウツ書〕

島津三郎殿 内々  
几下 忠房

尚々修理大夫殿へも宜御鶴声希入候、扱此龜菓極内

々貞姫方へ進し度、宜敷御伝声希入候、何も荒々如

此候也、

追々向暑ニ候、弥御揃御勇健珍重候、誠ニ天下之形勢日

々ニ相変、此末如何可相成と、唯々心痛之事ニ候、扱良

節下向ニ付、此愚詠赤面ノナから進入候、扱甚申入兼

候得共、短刀ニ小子大ニ心ヲ寄セ居候仕合セ、甚々申入

兼候得共、御伝来之古刀之内、丈九寸三位之短刀御所

望申入度存候、何共甚々申入兼候得共、御承知ニテ被下

候ハ、深々喜悅可仕候、宜々希々存候、扱貞姫方御所

勞如何哉、專御保護ニ而御全快之上、早々御上京之程希

入候、併暑炎之折柄ニ相成、何共申入兼候事ニ候、何分

精々御所勞御保護之様、分テ存候、宜敷御鶴声希入候、

梅芳院ニも氣丈致居候事と存候、御序ニ宜御伝声希入候、

何も辛便荒々如此候也、

五月十二日認

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三六号文

書ト同文ナリ)

文書原寸(折紙) 縦一六・五種 横 四六種

包紙原寸 ① 縦三〇・五種 横四二・五種

② 縦 三一種 横四三・三種

雲 本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門へ

御親兵ノ件及攘夷拒絶ノ件等

御親兵一条、ケ条書を以奉伺上候得共、御規則之儀ハ、今以御決定無之候、当分之處ニ而ハ、御高割六十二人差出置候筋申出置候、今兩日之間ニハ万事御治定可有之模様ニ付、大尾之上可申上越候、御問合之ケ条逐一率得其意候、先日高割ニ而大砲・乗馬・小銃差出候様被仰出、右ハ琉球高相除、御国役六十二万石之割ニ而御当家より大砲六挺・乗馬十二疋・小銃十八挺ニ及申候、此品々ハ守衛兵之外ニ被差出事之由、猶右 仰達ニ付、窺出置候ケ条、未御返答不被仰達候儀有之候故、取究而之処、後日相伺可申上候、御守衛兵ハ追々ハ別ニ屯所被召建哉之御模様ニ而候由、右ニ就而ハ二本松町御屋敷を御用ニ御申付之御内評、慥ニ聞出候故、段々吟味勘考之趣、猶松方助左衛門(正巻)より御聞取可被下候一細島一条、黑白相分り不申、右同人より可申上候、一粟田御領山内拜借之事、吟味之趣同人より可申上候、

一 公辺より二本松町御屋敷御用地之響合有之、京町奉行(尚志)永井主水

正より承居候付、昨日同人江面接、決而難差上趣、断

申出置候、委細松方より御聞取可被下候、

一 尾張前大納言殿、京師ニおひて去月下旬頃ニも候哉、(徳川慶勝)

御政事御輔翼被仰出候、一橋卿之御代りと被察申候、

成瀬隼人正・田宮弥太郎、(如斐)専要路ニ事を執申候由ニ御

座候、

一 尾張大納言殿、関東より当月二日出立ニ而、自国江も

不立寄上京、大樹へ直ニ伺候事有之旨被仰立候由、一

円其訳尾老候ニも御相談なく、

朝廷・幕ニも、其子細今日迄ハ不相分候、拒絶之期限

五月十日之処、延ニ相成其次第を言上致評判仕候、

右延ハ蘭人迄も可拒絶哉何度抔申様子ニも候、とかく

関東ニ而もてあまし候形之由、水人私書中ニも粗其意

も相見得申候、一橋卿も償金一条ハ全く御存なく、道

中ニ而御聞及ニ而、大坂江早々伺越ニ相成、是非破約

攘夷之談判ニ及度、償金論之主本被相糺度候得共、差



迫候期限故、先跡ニ而之事ニ被成との御意中と承事ニ御座候、何分関東之偷安説、其本ハ

朝議紛々ニ而、幕論も随而動揺するより、東住之閣老

等、窃に惰氣を起候と被察候、太田道淳(道醇カ、實始)老江三出之

由、更ニ其意を不得事ニ而候、是も東住之閣老之吟味

ニ而吹拳と承候、水府当侯暗愚、家臣声を吞悲涙大息

いたし居候由、梅沢と申者正義之者ニ而、

宮江内々言上、此節之罪科主家ニおひて逃かたく存候

間、出格之御慈悲を以御教諭之一書、備前守・余四郎

丸兩人江頂戴仕度歎願、其情誠ニ可憐次第ニハ候得共、

御断ニ而候、

一橋本宰相(実應)中将殿、関東江 御使ニ而当月下旬御下向

和宮様江参向被仰出候事、

右

宮様類ニ御上京之儀を被仰上越候由ニ付、御留め之事

御内命を被相合候由ニ候、

一当時ニ至暴論之堂上今以依然之形ニ候、乍恐

宸襟を被為惱候御事此一儀ニ而、実ニ歎息忼慨之極ニ奉存上候、一天之

君ニも 思食ニ不被為任事 御膝下ニ有之、何共言語

ニ絶申次第ニ而候、兎角大機会を生候を待申外無之、

此事誠ニ苦心中之苦ニ而、残念千万ニ奉存候、

右今日迄之形勢大略如是御座候、猶追々可申上候、以

上、

五月十四日 京都 本田弥右衛門

中山中左衛門殿

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第三二四号 文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二種 横二三・三種

三三 本田弥右衛門ヨリ小松帯刀へ

久光公ニ関シ中川宮へノ聖旨

(包紙ウツ書) 中川宮様

御内沙汰書



亥五月八日

中川宮様御参

内之節、御親話之次第極内申上候、

一御還俗已来長く御参もなく候、其訳ハ御国家之大事件

被仰立候儀も更ニ御用立も無之、且先関白在職之時分

ハ、議奏同道ニ而入来、御大事ハ御直ニ御相談も被為

在候得共、近来左様之事もなく、全く被捨置候形と奉

見受候故、御不参ニ及候由、方今堂上方之議論紛々

朝議錯乱之折、言不被行砌ニ参向も無益と存申候、乍

併只今之形勢如何とも難致候付、時宜機会と申事有之

ものニ付、其折御所置可有之との趣、且国事御輔佐之

事ハ、辞表不被

聞食ニ付而、御受ハ今通可仕居候、乍去鎖細之事件、

参政・寄人之輩と論を争候位之事ハ御断ニ奉存上候、

尤御大事ハ如何ニも参謀可仕候、其御大事と申事ハ、

攘夷拒絶是当今之第一にて、外ニ御大事ハなく、是も

勅諭之上ハ、最早武門之委任ニ候間、御任せ可然奉存

候、切迫危急と申事ハ、摂州海より夷船攻登り

帝闕江責入候折ハ、眼前之切迫ニ有之候、其時氣力劣

レ候而は、無詮無云甲斐候間、只今之内氣力を養申方

宜候付、

御上ニ茂御酒ニ而茂被召上

御鋭氣を御養可被遊方可然奉存候、是よりハ日参仕候

様、殿下より沙汰茂承候得共、五六日ニ一遍位も参

り、先関係不仕体ニ而罷在可申、国事之儀御受ハ不致

居候而は差支申事も有之、島津杯急ニ被召候都合之時

之為ニ而茂候故、即今之処、強而日参杯不

仰出様奉願候、且又 宮様を日参御勸為申事、如何ニ

も不審ニ考申候、是不出来詰之後ニ成立候

朝廷故、私を出シ掛何も宮之 御裁判も此通と承候杯、

いはん料ニ設置し姦謀と奉存候、無左而はケ様ニ参政

始申出候訳、一円無之旨御察之処を内々言上被為在候

処、成程左様之次第ニ而可有之との

御沙汰ニ而、皆程能

聞召候而、宮ニ茂極而

御安堵之体ニ而候、

一三郎公より 宮様へ御献之御酒・鯉節・御初穂、其訳

御申

御所江御献上之処、

御満足之由、是ニ而島津着後之一左右ハ有之たりと、

独り

思食候旨、

御沙汰ニ而、夫より引続

三郎公ノ御話共被為 在候付、先日

前関白江直書国元より到来、其内ニ

朝廷御大事之機会ニハ後レ不申、此節急ニ帰国仕候ハ

趣意有之云々と申御次第、遂一御申上之処、夫ハ大ニ

被遊

御安堵候旨 御沙汰ニ而候由、就而ハ御大事と云時ニ

ハ

宸筆御書ニ而茂可被下と

勅諭被為 在候、依而此旨極而内々其方迄申聞置との

宮様 御沙汰ニ而、何共恐懼不少、敬而奉拜誦仕候、

低頭頓首仕居候、難有旨言上仕候外、不覚落涙仕候、

只々御推察可被下也、

右極内奉申上越候、誠恐百拜、

五月十四日

京都

本田弥右衛門

帶刀様

御直覽

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三八号文

書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一六・五糎 包紙原寸 縦二七・五糎

横一九七・五糎 横 二八糎

英 本田弥右衛門ヨリ中山大久保へ

英国へノ償金問題

(包紙ウツ書)

「御国元

中山中左衛門殿 京都

本田弥右衛門

大久保一藏殿

御内用

(黒印ト「封」文字ハ重書)  
封〇

〔朱〕  
「癸亥五月十四日」

」

先達而生麦償金一条之書面差上置、其後猶又遂評義候処、  
此事実事ニ於ては、無此上

皇国之汚辱と相成、其上御国ニおひて大關係之筋ニ御座  
候故、得と情実致探索、曲直理非之名分相正し不申候而  
ハ不相叶儀と致評決、折柄

大樹公御滞坂中ニ付、去ル八日、高崎左太郎・村山齋助  
兩人致下阪承合候処、来ル十一日

御帰洛之由承り、十日早朝、板倉周防守様旅館江致推参  
(勝勢)

遂面会候而、ケ様之廻状致伝承、如何之次第ニ可有御座  
哉及尋問候処、此事関東より内分申来候得共、巨細之儀  
ハ不相分、勿論此方より致指図候訳ニ而茂無之、関東御

留守中役人共評決之上、水戸中納言殿江申上候而、御聞  
(徳川慶篤)

濟ニ相成候由、併弥償金相渡候哉、いまた不相渡候哉、  
相分り不申との趣ニ御座候、依而色々及論談、何分御失  
体之次第

朝廷ハ不及申、天下一統江対し甚敷御失錯之御処置ニ而、  
殊ニ弊藩江曲名ヲ被為負候訳ニ相成、何分ニ茂何人之建  
議ニ而ケ様ニ相成候哉、是非火急ニ御詮義被下候而嚴罰  
ニ被処度旨申入候処、尤之次第ニハ候得共、何分情実相  
分り兼候間、其為御目付池田修理を関東江差下候付、罷  
歸り候ハ、委曲相分り可申との趣被申候、何分不審之廉  
茂不少候得共、別ニ詮義之致方も無御座、夫形ニ致退出、  
同日乗船、直様罷歸申候、左候而此事公武之御裁断トハ  
乍申、畢竟生麦一条より起り候儀ニ而、可致傍觀訳ニ無

之と存候故、十二日早朝、三条中納言様江村山齋助致拜  
(実美)

謁、右之始末委細申上置候、左候而松平備前守様ニハ水  
戸中納言様御実弟之儀ニ付、高崎左太郎罷出候而、右之  
次第申上、虚実探索之儀重疊申上置、御尽力之程返々御

勸メ申上候、此事件色々多端ニ御座候得共難尺筆頭、猶  
松方助左衛門より委曲可申上候、右形行申上候、以上、

五月十四日

京都

本田弥右衛門

御国元

中山中左衛門様

大久保一藏様

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第三二二号  
文書下同文ナリ)

文書原寸

縦 一六・五糎 包紙原寸

縦二八糎

横四一糎

差表 本田弥右衛門ヨリ小松带刀へ

中川宮、英国償金、薩藩国産販売ノ件

(包紙ウツ書)

带刀様

京都

本田弥右衛門

御親展

(黒印)

(朱) 「癸亥五月十四日」

尚々、時分柄追々暑気も強く罷成候間、呉々茂御自

愛被下度、为国家奉禱上候、扱先便沢勸<sup>(全良)</sup>七郎御役御  
免被仰付候、東下之旨申上候得共間違ニ而、当時外  
国奉行被仰付候而、随分正義申立候由、水人之手簡  
中ニも相見得申候、外国奉行被仰付候折

御意御尊奉之上ハ攘夷之事 御決定なくてハ御受難  
仕申出候処、暫時幕議ニ不合候而、夫形召置此節当  
務被仰付候由ニ聞及申候、

一筆啓上仕候、溽暑之候罷成候得共、弥御安康被為成御  
座恐悦奉存候、乍恐

御両殿様益御機嫌能被遊御座恐悦奉存候、爰許

宮様 陽明様益御機嫌能被為入恐悦奉存上候、次ニ私事  
ハ無異精勤仕候間、乍恐御放念可被下候、今度御上京之  
時分、

中川宮極内御沙汰之御裏様一条、尾州家より頻ニ説を勸  
申候由候得共、

三郎様思召被為在候間、先今形暫時被召置候方可然旨内  
々及言上候処、堅固ニ御守被遊候而、今以御家来之面々

も心配仕候得共、御勘考有之趣ニ而、何方も可否不仰分候由、如何ニ候哉、其後御国元ニおひてハ御纂用之御事御座候得は、中々夫処ニ而も無之筈と奉存上候得共、何とか私迄承知仕度、無左而ハケ様之時勢ニ候故、御家来中之心底ニ罷成候而も、御還俗之後適之事故、早目右辺御取究無之而ハ、安心不出来候旨承事ニ御座候、何分御勘考可被下候、当分京地ニ而ハ薩州之宮様と俗唱申触候由、一向夫等之辺御頓着不被遊、実ニ感服之事ニ奉存上候、扱償金一条差起り京師議論沸騰、公武之和もつまり破レ可申坎、又是ニ而一機会を生可申候、先月下旬尾州老侯政事御輔翼被仰出候、一橋卿之跡と被伺候、諸藩此償金之一条ニハ、皆共大不服と相見得申候、扱御銀主之一条随分御手を付置可然之人柄も有之候間、紅花并藍玉之二品を以基本を相立申候ハ、一廉御用立可申奉存候、紅花御金繰之儀産物方御元手之由、京師江可被振向御付札先便藤井着京之節相達候間、則右之処を以応対熟談可仕候付、左様聞召置可被下候、猶追々御差函奉願上候、

當時大坂表御金繰も追々六ヶ敷模様ニ御座候間、猶更差急キ申度奉存上候、近々之内税所容八罷下り可申候間、其折ハ此方治定之処、委細可奉申上候、御神号女房奉書等も追々被為済、誠ニ以難有次第、吉田家より御屋敷江御神位璽御入之節ハ御供奉申上希有、難有次第ニ御座候、當時之京地情態ハ松方より御聞取被下度、猶中山・大久保江申遣置申候、  
中川宮様ニも久々

御参 内も不被為在、五月八日御参之処、打解

主上ニ茂御懇話共被為在、私も至大安心仕候、此事當時之事故如何成候弁之舌頭ニ奉惑も難計御中之事、頻ニ伊丹杯痛心仕候儀ニ而候、其日

玉座之御模様大略同上奉候次第ハ、別紙ニ書記奉申上候、先ハ御安否伺、且御書之御札取束如是御座候、恐惶謹言、

亥

京都

五月十四日

本田弥右衛門

帯刀様

侍史

親雄



〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第三七号文  
書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一四・八糎 包紙原寸 縦二八糎  
横二〇五・五糎 横四一糎

五五〇 武田耕雲齋等ヨリ鈴木縫殿へ 外二通一綴

幕府ヨリノ償金及攘夷期限ニ付

五六〇ノ一

御書付致拜見候、甚暑之節愈御安健被成御奉務奉賀候、  
然ハ償金之儀、去ル五日尾張様・中納言様御兩名御書翰  
(徳川茂徳) (徳川慶篤)  
殿下江相達、右之趣及 奏聞候処、

天朝御憤り一ト方ならず、第一水戸家ニ於而重き  
勅命を奉し罷下候身分、今更微力不行届杯ト申訳ニ而ハ  
相済不申事ニ候間、屹度相糺可申との 朝議も有之、不  
容易御模様

中川宮様深く御配慮被為在、水戸家之瑕瑾ニ不相成候様  
種々御工夫も被成下置候得共、此上ハ愈 叡慮徹底外夷  
掃攘之功を奏候様、周旋有之候外無之、尚又一真齋・耕  
(大場) (武)

巴  
雲齋江も得と申遣、実地之形勢早々 奏聞有之候様、因

州中野治兵衛を以、右 宮様より御内達有之趣、実以難  
(治平カ)

有思召、千万恐懼之至奉存候、償金一件ニ付而ハ、中納

言様ニも再応御議論も被為在候得共、生麦一件ハ事柄も

相違致候事ゆへ、償金相渡し曲直を正し候上ならてハ、

拒絶之応接ニ難被及との満當有司之申立ニハ、不得已右

様之次第ニ至り候段、おい／＼此運申候へき、然ル所、五

月十日拒絶期限御決治にて、右御処置方 一橋様御引受、

東下被遊候旨申来候ニ付、満當之有司殊之外恐怖いたし、

随テ形勢も自然相変し、殊償金相渡候振り御内決相成候

よし、一橋様御承知被遊、殊之外御配慮、償金聊たり

共決て渡し申間敷旨、以早便御申越、旁御同所様御下向

前拒絶之施設可被遊との中納言様御決断にて、償金渡方

も日延被申遣、只管拒絶取計而已被懸御評議候処、去ル

七日朝唐津閣老俄ニ上京被致候旨申上候処、中納言様甚  
(小笠原長行)

御疑惑被遊、拒絶応接之儀、担当いたし居候凶書頭、今更

西上いたし候而ハ、詰り幕議も動キ可申候間、早々引戻

候様御下知被為在候ニ付、耕雲齋即刻品川洋中迄追懸ケ御下知之趣相伝へ、尚又拒絕期限兩三日と相成、且ツ一橋様ニハ明日御着府之場へ至り、俄ニ上京被致候段、難ヲ避け候儀ニ当り、如何との儀迄弁論いたし候ニ付、不得已同所碇泊、再命を待候筈ニテ馳歸り、直様若老有馬(道純)遠州被為召、圖書頭引返之旨御下知被為在候、追而承候へハ、水野癡雲(忠徳)右船へ乗組居候よし、同人儀ハ聞ゆる償金家ゆへ、如何なる計策有之候やと心配致候得共、八日夜、一橋様御歸府、殊ニ兩人共御用繁ハ申迄も無之、日々登營も仕り、拒絕之期限不誤様、一途ニ存詰メ、乍不及粉骨を碎キ、千載一時ニ周旋仕候、翌九日、中納言様・一橋様御列席江一真齋・耕雲齋致侍座、閣老初メ參政之奉行・大小監察・外国奉行、其席ニ呼出し、京師之御模様断然拒絕外夷掃攘之

勅命御遵奉被遊候上ハ、一日片時も御猶予被遊間敷ト御元より十日拒絕之

決心ニテ、断然被仰渡候ゆへ、御違背申上候ものハ勿論無之、一同御申請上候得共、満宮臆病神ニ被取付候ものゆへ、何れも心中ニハ承伏不致、陰ニさゝやき候而已ニテ、外夷ニ対し断然拒絕之応接いたし、神国之武威を示し積年之國辱ヲ雪キ可申と奮起いたし候者無之而已ならず、一通之応接為致候人物さへ乏敷、不得已町奉行井上信濃守(清直)・御目付杉浦正一郎(勝)被仰付候処、夜中ニ至り幕議動キ候模様相見候とて、杉浦には御免ニ相願候仕末柄、満宮攘夷之

勅命貫徹可致精神とも不相聞、如何と痛心仕候処、唐津閣老別紙井上河州(正徳)へ書翰之通、独断を以テ応接いたし、償金相渡候よしニテ、井上信州(清直)空敷歸府被致候やニ御座候、巷説ニハ夷人大砲を以て取囲み、償金延引之儀被責候ニ付、唐津閣老も右虚喝ニ恐怖、忽チニ償金相渡候杯紛々ニ候、たとへ幾百挺大砲被向候共、其場へ臨み候上ハ、兼而覚悟も可有之ハ申迄も無之候処、空敷國威を損じ、國辱を取り言語道断之所行、実ニ天下之大罪、天誅



を不容ものニ御座候、剩へ帰府之上ニハ、外夷之暴威難挫勢ゆへ急速拒絶難成との説、狼ニ主張致し候ゆへ、滿宮之有司等渡りニ舟之心地にて、一般ニ拒絶難成ものと合従いたし、全く両公御孤立と被成、如何とも不可為形勢ニ成行候段、切齒不堪事共ニ御座候、当方之勢唐津侯・癡雲之兩人御処置無之内ハ、逆も姑息家之論を破候事ニハ至り申間敷、正義と頼聞候唐津閣老、右之姿ゆへ、まして他閣老ハ申上も無之、姑息論ニ御座候、乍然重キ勅命を奉し罷下候身分、今更微力不行届杯と申訳ニ而は不相濟との御趣意、乍恐御尤至極ニハ御座候へ共、此程之情実何分六ヶ敷、実以 両公御正義にてむり／＼拒絶迄ニハ押付候処、唐津閣老不取扱より、大機會ヲ失ひ、実ニ術計尽果候事ニ御座候、幕吏之説ニハ大樹公大坂御滞城、人質之姿にて致方無之とハ申候得共、此形勢君を輕とし社稷を重とし候時にて、

勅命といへ共、拒絶之儀、時勢ニ於て難被行、万一内乱を生候共、国内之儀ハ取静方も可有之、外夷ト兵端を開、

是五大洲を敵ニ取り、実ニ社稷之安危ニ拘り候杯、戦を不好内情より姑息論喋々と論し、 両公ニも殊之外御配慮被遊、第一被為對 京師御申訳も無之御次第、拒絶も不被行届、因循日を送り候ハ、詰り 公武御隔意之御媒を被遊候姿ニ相成、誠以 徳川家之御一大事痛哭之至り御座候、然し、乍恐 両公之御力ニハ昨今之模様、掃攘之功を奏候様ニも御座被遊間敷、滿宮数万之士一人も両公之御輔佐ニ罷成候もの無之、御持張も如何と心配仕候折柄、前文之情実幾重ニも酌取、 中川宮様御初メ御方々様江よろしく被仰上候様御周旋、為國家所祈御座候、此上ハ閣老・參政二人ツ、被為 召、於御地当方之御処置振御詰問被為在候外、挽回之手段有之間敷候、実ニ此程中 両公御尽力水之泡ニ罷成り、閣老等之不取扱一円御冠り被遊候様相成候ハ、御家之御一大事御座候間、よろしく御含ミ御周旋被致度、尚此方之形勢追々御運可申候得共、先ツ不取敢貴答旁如是御座候、以上、

五月十四日

大場一真齋

鈴木縫殿様

即時

一橋中納言(慶喜)

水戸中納言様

貴酬

尚々、前文唐津閣老而已不取扱致候様ニハ御座候へ共、実ハ閣老中氣力有之候ものは、唐津一人ニて其外ハ老衰或ハ美柔之人物、迎も攘夷之重任ニ堪候事ニハ參り申間敷、且ッ横浜応接之儀も償金相渡し候、其後ニハ拒絶之儀をも承伏為致、一手際ヲ願し可申ト独断いたし候処、右之次第ニ至り候よしニも相聞ヘ申間敷、又閣老・参政被為 召、御詰問ニ相成候て、矢張唐津侯より外有之間敷や、右辺之儀も御舍ミ致度御座候、以上、

五六〇ノ二

左兵衛之儀、昨夜之召候処、其後(長行)小笠原より別紙之通り申越候ニ付、井上信濃守(清忠)ヲ今朝横浜表へ遣し、拒絶之応接致候様申遣候事ニ御座候、此段急キ申上候、耕雲齋方へも可然御咄可被下候、已上、

五六〇ノ三

拜啓、弥御清適奉抔喜候、然ハ小生儀昨日 水戸殿より御沙汰之趣(慶喜)候間、直様帰府可仕哉とも奉存候所、(慶喜)ト心付候ハ、此度応接御委任之命を蒙りながら、因循罷在候段、何共恐入且ッ是所迄罷出何事も無之、突然帰府仕候而ハ、反掌間命令反覆、御失体ニも可相成候哉と奉存候ニ付、昨日も申上候通り、横浜港之(虫想)様笑見仕置候ハ、自然心得ニも可相成と直様同所へ罷越候、然ル処、過日 一橋殿より之御書中、十日前より応接ニ取懸り候様被仰下候儀も有之候間、序ニ一応接仕見可申と存、ミニストール江面会之儀申込候処、面会不致旨強情申張居当惑仕候、殊ニ只今と相成候而ハ、償金之儀ハ一向不取合、只々皇国ハ不信不義之国との申居、強而語気殊之外手荒ニ御座候、是ハ全く金子不相渡ゆへ之事ニ御座候、一体此

度之償金ハ不差遣候而も格別不筋ニも無之、畢竟不信不義之御恥辱ニ比較仕候得ハ、償金之方遙ニ輕ク奉存候間、以独断直様金子相渡候、從是ミニストル面会拒絶之応接ニ取懸候積リニ御座候、先此段申上置候、一橋殿・水戸殿へハ別段不申上候間、此紙面御覽ニ御入被成宜敷被仰上置可被下候、草々不都合、

五月九日

尚々、折角御撰養專一奉存候、此一封酒井飛騨江御

伝達可被下候、乍憚奉願候、以上、

河内守様 (井上直) 函書頭 (小笠原長行)

冊子原寸 縦二五種 横一六・五種 八枚

癸一 一橋慶喜辞職上奏

攘夷不実行ノ件ニ付

五六一ノ一

五月十九日(補綴)鷹司殿より差廻

此度攘夷之

聖旨を奉東帰仕候は、全勝算有之訳ニ而無御座候、

綸言如汗、幕意又不可背故ニ而、只々関東有司と討死可仕心底ニ御座候処、閣老并大小之有司同心仕候者老人茂無之、臣之胸中禍心を包蔵仕候由、横議を生シ衆心不服ニ而嫌疑ニ相艱ミ

勅旨貫徹仕候事、中々以不相成候、抑関東有司之情実并宇内之形勢不相察、短才無智之身を以て重大之攘夷奉命仕候段、不堪恐懼之至、奉対

天朝誠以奉恐入候、且幕意ニ背候段、重々不相濟義に御座候、依之謹而罪を閣下ニ奉待、出格之御垂憐を以て、当職御免相成候様

天違之御内奏伏奉願候、誠惶誠恐頓首々々、

五月十四日

慶喜

殿下

五六一ノ二

別紙

暑氣之砌候処、先以御清安被為渡奉恐悅候、滯京中は彼是御配慮被成下候段奉奉存候、此節も嘸々御繁用之義ト奉遠察候、私義も無滯去ル八日帰府仕候得は、乍憚御安意奉願候、然は別紙願之趣何卒御聞濟相成候様、伏而奉願候、委細ハ備前守・余四九迄申遣置候得は、同人より御承知被遊候様奉願候、此段奉申上度如此御座候、誠惶謹白、

五月十四日

慶喜

殿下

冊子原寸 縦二五種 横一六・五種 二枚

三 本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門大久保一

蔵へ

攘夷期限并償金支払ノ件

(端裏朱書)  
京より 本田弥右衛門

癸亥五月十六日

關東近日之形勢大ニ動揺之由、追々世評も承居候処、今

朝 中川宮江參 殿仕候而、別紙水藩人之書面写取差上申候、水人志有者此節償金論評決、尾・水両侯ニ出候を、天下ニ対し無面目悲泣仕居、梅沢孫太郎(宛)と申者、宮江も歎願之趣共有之、百方救護之道論訟之様子、同人儀は十二日東下いたし、其後原市之進と申水人

宮江參 殿、關東之形勢一變動揺、償金論之不可救之代りニ拒絶掃攘之成功を以相替、前罪贖申度志願歎訟ニ付、去七日出之別紙一通差出申候而、如是次第御座候間、太田道淳(辭之)及酒井飛騨守(志也)を打退之策を尾老侯江御内論被下候様頻ニ願出候、何分關東之沸騰滿宮奸論充滿之体ニ而候ハ相達無之由ニ而、追々可申上候得共、今日迄之処別紙之次第御座候間、早々申上候、尾侯ハ未京着ハ無之候、五月十日之応接期限ハ延引、何分右体之模様、大紛擾と相見得申候、尤是より一機会を生可申欵、扱京師ハ先松方江託申上候外不相變候、此段早々申上候、關東江も驅引旁不容易時体ニ相成、京師迄ハ此涯

君側より御差登候欵、又は可然要政之御方御上京有御座

度奉存上候、篤と御吟味可被下候、乍不肖一盃之処へ、

五六三ノ一

精力を尽シ可申候得共、此処へ機軸之動変ニ大關係之模

一御守衛兵士六拾弍人

様ニ相成候間、存付候次第申上候、右御内用迄、早々如

内 弍人 隊長騎馬役

是御座候、以上、

拾人 伍長

京都

五拾人 兵士

五月十六日

本田弥右衛門

中山中左衛門殿

一牽馬拾弍疋

大久保一藏殿

但馬具付

追而急速相認、蒸氣船白鳳丸大坂出帆之間ニ合候様

一大炮六挺 内 弍挺 七百目

と存差急候故、別段小松家江も不申上候事、

但要具玉薬相添

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第三九号文

弍挺 五百目

書ト同文ナリ)

但書同断

文書原寸 縦一六・二種 横一三五・五種

弍挺 四百目

三三 本田弥右衛門ヨリ朝廷へノ届書

二通

本田弥右衛門ヨリ在藩ノ家老中へ

一小銃拾八挺 四匁玉

本田弥右衛門ヨリ中山大久保へ、

但要具玉薬添

以上京都御守衛兵ノ件

外ニ

一倍卒式拾式人

但隊長式人内之者ニ御座候

一右同拾式人

但伍長兵士同断

右式行倍卒之儀は以来交代之節は、不同可有御座

候間、兼而御断申上置候、

一別紙姓名書一通

右は此節攘夷拒絶期限御決定ニ付、何時兵端相開候儀  
茂難計候間、御守衛兵士早々可差出旨被仰渡趣承知仕  
候、依之国元江早速申越置候間、人数罷登迄之間、御  
当地江罷在候者之内より、急変之節は御用相勤候様手  
当仕置候付、別紙姓名書相添差上申候、尤国役高六拾  
式万石余ニ付、此段申上候、以上、

五月十八日

松平修理大夫内

本田弥右衛門

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第三二八ノ  
一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二種 横九二種

五六三ノ二

別紙ニ申上候通、国役高六拾式万石余之儀、爰元江悉皆  
仕候石高相分居不申候付、国許江取調方申越置候間、相  
違可仕儀も難計候付、兼而其段被聞召置可被下候、此段  
為念申上置候、以上、

五月十八日

御名内

本田弥右衛門

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第一卷第三二八ノ  
二号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二種 横三五・五種

(包紙ウ書)

一中山中左衛門殿

京都

大久保一藏殿

本田弥右衛門

(朱)  
「癸亥五月廿日」

五六三ノ三

書付三通

内一通

但御守衛兵士并率馬・大炮等御届之儀ニ候、

一通

但御国役高相違可仕儀も難計候間、兼而御断申

上置候との儀ニ候、

一通

但姓名書

議奏

(実考)

三条中納言様

御用人

三宅左近

右江昨十八日参上、右御用人江出会演説之上、別紙三

通差出候処、只今参

内中ニ付、御帰宅之上可差上旨申聞候、左候而申述候

は、国役高之儀、御当地右様之仰渡発起之儀ニ而、愈

々相分兼粗心得候者も罷居、右ニ基キ申上候得共、何

分悉皆之石高突留兼申候間、国元江申越置候ニ付、万

一石数相違之儀も御座候ハ、往復之上其段可申上旨

申述置候、且亦率馬・大小銃之儀何様可仕哉之旨承候

処、いつれ追而取極之上御沙汰可有之候間、夫迄は御

屋鋪江当分通御用意有之度、御守衛兵士之儀も、追々

は詰場御造宮可相成儀ニ候得共、急々運兼候儀も有之

候付、いつれ追々御規定可相成と之趣申聞候間、相応

申演罷帰申候、就而は何分

朝廷之御議定、いまた居兼、攘夷拒絶期限御決議ニ付、

急々御手当被仰渡候儀も御座候へは、いつれニ基キ取

扱可仕義茂出来難仕、只今之処ニ而は、仰渡通手当さ

え仕置御届申上候得は、まつ夫ニ而相濟候御模様ニ付、

其通仕置候間、追々御決定之上、仰渡可有之候間、其

上ならては何とも難申上候、且亦隊長其外又は率馬・

大小銃等之儀は、当様御馬預御軍賦役江申談御届申上

置候、

右之通私差支一往差寄、江戸御留守居付役内田仲之助

相勸申出候間、別紙之通相添此段申上候、以上、

亥

五月十九日

京都

本田弥右衛門

御国元

御家老中様

五六三ノ四

追而申上候、御国役高之儀、内田仲之助江戸表之振合  
取寛六拾貳万石余之御届ニ而、右ニ相応候人数等御届  
為致置候得共、当人も悉皆之御石高取寛不申旨承候間  
何分被仰渡候様仕度候、

一加世田・伊作・伊集院より人数被差登候付、出水・高  
岡人数江交代被仰付候条、両郷人数出立罷下候様可申  
渡旨、被仰付越候得共、本文通御守衛兵士急々差出候  
様被仰渡、御城下人数之儀は、別段御吟味之趣も被為  
在候哉ニ御軍賦役より承趣御座候間、右両郷人数之儀  
も御守衛兵士被差登迄之間、交代差留置申候、委細之  
儀は御軍賦役より申上越候儀と奉存候、

右之通御守衛兵士之儀、御家老衆江御届申上越候間、  
同案を以申上候、諸藩とも右同様之振合ニ而、不相揃  
向も有之哉ニ御座候、此旨旁御届申上越候、以上、

京都

亥

五月廿日

本田弥右衛門

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

文書原寸 縦一六種 包紙原寸 縦二七種

横二六〇種 横四〇種

本田弥右衛門ヨリ中山中左衛門大久保一

藏へ

幕府英国へ償金支払ノ件

(複製朱書)  
「癸亥五月廿日 本田」

態と飛脚差立、京師并関東之形勢左ニ申上候、松方助左(正徳)  
衛門帰国大坂滞在中、御用封差遣旨水戸藩士之私書写  
取差上置申候、右ニ付其後之次第相分り不申候処、昨  
朝高崎猪太郎江戸表より荒増申上候書翰并聞合申候て  
横浜港へ差越、町触等写被成候書付到来并水藩士之私  
状随分内情を尽し候一冊子有之、水人

中川宮江昨朝持参仕候由、右写并一橋卿当職之御辞表



一通、鷹司殿下江之一書、今日便差上申候、是ニ而

関東之情態内策稍可察ニ付、追々

天覧ニ茂備り申賦ニ而、既ニ先日之水藩人之書

御覽被為在、一橋卿之処も別而被為懸

觀念、何分可救之道相立候様御沙汰之由敬承仕候、関

東ハ攘夷拒絶なと申事ハとても參り申事ニ無之由、今日之形勢ニ付ハ

御朝議茂大ニ御処置振ニ御困り之御内情と被伺申候、

小笠原(長行)圖書頭儀拒絶応接之論と一橋を扶ケ申処ハ、水

野癡雲始随分正論と申候得共、何分不容易

皇国之大事、独断を以償金十七万トル差渡候一事、奉

对

朝廷不可宥之大罪此上なき者ニ付、此儀ハ昨朝当表江

茂相知レ為申儀故、同人御処置及関東へ御達振之処等

御朝議中之由ニ奉拝承候、此一事ハ猶追々可申上候、

一橋卿ニ茂最早御独立孤行不被得止之場合ニ付御辭職

実ニ御心中被察候、乍併二月十一日攘夷期限御受被成

候時ニ、此病根ハ釀被置候事ニ而、失誤今更論しても  
無用之事なから残念之至ニ奉存候、

一昨日ハ

中川宮様も召ニ依り

御参内、種々埒も明かぬ

御朝議共、殿下御相談有之候得共、大略御評議次第  
と被仰、一橋卿之一義ハ今日ハいまた何之分別も無之

旨被仰切候由、右ニ付、殿下より

三郎公を被召登候事、御相談被為在候処、被召之御詞  
ハ如何被仰候哉、此節上京御暇帰国之次第御聞之通

之儀ニ付、普通之御召ニ而ハ上京之儀ハ御受難申上可

有之欵と被

仰答候而、先夫也

御朝議ハ止候由、

主上之御前江御一人御出頭之折は、段々

御内話茂被為在候哉ニ而、追而微細ニ拝承之上可奉

申上候、関東右通之形勢ニ付ハ猶差惣ニ付而一變動可

仕と見及申候、就は先便ニも申上候通、此涯之処暫時  
誰そ御上京有御座度、日々  
宮様よりも乍恐

御相談等奉承知、重大之事件天下治乱ニ関係之際ニ当  
り、実以愚昧之私式日々配慮仕事ニ而、一身之勞苦心  
痛等ハ更ニ厭申儀ニ無御座候、

宮様ニ茂極内ハ枢機之密策

御直ニ御拜聴被為在、乍恐御当家御依頼之

思召より件々

御顧問を奉蒙次第、万一二も天下之事件を誤候様之儀  
奉申上而も実々恐懼不少、此涯之処、甚至難至重之御  
場合と奉存候付、

皇国之御為何れ之筋ニ茂 御輔翼此時と奉存上候、篤

と御熟考

君意御伺取可被下候、極内此旨申上候、

一大樹公昨日御参

内、摂海岸巡覽御備之趣言上、昨日ハ表通小御所ニ而

天顔拜畢而、退出之由ニ候事、  
右条々奉申上度如是御座候、猶不絶已来之形勢可及言  
上候、以上、

京都

本田弥右衛門

亥  
五月廿日

御国元

中山中左衛門殿

大久保一藏殿

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第四〇号文  
書下同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二種 横二七〇・五種

委重 村山齋助ヨリ藤井良節へ

京師及関東ノ情報

先達而於浪花板倉閣老(勝靜)へ相迫リ候儀ハ、貴兄いまた御滞

京中ニ而、委曲御承知之通ニ御座候、其節までハ償金・

扶助金共ニ弥相渡候哉、未相渡候哉之間、寢と相分り不

申候処、此節関東より事情書相達、当月九日弥被相渡候

ニ相違無之、左候而攘夷期限延引よりすへて満宮俗論怯懦之次第、遂一今便より申上越候間、御承知ニ相成候事と奉存候、然る処、京師之情実近来ハ諸暴論之者共もおほかた致帰国、堂上方之尻押いたし候者も無之哉ニ相見得、一体関東因循之取計ニ就而も、思之外

朝廷より御せめ付之模様無之、(美美)三条・姉小路などニハ余

程おたやかニ相成候様相見得、甚不審ニ御座候、畢竟他人之力ヲ借り付ケ棄之暴論故、尤之事トハ存候得共、自然ハ幕吏之賄賂も被行申候半と存候、彦藩杯も岡本半助

致上京、頻りニ三条家へ手ヲ入候由ニ而、此節ハ掃部頭も上京、浪花へ罷下り候由ニ御座候、岡本半助当年五十

二歳也、三本木之舞妓何とか申ものを二百金ニ而受出し候由、此事全半助か好色より出候事ニ無之、官家へ相睦

ひ候道具ニ致し候事之由、内々承り申候、虚実ハ分り兼候得共、肥後藩士之咄ニも左様申事ニ御座候、将又関東

一統之俗論突ニ沙汰之限りニ而、

大樹公・板倉已下一向御存無之と申事ニ候得共、是以虚

実相分り不申、(徳川茂徳)尾州大納言此頃上京之処、道中より病氣

之由ニ而、名古屋へ引籠り之由、兎ニも角ニも関東之因循ハ相違無之、千万年相待候而も

叡慮遵奉之道ハ相立申間鋪奉存候、五月十日長州夷艦打払ニ相成候事、実ハ取々ニ承り候事ニ而、いまた慥成儀

も承知不致候得共、自然ハ実事なるへく哉ニも存申候、尚追々情態相分り次第可申上候得とも、任好便此段形行

申上候、御心得迄ニ御座候、已上、

五月廿日

村山齋助

藤井良節様

参人々御中

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第四一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六糎 横一七〇糎

○五六 進藤式部権少輔ヨリ小松帶刀へ

五六 近衛忠熙忠房両卿ヨリ島津三郎公へ  
天下形勢ノ切迫ヲ報シ久光公ノ上京ヲ促ス  
書添共二通

五六七ノ一

(包紙ウツ書)

島津三郎殿 極内密々  
忠熙  
忠房

(朱) 緘三ツ同シ

(封紙ウツ書)

島津三郎殿 極内密  
忠熙  
忠房

緘

尚々切迫之形勢歎息候、

天朝真実之御趣意不貫徹暴烈之者共増長歎入候事、

追々向暑候、弥御勇猛尚承度候、方今天下之形勢何共筆紙ニ難認、実以治乱之堺、何共痛心候、就而ハ其許御上京之義如何ニも祈々申入候事ニ候、逆も御上京ニ不相成ハ暴烈ノ治りかた六ヶ敷、色々ト苦心候、

大樹滞在帰府両様之事ニ付、大混雜ノ、関東ニハ償金も遣し候次第ニテ、決テ攘夷之場ニ不至、戊午之頃井伊出職中同様之次第、姦吏之徒計、一人モ有志無之旨、一橋ニも是非無次第、引籠居候由、案外之大変而已ニ候、姉小路大変一件、甚六ヶ敷ノ薩人之業ト相成、召捕ニ相成居候人々在之、扱々痛歎候、是ハ全其許ヲきらひ罪ニおとすへき計策かと被存候、扱々苦心難堪候、尚委細弥右衛門初より可申入ト存候、幸便荒々大取紛居、寸隙ヲ盗ミ大乱書、荒々御推覽可給候、此場ニ而ハ其許何卒御奮発御上京ナラテハ国家難治、何卒御賢考分而祈申入候事、

五月廿六日夜認

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第四六号文  
書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦二六・二種 包紙原寸 縦三〇・四種  
横 九〇種 横 四二種

五六七ノ二

〔包紙ウツ書〕

大乱書御免

島津三郎殿

極密々

忠熙  
忠房

〔朱〕鹹三ツ同シ〕

□

□

□

┌

別紙ニ申入候、度々其許御上京ニ相成候様、以

勅書被 仰下、且又参内之節 御沙汰モ被為在、何分昨年

勅定候守護職一条、深キ

叡慮不貫徹何分暴烈之堂上増長、更ニ不勅、扱々ト

歎痛候、何卒此場ニテハ打やぶ其許御奮発 御上京之

様、何卒祈々申入候外致方聊モ無之、只々且暮ニ歎息之

次第、呉々御賢考

公武第一和皇国万民安堵之御良策在之度存候、実々中川  
宮ニは御扶助之所詮も無之、同様ニ歎息被致候事ニ候、  
御遠察可給候也、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第四八ノ二  
号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一六・二種 包紙原寸 縦三〇・四種

横五四・二種 横 四二種

五六 近衛忠熙忠房両卿ヨリ島津三郎公へ

姉小路少将暗殺ノ件

〔包紙ウツ書〕

極内密々

島津三郎殿

几下

忠熙  
忠房

〔朱〕 五月廿七日

〔朱〕鹹

□

〔封紙ウツ書〕

内密々

島津三郎殿

几下

忠熙  
忠房

〔朱〕鹹三ツ同シ〕

□

□

□

┌

内密々

高崎猪太郎其地へ下向、何も具ニ御聞取之事と存候、誠ニ不存寄大變相起り、何共く痛歎候、実ニ此大變明白ニ不相成ハ、朝敵ト相成候而ハ実ニ於当家も何共面目モ無次第、對

天朝実ニ勤王之趣意モ失ヒ候事ト何共此一件、深悲歎之至ニ候、全此義は薩州ヲ忌嫌フ者之計略よりして、薩ニ相決候事と、実ニ何共口惜く残念く成次第、如何ニ茂此儀分明ナラズンハ其許昨年来格別尽力被開基本候儀モ一時ニ水之泡ト相成必至、歎入候事ニ候、何分ニモ此義分明ニ相成候様御尽力在之候様呉々申入候、

朝廷之処、精々

御疑惑無之様仕度存念、併御案内之通、水解難成向々モ可在之、其辺之処、扱々痛歎候、何分今度之義ハ不容易變事故、其許御出京ニテ御尽力明白ニ相成候へハ、重畳之儀と存候、呉々苦心不忍申入候、呉々岐度御尽力之程偏ニくくく折々申入候、

中川宮ニ茂格別御歎痛之儀、実ニ御尤千万、何共此假ニ而ハ對天朝千載之御奉公モ難立、何分ニモ無実汚名之罪分明ニ相成候様、呉々折入候、何分ニモ御賢考ニ而薩藩一体ニ不拘様呉々疑惑水解之処折申入候、何卒十分ニ厚御賢考在之明白之所置、幾重ニ茂待入存候事ニ候、呉々苦心之至ニ候也、

五月廿七日夜認

大乱書不文御推覽

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第四七号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・二種 包紙原寸 縦三〇種

横 一一〇種 横四二種

癸亥 江戸岩下佐次右衛門ヨリ大久保一藏へ

英国へ償金交付後ノ幕情、横浜英字新聞

一帖添

五六九ノ一

新聞紙一帖差上申候、外ニも一二帖有之候得共、先

達而撰津殿へ差上置申候、

爰許事情先便申上候通、其後差而相変候義も無御座候、  
昨日関・海江田兩人水ノ武田へ差越候処、幕ノ議論ニハ  
驚入候由、償銀一件ニ付迎も攘夷等は思ひも寄らすとの  
事故、左候ハ、

朝廷より敵重被仰付候義、寛急被成候ハ、急度被仰渡  
候節ハ如何可被成、又御届ハ何ト御申上被成候ト申候処、  
朝廷より左程六ヶ敷被仰事ニ候哉、御届向へいつれ行成  
之義ニ而無之候而ハ、致方も有之間敷ト申議論之由、武  
田も相応申置候由候得共、翌日不殘償銀被相渡候ニ付、  
武田も引入、水公も尤当分御引入被成候由、就而関より  
此上ハ一身之所置如何心得候而可宜哉ト申候得ハ、先手  
ヲ引静観之外有之間敷欤、只今通ニ而ハ、策之付様も無  
之、いつれ一変致迄ハ相待可申、其内自分迄ハ定而被罪  
ニ而可有之ト申候由、近日何とか一変可有之と咄いたし  
申候、外ニ鎚成説一向承得不申候、尤満城奸吏計ニ而、有  
志之幕士ハ悉嫌疑ヲ避退隠人ニもめつたニ逢不申候故、

情実聞出兼申候、此上ハ、

朝命ヲ以て一撃不為致候而ハ埒明事ニハ有之間敷候、浪  
士輩ハ先度巨魁取押、以後空論計欤と被察候、一橋公水  
公以下閣老等ヲ可誅抔ト落書等ハいたし候由、決心之処  
ハ六ヶ敷可有之ト存申候、○品川宿引移方既ニ兩日中ニ  
も取付可有之様、風聞いたし候処、取止との事、昨日兩  
国川開きも形はかりニ而淋敷候由、当分市中別に騒ヶ敷  
ト申事ハ無之候得共、何か尻ノ居らぬ心持之由ニ御座候、  
○御殿廻解方余程片付申候、先は暑中御伺旁為可申上如  
此御座候、頓首、

五月廿九日

岩下（方丈）佐次右衛門

大久保一藏様

参人々御中

文書原寸 縦一六・七糎 横二一八糎

五六九ノ二

（表紙）  
一雖有脱字舛誤、往往難読、一從原本不更加改竄、

亥五月念七

陵我藏

於横浜千八百六十年第六月三日我文久三年四月十七日

一或ル騒人ノ歌ニ「シャルールミー。チャイナース。タランジ。ヤツハレ。ウキヅヘウキルトルト。ゾウー。スカン」我等モ亦之ニ同情ナリ、而シテ今日日本外國ト和親シタル上ニ於テ、疑ハシキ國法ヲ立ルコト多シ、其ノ一ハ國禁ヲ犯シタル者ニ大赦ヲ行フコトアリ、既ニ廿日程以前ニ此事ヲ執行ヘリト云フ、然シトモ其レハ勅命ナルカ又台命ナルカ其故ヲ知ラス、

一閣老ヨリ達セラレタル許多ノ檄文ヲ或人偶然ト我等ニ示ス、其中ニイヘルコトアリ、方今武術ニ達セル勇士四千名ヲ扱シテ 大君麾下ノ兵ト為スヘキ命ヲ下シ、殊ニ彼等ヲ鼓舞セン為ニ、俸金ヲ与テ之ヲ厚ク所置スト云ヘリ、其國禁ヲ犯シタル罪人ノ中、武術ニ達シル者、就中浪人ト稱スル所ノ猛勇ナル者ヲ挙用シ、之ニ俸金ヲ与エテ不虞ニ備フルト云、

」

一其後或人告ニ、今浪人等ハ勇敢ナル一方ノ兵士トナレハ、此後日本國內ニ浪人タル者非サルヘント云、

一斯ノ殘刻ニ人ヲ殺害スル者ハ、今公法ヲ以テ自蔓スルコト能ハサラシムルハ、我等大ニ喜説ス、且日本政府法律ヲ立ルノ智アルコトハ、他國ノ及フ所ニ非ス、

警衛兵士ノ可恃事

一当地ニ備エタル井伊掃部頭兵士、去ル曜日神奈川ニ於テ或賊徒ヲ処置スルコトノ事情ヲ記ス、

一二三年前ヨリ神奈川ノ市法嚴ニシテ、或ル時、一軒旅屋ニ疑シキ者有リシ時、直ニ関門ヲ鎖シ支路ニ至ルマテ兵士ヲ備テ其旅屋ヲ囲ミ、其驗査ヲ逐テ擒獲セントスレトモ、之全浪人ニ非スシテ、又外國人ヲ殺害スル為ニ来リシニ非サルコト知ル、然ルヲ今之ニ反シテ後ニ浪人ヲ処置スルコト大ニ懸隔スト云フベシ、

一去ル金曜日午時、外國人一騎横浜ヨリ神奈川ニ至ル、同地ノ入口ニフル(ア)高キ場処ニ登テ、往還ノ側ニ有ル殿



ニ其馬ヲ繫キ、少ク下テ門アリ、此辺ニ足ヲ止メシ時、不意ニ後ヨリ肱ヲ執ル、之ヲ顧レハ両刀ヲ帶タル二人ノ賊徒ナリ、此ニ於テ彼等問、汝何国ノ者ナルヤ、如何シテ茲ニ来ルヤ、内地ヲ徘徊スルニ馬ヲ用ユルハ何事ソト云フ、其外国人ハ我無礼ヲ咎メラレンコトヲ恐テ、其語り能フヘキ慇懃ニ日本語ヲ以テ応答セシニ、賊徒羽織ヲ脱キ袖ヲ蹇ケ長刀ヲ抜カントスル体ナリ、此ヲ見テ彼レ帶スル短筒ヲ取ントス、賊徒其短筒ヲ見テ俄ニ側ノ旅屋ニ入ル、故ニ其外国人ハ一人ニシテ外ニ援救モナシ、且其証拠ナル人ナシ、尤モ強テ砲発セントモ思ハザレハ、海岸ニ出テ小船ヲ求メ、之レヲ免カレント急キテ渡船場ニ近キ処ニ至リ顧ニ、右ノ賊徒一途ニ追来ルヲ見ル、故ニ彼レ小船ニ乗込マント番処ヲ急キツ、凶徒二人我ヲ追ヒ来ルト番士ニ声ヲ掛ケタレトモ、番士等船ヲ速ニ出サセス、水夫ニ命シテ却テ纜ヲツナガシム、二人ノ浪士是ハ水戸浪士ナリ追ヒ来ルトモ、彼等ニ向ケタル短筒ヲ見テ、彼等上船セハ反テ打殺サレ

ント思シヤ、船ノ舳ニ佇立セリ、暫クシテ番処警衛ノ者居間シテ双方共ニ無事ナリ、扱政府ヨリ浪人ヲ緝待スルト見エ、番士トモ浪人ヲ捕フル体モナク、却テ耳語ナドヲ為セリ、此浪人海客ヲ狙撃セン為メ当境ニ来リシヤ、番士トモ浪士退去セシメ其陰謀ヲ破ラント、彼ノ外国人ヲ夜五ツ時ヨリ九ツ時マテ船中ニ居ラシメ神奈川ニ在ル米利堅コンシユル館ニ行クヲ許サス、又船或ハ馬上ニテ横浜ニ帰ルコトヲモ許サス、依テ熟察スルニ政府ハ浪人ニ同意シテ、彼等ヲ指導スルナラシカ、此時浪士ヲ許シ置キ、又外国人横浜ニ帰ルヲ許サルハ尤モ不当ノ処置ナリ、

一 其後当地ノ奉行外国長官ニ向ヒ、此近辺ニ斯ク悪党多ケレハ、今日ヨリ一月間ノハ外国人横浜ヲ出サランコトヲ希望ス、且警衛ノ為メ横浜ノ外面ニ、大君ノ兵士ナル「ハタイロン」ヲ置カントノ存意ヲ告ク、

一 水戸侯此間京師ヨリ帰府セシニ、大君留後ノ全權ヲ与エラレント風説ス、此説若シ実ナラハ、以後如何ナル

変革ノ新政アラヤ云カタン、

一是神奈川住居ノ合衆国コンシユル家族及ヒ教師等、浪

人ノ難アランコトヲ慮リ、彼ノ地ヲ退去スヘシトハ、

政府官吏ヨリ忠告アリト聞ケリ、

一前記セン風説ニ、浪人江戸ニ陣屋ヲ構エ、力ヲ究メテ

外国人ヲ襲撃セント謀リシヨシ、其説虚実ヲ記スルコ

ト能ハサリシカ、今ニ至リテ信スルコト得タリ、

一去ル日本四月十四日夜半後、日本政府ノ勇力ナル兵、

江戸留在セル西国「コンシユル公使」警衛スル日本政

府ノ勇士トモ、公使ニ説キ浪士ノ乱妨ヲ避シメ、横浜

ニ護送セラレタリ、蓋シ政府ニ於テ江戸及ヒ神奈川ニ

在留セル合衆国「コンシユル」及ヒ教師等、日本政府

士官ノ急緩ニヨリテ、「コンシユル」ハ亜国軍艦ニ謀

リ、家族ト共ニ彼軍艦ニ乘リ移ル、教師モ亦横浜ニ転

居ス、同国「ミニストル」ハ其族ヲ携エ、明ル十五日

未明ニ江戸ヨリ火船ニテ到着ス、

一大君股肱ノ水戸公、陸軍惣裁職ニテ副將軍ヲ任セラレ

シカ、酒井左衛門尉・大久保加賀守・阿部播磨守ニ命

シ、浪人ヲ収捕セシムルニ、日本四月十五日右諸侯等

其居宅ヲ囲ミ、浪人十八人ヲ捕獲セリ、又云、四五日

以前浪人猛悪者兩人ヲ江戸街頭ニ梟セリト云、

一或人云、此奇異ナル政府、其号令朝變暮改スルヲ有司

共自悔スル程ノコトニシテ、他ニ言掛セリ、

一水戸家ハ以前ヨリ今ニ至ルマテ、外国人ヲ敵トスルコ

ト我等能知レリ、然ルニ此家今全ク大君ノ代リトナリ、

外国ト和親スルハ如何処置スルヤ謀リ知ヘカラス、

千八百六十三年第六月廿四、於横浜

外国事務宰相小笠原圖書頭台下ニ呈ス

自台下ノ投書落手セリ、其書中仏国本条約面ニテ明ナル

如ク、千八百五十八年皇国日本大君ト我国君ト取結タル

条約ニ基キ、仏人貿易ノ為ニ開タル日本港々ヲ鎖スヘキ

コトヲ台下予ト談判スヘキ旨ヲ大君ヨリ命セラレタル由

ヲ載タリ、台下ノ書、外国事務掛リナル他ノ御老中ノ手

記アラストイヘトモ、自回答ノ日本ト取結タル条約ハ、  
仮令日本何レノ役人之レニ違フノ告知アリトモ、コレニ  
カキラス、其条約常ニ全ク保守スヘク、又去歲欧州ニ送ラ  
レタル日本使節ト取究タル定ノ如ク、執行フベキコトナ  
リ、是我帝国仏郎西英名ナル国君ノ政府ニ於テモ然リト  
思フ、然トモ全必ス

台下ヨリ余ニ送ラレタル暴ナル告書ヲ仏国ニ送り、文明  
ノ国々ノ史ニモ例アラサル新ニ条約ヲ破レルヲ修理シ、  
且如此ヲ企ツル者厳シク罰スルノ方法ヲ設ケ、速ニ執行  
シムル為メナリ、余謹テ台下ニ報告ス、帝國政府ヨリ右  
回答ノ来ルマテハ、諸約条前ノ如ク執り行ワルヘシ、且  
日本ノ諸官員誰ヲ問ハス、台下ヨリ左件ヲ報知センコト  
ヲ欲ス、日本ニ在ル皇國仏ランスノ臣民ハ、今横浜ニ在ル  
支那近海水師提督ジューレー帥ヒタル仏國ノ兵卒ヲ以テ  
警衛ニ安全アラシムヘシ、千八百五十八年ニ取結タル条  
約ノ旨ヲ破ラントスル者ハ、右水師提督何人ヲ別タス、  
陸又海ニ於テ夫ニ応スル要用タル法方ヲ取ルコト、彼カ

方寸ニアルヘシ、

拜具謹言、

在日本仏國皇帝殿下ノ全權公使

ドレン・デ・ヘクール手記

書記官

ワアンテルウー 訳

千八百六十三年第六月廿四日横浜ニ於テ

外国事務執政小笠原圖書頭台下ニ呈ス

日本在留不列顛女王殿下ノシヤルジダフエイルスナル余

ブリタニヤ

ノ同僚ト齊シキ台下、大君殿下ノ命ニテ予ニ名当テ送り  
玉エル先書ヲ落手シ、実驚愕セリ、此細故ヲ載サル拙キ扱  
告ハ姑ク置テ論セス、國ノ大君ノ御門開キタル港々ヲ鎖  
デ、条約各國ノ臣民ヲ右港々鎖チ、条約各國ノ臣民ヲ右港  
々ヨリ欲クル為メ、台下ヨリ斯ク扱告シ玉ヒタル皇帝大  
君ノ処置ニ因レハ、日本ニ困難ノ来ルコト当然タリ、然ル  
ヲ是ヲ全ク知ラザレハ何ソヤ、是余ニ於テ信カタキナリ、  
不列顛女王殿下ノ名代タル余第一件ニ注目ス、大不列顛

此国トノ条約ヲ正シク守リ、猶擴メ、加之此迄ノ様此条約ヲ自由ニシ、永久動サル様申立ルコト疑ヒナクンハ、敵ニシテ日本ヨリ抗抵シカタキノ手筈ナリ、之レヲ柔ケケ調エンコトハ、日本ノ大危難ニ至ルマテ、皇帝或ハ大君又ハ皇帝・大君共ニ秘スル所ノ理アリテ最モ信スヘキ手段ヲ逐一急ニ説明セラレナハ、此国ノ長官猶其權ヲ存スヘシ、是ヲ以テ余此国ノ長官ハ懇ニ左件ヲ忠告スルハ余ノ職分ナリ、台下ノ告書ニ抛リ、不列顛女王殿下ノ政府熟考ノ上、克ヲ決セハ今秘シ玉ユル諸種ノ処置ヲ執リ行フトモ、其克任応サルヘシ、然リトイエトモ、余又次条ヲ台下ニ告知セサルヲ得ス、今台下ヨリ申聞玉エタル拙キ告書ハ、文明不文明国ノ歴史ニモ例ナキ旨ヲ大君殿下ニ奏シ玉フヘシ、大君殿下ノ必是ヲ御門ニ奏聞玉ユルコト疑ヒナカルヘシ、此事ハ実ニ条約諸国ニ対シ、日本ヨリ軍期ヲ告知スルナリ、今速ニ鎖港論ヲ止メサレハ、日本中ヲ速ニ敵シキ罪ヲ以テ罰セズニハアルヘカラス、不列顛女王殿下ノシヤルジダフエイルス、

シント・シヨン・ニール手記  
 書記官  
 エル・ユースデン 訳  
 冊子原寸 縦二四・三種 横一六・五種 八枚

○五 近衛忠熙卿ヨリ島津久光公へ

公ノ上京ヲ促ス

五 久光公へノ宸翰

中川宮御書

近衛前関白御書

五七一ノ一

攘夷之存意は聊茂不相立、方今天下治乱之界ニ推移リ、日夜苦心不過之候、今度大樹婦府之儀ニ付而モ、段々不許趣申張候得共、朕存意ハ少シモ不貫徹、既ニ婦府治定候事、実以於朝廷茂存分更ニ不貫徹、総而下威盛ニ中途之執計已ニ而、偽勅之申出有名無実之在位、朝威不相立形勢、悲歎至極之事ニ候、何分ニ茂表ニ誠忠ヲ唱、内心

姦計、天下之乱ヲ好候輩已ニ候、昨年基本ヲ開候事故、

五月晦

深依頼ニ存、只管侍候事ニ候、三郎急速上京ニ而、尾張

前垂相ト申合セ、一奮発ニ而、中妨無之手段厚周旋、為

五七ノ三

皇国尽力在之、先内ヲ専ニ相整候刃不浅依頼候、昨年上

前関白御書

京之砌言上之筋、一廉も不相立者全姦人之策ニ候得は、

何分此処ニ而姦人掃除無之而は、迎茂不治ト存候得は、

暑気甚候処、弥御安康之条珍重尚承度存候、扱は段々切  
迫之時勢、天下治乱之界ト相成、甚以不堪苦心候而、  
朝廷実ニ恐入候形勢ニ在之候、幕ニ而も以之外之次第、  
如何可相成哉と痛心之至ニ候、右ニ付段々被惱

早々上京ニテ、始終朕ト申合真実合体ニテ無寸違周旋有

之度候、何分此假ニ而は、天下催已ニ而昼夜苦心候間、

勅書御内々賜之候テ、其假御伝申入候様トノ

其刃深熟考有之度候事、

勅書御内々賜之候テ、其假御伝申入候様トノ

上京於周旋は依頼致シ度儀モ候得は速ニ承知、周旋兼

御沙汰ニテ、中川宮より被伝候事ニ候、御拜見在之、急

而頼置候事、

速御上京可被奉安

五七ノ二

速御上京可被奉安

中川宮御書

叡慮存、右大臣始同志之人々連署ニ而も可申入候假、偏

唯今 御内勅書従前関白殿相廻候故 本田弥右衛門へ相渡

ニ御熟考早々御上京之様御頼申入候、委細之義は本田弥右

候、此 御趣意速ニ被遵奉候様、従尊融別而申入候、恐

衛門江申合差下候儀候、御聞取可給候、何も要用ノミ申入

々謹言、

候、実ニ安危切迫之次第可察給候也、

五月卅日

文書原寸（折紙）縦一九・三糎 横五三・五糎

文書原寸 縦一七・七糎 横五一・五糎

○三五 久光公へノ宸翰

上京周旋ノ勅命

三五 下之関砲台ヨリ米国船砲撃横浜新聞記事

四冊

○三五 尹宮ヨリ久光公へ

御内勅書ノ伝達

五七五ノ一

日本軍艦亞米利加蒸氣船江炮発せし新聞神奈川出版 抜萃

三五 近衛忠熙卿ヨリ島津久光公へ

追日暑氣相加候、弥御多祥珍重ニ候、過日は登京、其節

ハ久々ニ而得面展色々承悦入候、御心入之品々被患、永

可致重宝、毎々ニは不申入、取束荒々謝入候、亦方今之

形勢ニ付定而深謀モ可有之、賢考頼入候、猶良節・助左（藤井）・助左（松方）

衛門兩人へ申聞候事共被聞取、猶又以良節賢慮承度候、

先は要々計申入候也、恐々謹言、

二白、過日給候

一 亞米利加蒸氣商船ペンブロットク船船名 第六月二十一日我五月十六日

日 横浜港を退帆、同廿五日我五月十日 内海を航り下ノ関瀬

戸近く乗下り、午後二字頃旗章を建すして武器を備へ

大勢乗組し西洋造日本ハルグ船船名を遇き、亞米利加

国旗を颺け碇泊して後、四字頃彼ハルグ船日本軍旗を

建て順風ニ帆ヲ卷キ亞船を乗越し、凡四半里我貳百貳拾間余

を離て碇泊せり、此時水上四里我三千五百貳拾間余 計り隔たる

岳手ニ炮声響と斉しく、北岸よりも合図を合せ、夜ニ

入に及んでバルク船は舳綱を取り、船向を変しと見へ

砲発を始し時、近く来りて、其船側を亞船江向たり、同夜一字四半時前、バルク船より砲発を始め、暗夜なれとも電光にて明に見る事を得たり、拾式発計り放発せし時、一の砲弾橋上の綱を切断し、余は悉く本船を飛越し、此時亦ランリツキ船号と思しきブリク船風上より乗下り、亞船を隔る事凡四拾ヤルト我六間にして、バルク船の傍に錨を卸し、而して両船より発放する事至而迅速なり、亞船此時蒸気整し故、外国船兼て航海



せざる豊後の海峡を通り、辛ふして逃去たり、両船より砲発中は陸上にも夥しく炬燵を照し、大ニ騒動せりブリク船亞船江乗寄し時には未だ発炮之用意不整と見へ、船中動揺する而已ニ而、砲発せず、若其用意整たれば、纔百フート我十六間半余か百式拾フート我式拾間の巨離(一)なるか故、沈没せん事疑なかるへし、

日本軍艦弗船を襲し新聞神奈川 抜萃翻訳

一弗朗察国帝陛下の飛檄船キンチアン船第七月二日 我五月十  
 七長崎及び上海江向け横浜出帆、周防灘を航り、同八  
 日我五月朝四字頃士官兩人本船江来りて、渡来の次第  
 日廿二日を糺し、其後二時我一時也を経て炮声聞ゆ、弗船には弗  
 朗察国旗を颯け進みし、第二の炮台より敵敷砲発せり  
 船長是を犯して乗進み、陸上ニ至り、敵対之事件訊問  
 せんと端舟を卸し、水夫を乗せんとせしに、端舟砲弾  
 に中り沈没せり、所々炮台より発炮する事愈甚しく海  
 峡凡四分ニ至し時、軍艦式艘帆前のコルフエツト船号及

ひブリグ船同上 入江を離れ、本船より襲来り、両船より十八炮発し七発を船側江打込たり、向ふ手豊前地にも炮台を設たり、十五門なるへし、小笠原大膳(忠勝)太夫城下下フ下小倉近傍にある」弗船此炮台より纒一二百ヤルトト百ヤルトは我を隔て乗通りしニ、幸ひとは是より炮発を請すして、日本水先案内者之導引にて、西洋船の知らざる南手の海峡を通り、北手よりの炮発を脱たり、此乗筋は図面ニ記せしフ下なるへし、則筑前国にして松田(長徳)平美濃守・黒田甲斐守の領地なり、

冊子原寸 縦二四・五種 横一七種 六枚

五七五ノ二

下関交戦新文(聞)神奈川 翻訳

一 本月九日 我五月廿四日、和蘭国王殿下蒸気船メテ ユサー号十六門備、内海周防灘を航り神奈川江至らんと長崎港を開帆せしニ、纒の海程を経て、弗国飛檄船キンチアン船江接遇し、其船長下の関炮台および外国造之両

船より炮発に遇し事を告知せり、メテ ユサー船之船將は、内海を航らんと心決したるか故、長崎鎮台免許の上にて、水先案内者を船中ニ備ひ置けり、第七月十一日我五月廿六日の早天、エシマ地名近傍江碇泊し、無程下の関瀬戸江乗入たり、其時一の炮台より空炮二発を放ちしニ、市街前面ニあるブリグ船外國造の船より答炮八発を放せり、雖然向ふ手九州地方ニ日本船連綿たるか故、此合図ニ而敵対すへしとは思はさりしニ、ブリグ船同上及び国旗を建さるバルグ船同上近々と進み来、且敵重なる岳手の炮台よりも、メテ ユサー船江対し放発を始めたたり、ブリグ船上には青地に白三ツ星の上ニ一線ある長門侯の旗章を翻し、鱸には旗章を建すし而、両船を海岸水底凡式拾尋なるへき所ニ備たり、故ニメテ ユサー船は三カーフル我式旨間余より近く進む事を得すといへとも、報復の為不関軍艦の法則ニ随ひ、メテ ユサー船より炮台及び両船ニ対し実弾空弾を放発し、其後汐ニ逆而進みし故、暫船及び炮台江の炮発を止たり、陸



手砲台は嚴重なる大砲手を備へ、即其備用之大砲は多  
分式拾四ポント弾徑六インチ我五寸也乃至六ヶ所の設あ  
りしと覺知せり、メテュサー船ニ而重大之大砲八門備  
の大なる砲台を打鎮しといへとも、樹木岩木の後ニあ  
る峻高なる砲台より砲発を止めず、メテュサー船より  
も両船江対し砲発を交しといへとも、陸手近く乗寄し  
故、下の関前面之砲台四ヶ所より手強く発砲を請け、  
且敵の砲発目的に在し故、船体を打貫かれし事屢也、  
九州方の砲台よりも敵対すへしと疑惑せし故、メテュ  
サー船を的とする砲台より放発中は退く事難しと思  
ひ、成丈船中よりも迅速ニ放発し、瀬戸を乗通る事を  
心決し而、敵の発砲にて釜捻子舵ニ禍あらん事を防か  
んため是を覆ひ、只敵をあしらい静ニ進発せんと謀れ  
り、メテュサー船一時半の内、砲台七ヶ所より敵數砲  
発を請しニ、沈没せずして死人纔なるは不思議なる事  
也、敵之砲発三拾発之内、十七八発メテュサー船之  
船体を打貫き、悉く船具煙筒之上を打越し、弾徑八イ

ンチ我六寸六歩余の空彈三船中ニ而破裂し、三拾ポントの彈  
丸にてメテュサー船の砲段ニある水夫三人を打斃し候  
式人を傷け、且此他の砲彈にて大砲を指揮せし第一等  
水夫ニ深手を負せ即死に及へり、此砲彈はコンシユル  
ゼネラルを離るゝ事至而僅にして、危急を脱たり、或  
は両舵より打込し彈丸ニ而小銃台等を破壊し、水夫  
兩人江傷け此者共は于今生死を知らず、且亦船將と  
士官ウキススル名人との間に砲彈飛來り、其虎口は脱し  
候といへとも、薄手を負へり、船將助役トルコウ人且其  
余之士官も辛して脱たり、空彈三船中にて破裂し、彈  
丸十七を船中江打込、船体大に損傷せり、乍去唯四人  
を斃し五人江傷しは可驚の一也、敵の損亡は難計とい  
へとも、砲台中ニ軍卒群集せしをメテュサー船より柘  
榴彈及び八インチ我六寸六歩余の空彈打懸し故、至而砲台も  
毀壞せしと覺たり、メデュサー船より打出せし砲彈、  
砲台江中らざるは悉く市街ニ打込、敵より放ち本船江  
的中せざる彈玉は向手九州方の日本船江打当たり、市

街の広き所は凡千弍百エル我六百五拾狭き所ニ而九百エ  
ル我四百九拾なり、  
四間余

右は英人出版仕、歐羅巴諸州江廻達仕候を翻訳之上、  
入御内覽申候、以上、

岩瀬弥四郎

冊子原寸 縦二四・五種 横一七種 六枚

五七五ノ三

亥六月朔日於下ノ関亜米利加軍艦接戦新文神奈川版<sup>(附)</sup>

一 亜米利加蒸気船ペムブロック<sup>号</sup>船日本軍艦阿艘より炮発

に遇し事件当月十一日<sup>我五月廿六日</sup>横浜港江達せし故、亜米

利加蒸気軍艦ワイオミング<sup>号</sup>船船將ドーク<sup>名</sup>人航海の

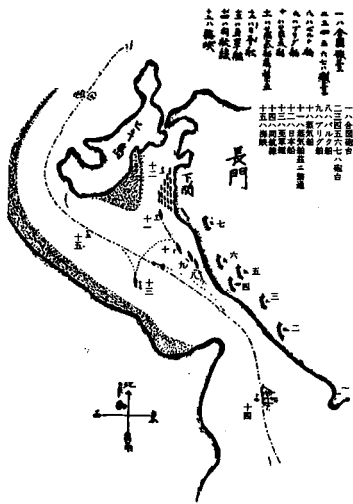
用意し、石炭其他用意之品を調べ、同月十三日我五月廿

八日朝五字同所を退帆し、同十五日我五月三十日豊後の海

峡江乗入れ、姫島江碇泊し、翌十六日我六月朔日朝内海

之西手江向け下の関瀬戸内江進発せり、北手の陸地は

- 一 全長五里
- 二 全幅五里
- 三 全深五里
- 四 全高五里
- 五 全長五里
- 六 全幅五里
- 七 全深五里
- 八 全高五里
- 九 全長五里
- 十 全幅五里
- 十一 全深五里
- 十二 全高五里
- 十三 全長五里
- 十四 全幅五里
- 十五 全深五里
- 十六 全高五里
- 十七 全長五里
- 十八 全幅五里
- 十九 全深五里
- 二十 全高五里



長門国にして長州侯の領地也、昨年中蒸気船及ブリグ  
 船<sup>の</sup>形を買求めり、蒸気船は船号をランスフィールト  
 と唱へ、<sup>(他)</sup>価直洋銀拾貳万五千枚、ブリグ船<sup>同</sup>は価直洋  
 銀凡弍万五千枚にして其船名をランリツキと云、亜米  
 利加軍艦瀬戸江近寄し時、北手陸上の炮台より合図の  
 一炮を響かせ、下の関西手の炮台よりも炮発せり、亜  
 軍艦南方の岬に至し時は、ハルク船<sup>の</sup>形フリグ船<sup>同</sup>及  
 ひ蒸気船北方の陸近く顯然と碇泊せり、此蒸気船はラ

ンスフキールト船<sup>号</sup>、ブリグ船はランリッキ同上にして、今吾艘は其名を知らず、総て此船には鱧ニ日本国旗を翻し中櫓には長門侯の旗章を建たり、亜軍艦此所ニ進し時、水面より高サ凡五拾フート<sup>我八間 式尺余</sup>北方陸手にある三門備砲台より発砲し、中櫓と鱧櫓との間なる綱を切断せり、此時亜軍艦も蒸氣ニて運用し、亜米利加国旗を颯しに、再び四門備之砲台より発放せし故、是ニ対し亜軍艦よりも備へ設けし大炮を以て報復し、彼船々江乗寄たり、此時ハルク船は陸手近く備たり、凡五拾フート<sup>同上</sup>是を隔てブリグ船を撃き、亦是を離るゝ事五拾フート<sup>同上</sup>にして蒸氣船を備たり、亜軍艦ワイオミ<sup>号</sup>船將此蒸氣船とブリグ船との間を進まんと其命令を下し、ハルク船ニ並ぶ時、彼の船より三挺の大炮を放発し、暫して亦フリク船と相並ぶ、此船よりも三拾式ポントの鑪砲を放ち蒸氣船も亜軍艦の目当に進み来り、其船中ニ備し一二の小さき銃砲を海峡に向て放発せり、亜軍艦近くブリグ船及び蒸氣船之式艘江双側よ

り放発して、蒸氣船の鱧を周り、南方の陸手に進みしニ、砲台六ヶ所及び蒸氣船ブリグ船并ハルク船より斉しく発放を請け遇て、本船を乗据しといへとも、容易して退く事を得たり、蒸氣船ランスフィールト<sup>号</sup>船は其進退を弁利ならしめ、且は亜軍艦よりの初之発砲にて損傷せしや、否を試んと欲し、其釜を焚錨を巻き北方の海岸江近寄たり、此時ワイオミ<sup>我九寸武歩 計</sup>ング船は適宜の所に進み、弾径十一インチ<sup>我七寸 強</sup>上ニ打込しに、船中の釜破裂し蒸氣及び煙り齊しく船の前後より発散せり、其後亦空弾二発を打込暫く発砲を止め、再砲台を襲んと其命令を下せり、此時バルグ船及びブリグ船より一同早込にて連発せり、砲台江空弾数発落込み、市街も大に破損せり、亜軍艦瀬戸江進み出し、時に至てフリク船江向け一二発を打込、其船を沈たり、砲台よりは絶間なく砲発し、亜軍艦退去するに及て、漸く減少せり、此日死亡四人、手負七人、此内老人は遂ニ死せり、ワ

イオミング船備用の武器は纜三拾ポント四挺、楯軸の付たる炮式挺なれば、左右とも三挺宛ニ而、三門備炮台六ヶ所と発炮を交へ、敵方にはバルグ船ニ六挺、ブリグ船ニ八挺、蒸気船ニ式挺、多分三拾式ポントにして総数三拾四挺也、如斯多寡之差あるか故、其英氣を避んと欲し、船將ドーケル名其場を脱れ横浜港江退きたり、此日亜軍艦の将卒ともに力を竭し、其船を敵船の間ニ乗入レ、敵の炮弹を犯し近く進んで炮戦を挑み、接戦する事一時余にして、船側炮弹飛來る事十一度、櫓綱具硬筒江式三拾発を請け、敵より放ちし三拾式ポントの空弾船側ニある炮台の車に中り、発散して老人を斃し五人江傷けたり、

冊子原寸 縦二四・五纏 横一七纏 七枚

五七五ノ四

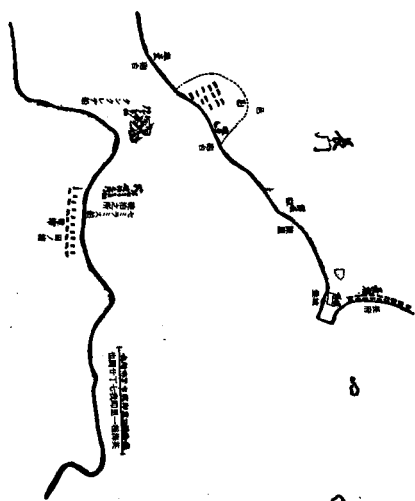
亥六月五日於長州下ノ関仏軍艦交戦之新聞下の誤官よ

り新文紙板元 翻訳  
江送る所也

一支那日本兩國海江備たる所の仏朗西国兵務の統帥たる水師提督セオルス名人之号令ニ従ひ、仏朗西国帝陛下の軍艦セラシス船号及ひタンクレデ上の両艘、長州下ノ関江進發せり、即第七月十六日我六月朔日の朝横浜港を開帆し、同十九日我六月四日之朝早朝豊後の内海江乘入此所の瀬戸江碇を下して交戦の備を為し、翌月曜日我六月五日黎明に蒸氣の力を強めず、徐々と下ノ関の瀬戸を向て乘進み、遙ニ炮台を眺望するに、凡式里我拾四丁と四拾間を隔て、瀬戸傍なる樹林の中間より発炮すと見へ、両線の電光閃めきて炮煙立昇る間もなく毛利大膳太夫の親族同姓左京亮の城堡長府に近寄、夫より長門の北手に当りて式拾五ポントの大炮五挺を備し炮台江向進發せり、水師提督は其城堡には敵對せず、只炮台を打崩んと決心せり、是より味方の船舶豊前国田の浦近傍の炮台を離るゝ事凡一里の三分一の所に碇泊し、潮勢急流の為に船を流せし故、味方の船を隔而碇泊したる日本船の方に錨を下さんか為に、凡四半時を費せ

り、此時ニ當て敵兵味方の船舶を前後より挾撃すへきに、敵の炮卒は其炮台中にあれとも味方に向けて炮発せず、故に此炮台は唯窄海の為にして、此所ニ用ゆる大炮ニは非ずと思ひ居しニ、炮台を乗取し後ニ是を見れば、存外歐羅巴法に鑄造て車付の良炮たる事を知れり、扱我フレカット形船のの船側より放ちし六拾ポントの螺旋ライフ炮の第一炮は炮台の真中を打越し、第二炮は炮台の胸墻の中央に着して地形石塊土塊砂俵を撃崩して、諸方江飛散せり、然れども日本の方ニは猶も発放を返さず、味方は久しく炮戦打続、十一字頃ニ及び五分ミニユート一分は一時也 毎に空弾を放ちて目覚しき働きを為せり、爰におゐてル・アube・ジラルト氏一隊を引率して田の浦の市邑に上陸して、水師提督の告示を伝へ議していへるには、此交戦の次第は遇日長州侯ニおゐて、仏国の旗章を建し船舶江対し理不尽に炮発に及びし故、其罪名を誅罰の為に軍艦差向し故、当方の人民は決而恐懼するに及す、且食料を船中江来り売へき旨を告げ、難なく同

所之邑宰の役所江尋行きしに数百之人民集り来りて、我等を取囲しかとも、何の不法も為さるりしなり、



邑宰は慇懃を以て我等を接待し、提督の告示を謝し、我等目前ニ而即刻使者を以て其旨を豊前の君侯江告知せり、此一隊上陸せし間に、味方の両艘は再び炮戦を開き、提督より命をタンクレデ船に下して、下ノ関に向ふて進発し窄海に及し砌、敵の炮台よりも炮発せしかとも、味方の大炮を以て速に敵の炮台を撃鎮めたり、

敵の一砲味方の空丸ニ中り、倒覆して敵の砲卒兩三人空中に飛散せり、タンクレデ船は船側江一発、鱸橋の頭江一発、船橋江一発、都合三ヶ所江砲彈を請たり、我兵中食終りて、頓て午時に提督は上陸の命を下し予も幸ひに一隊の首領たるテユキリヨット氏と一手になりて、上陸すへき手配り中ニありて、上陸の軍勢は水夫百八拾人及びアフリック第三隊の軍卒七拾人、惣勢貳百五拾人なり、味方は砲台を右手ニ取て陸地に近寄しか、同所は警衛の兵ありと見し故、端船より螺旋砲にて空彈を以樹木を的として放ち、一戦の備を為せしかとも、遮闘する敵老人もなし、故ニ味方は十分の利を得て、軍兵を三隊に分ちて砲台江向ひ、無難樹林江進入しに、離散せし三四組の敵兵小銃又は刀劍を以てす、「其兵器多分は和蘭古法の製作なり」樹林中ニ隠れ居て、味方の近寄るを覗ひ速ニ砲発し、或は筒先に劍を挿み闘ふと見へしか、直ニ奔散せり、此所の一戦にて貳拾人程打取、林中を通り、砲台ニ至り見るに、守

兵は老人も不殘逃散して、胸墻は味方空丸の為に撃崩され、一門の大砲は仰き覆り、余は砲杖を撃落され、諸方に血池を為し死骸は皆取片付たり、砲台後手の凹路に於て、血ニ染し衣服及び甲冑を見出せり、大砲は都て火門を塞けり、提督下知して樹木・疊其外焼易き物品を取集、是を砲車の下ニ嵩み立て焼捨たり、火薬庫は砲台の外なる凹路の内にて、至て要害の所ニ見出し、火薬彈丸等は悉く海中ニ取捨たり、此時水師提督ゼオルスの幕下たる一隊の主將レイル氏は砲台の右手に進み、続ひて樹林中の伏兵に砲発し、終にエダガモメと称する村に到れり、此村は砲台の戍兵のために宿所となされ、其居民は遠く立退し事明白に見へたり、同所の中央にて少し徑を登りて小高き地ニ寺社の如き大家ありて、此内に許多の火薬・武器類を貯し故是に火を着しに、巨声を発して灰燼と成り、味方は其仮再び引退けり、砲台ニ至し時、予は主將の陣屋に入しに、人は遁去て影もなく、數多の甲冑武器を獲たり、

猶家中を探索せしに、築城・炮術等の和蘭翻譯書を數

冊見出して、則ち予か今手許ニ所持する所なり、内老

冊は、潮勢の為に飄流する船舶を襲撃する事を著せり、

如斯味方は全勝を得て炮台及び大炮を毀壞し其村を焼

払ひ、我一隊はタンククレテ船ニ帰れり、其間にタンク

ルテ船并其端船よりは、味方の右手ニ而樹林の中の伏

兵を指して、頻ニ大炮を放ち帰船、後軍に凡式千人の

小銃隊及び野戦の大砲隊を整へ内には騎馬の兵も打交

りて、陸地をつたひ下ノ関を下り、味方を襲はんとせ

しを船中より些の空玉を放し、其中央に中りて爆裂し

許多之死傷を為し、敵兵は直ニ隊伍を乱して逃散せり、

味方軍卒の内三人の手負にて、内式人は銃丸ニ中り、

老人は帰船の時、路傍に倒れし敵の傷兵に突れて傷ら

れ、日本の死亡者難計といへとも、炮台に許多の損傷

あるを以て量る時は、其死亡者不少事顯然たり、加之味

方の空弾届着の巨離は敵ニ勝る事三千ヤルト我八丁と式拾間也

冊子原寸 縦二四・五糎 横一七糎 一一枚

三三 下之関ニテ和蘭船砲擊新聞記事

馬関海峡図面添

本文書ハ五七五ノ二号文書ト同文ニ付省略ス

冊子原寸 縦二四糎 横一七糎 六枚

三三 久光茂久両公ヨリ朝廷ヘノ願書

斉彬公ヘ照国大明神追号ノ件

(包紙ウツ書)  
「奉願」

壬戌十一月十二日大樹家以閣老井上河内守被申達之趣、(正徳)

故源斉彬存生中、為 御国家抽丹誠及病末実弟三郎江遣

訓之儀共達 叡聞 御感不斜、先祖家久雖存命中、権中

納言宣下之家例茂有之ニ付、格別之以 叡慮、贈権中納

言従三位可被宣下旨 朝命之趣有之、斉彬存生中抽丹誠

候ニ付、 叡慮之通被追贈権中納言従三位之旨演達有之

伏惟

朝恩之深山海不可比、斉彬素志至此始赫然、封内之士庶

踊躍奮勵、欽慕先代之偉勲而欲報天下家國、茂久等雖不肖、繼述遺志、憲章遺業之任、豈可空哉、謹奏請 神祇官、欲追号照國大明神、使德輝赫々万世至情之所発、不堪感激、俯請高許、謹白、

文久三年癸亥夏五月

源 茂久

源 久光

使者

松方助左衛門(正義)

藤井 良節

文書原寸 縦四三種 包紙原寸 縦四三種

横五八種

縦四三種 横五八種

五月 下之関ニテ外国船砲撃情報

久光公手写

〔端裏朱書〕  
「癸亥」

五七八ノ一

五月廿四日異國船砲撃渡来、右は亞米利加蒸氣船ニ有之、

右船江被屋乗組居候水先案内讃州安藏口上聞書、左之通、

五月五日神奈川表出帆、瀬戸内通、同十日豊前国田の

浦江碇泊致居候処、翌十一日暁七ツ時頃、同所上ツ手

之方より不意ニ大筒打掛、数発之内本船艦綱を打切り、

蒸氣煙出し筒ニもケ摺候ニ付、乗組一同驚キ、早々乗

逃候様、異人共差図致し候ニ付、芸州瀬戸乗通、同夜

中冲手江乗出し、翌十二日明方地山見渡候処、日向冲

江乗離れ居石炭乏敷相成、何分此俣ニ而ハ長崎へ向参

リ兼候趣、異人共申候て、夫より大洋江乗出し、日不

覚外国海岸江着船致候ニ付、此所何地ニ候哉と異人江

相尋候処、唐国上海と申所之由、初而承知仕候得共、

上陸等不為致、同所江四日程滞船仕、石炭積入同所出

帆、五月廿三日夕長崎港着船いたし候事、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第四五ノ一  
号文書ト同文ナリ〕



五月廿四日仏朗西国軍艦老艘入津、右船江水先案内被雇  
大村領米太郎と申者、下之関之始末申述候聞書、左之通、  
右軍艦五月十七日神奈川港出帆、同廿二日夜長州前ニ  
汐撃仕候処、役人衆小船より御見廻相成、翌廿三日早  
朝出帆之賦ニ候処、長府之方より石火矢打かけ下之関  
地方且異国船造之船よりも追々打かけ候ニ付、小船ヲ  
卸し候処、猶々打かけ小船は損し候故、碇一同其低切  
捨出帆、廿四日長崎港着船之旨申聞ル、

一右軍艦入港ニ付、定例之通役々乗移糺方相濟、其末船  
將腹立体ニ而、士官之者引合、下之関之始末荒増申聞  
候ニ付、役々船中一覽之処、破損所々ニ有之、其外士  
官名ロック人と申者、右ノ手ニ少々ケ摺疵受候由、船將  
も同様ニ候得共、怪我人等は無御座候由申立候、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第四五ノ二  
号文書ト同文ナリ)

横浜江異国軍艦渡来之事情、且攘夷之儀ニ付、爰許江  
相分候成行は追々御届申上候通ニ而、其後御達之趣も  
無御座候得共、先達而亜米利加商船神奈川より下之関  
通船之砌、同所より帆前之軍艦二艘出帆、右之異船ヲ  
挟候而及砲発候処、大砲式拾発計之内、砲発打当少々及  
破損、乍漸通船、此地江入津未滞船仕居候、且又仏朗  
西軍艦小振之飛船神奈川より出帆、神奈川奉行より長  
崎奉行江之書翰も致保護、是又下之関通船之処、同所  
より及砲発五六発打当、既ニ危急ニ相迫り候ニ付、異  
船よりも致砲発候処、地方より之砲発暫打止候付、漸相  
凌通船、一昨廿四日昼時分此地江入津仕候処、右之船將  
至而致憤激、早速上陸此地滞留之各国コンシユル共江  
及談判候は、是迄追々攘夷之儀專及建白候は、長州ニ而  
帝も無拗御許容相成、先達而攘夷之儀被 仰出候処、  
於將軍家も不好訳ニ而

帝も一度被 仰出候儀ニ付御取返シも不相調、未各国

江御達も無之、御猶予相成居候段ハ深致承知居候処、

此度長州より度々及砲発候ニ付而は、愈以長州より之

建議ニ相違無之、可恨は長州而已ニ而、何も日本江可

致敵対心底は更ニ無之候付、此上は兎角右之怨ヲ不報

候而不相濟儀ニ付、上海滞留之ミニニストル江も及談判、

英・仏軍艦尽ク致連渡、奉行江届ニも不及、長州対一

国可及戰爭段申入候処、爰許滞留之コンシユル共ニも

存寄無之旨之由、且此地滞留之蘭軍艦大砲數十門載付

候蒸氣船壹艘、神奈川江差越筈御座候処、右之次第ニ

付、下之関通船之砌は地方より及砲発候儀は必定ニ付、

其節は則及戰爭、下之関焼払候賦ニ而用意致敵重、去

ル廿四日昼時分爰許出帆仕候、

一生麦一条付償銀之儀、於政府ニ薩州江致恐怖、兎角煩

勞相起候儀付、右一件之償銀四拾四万枚、江戸政府よ

り相払事済候段、爰許滞留之英人コロウル書翰中ニ書

載申来候由、

右五月廿六日長崎出し書状

同廿九日達

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第四五ノ三

号文書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦一八・三極 横一五二極

近衛忠熙卿ヨリ島津三郎殿へ

貞姫入興ノ件

〔包紙ウツ書〕 島津三郎殿 忠熙

〔朱〕 誠三ツ同シ 几下

〔封紙ウツ書〕 島津三郎殿 忠熙

〔朱〕 誠三ツ同シ 几下

〔封紙ウツ書〕 島津三郎殿 忠熙

〔朱〕 誠三ツ同シ 几下

〔藤井〕 良節江御伝言御書中之趣逐一承候、追々暑氣ニ相成候処

弥御揃御安全之御事珍重存候、当方も先々無異ニ候条、御

安意可給候、委細ニ御書取之御趣意共、実々御尤ニ承候

尤御同意之事ニ候、中川宮江茂伝覽致候事ニ候、当節之

次第実以驚歎之事ニ候、委細従良節御聞取之様存候、当地事条も御聞取之様変り候故、諸事困入候事ニ候、御推察可給候、扱貞姫方御上京之儀甚心急申入候所、春中より御所勞未御快方無之、向暑之節迎も長途之御旅行難被成、無坳当秋迄御延引之事何も御尤ニ承候、松方助左衛門江も御伝言委細ニ承候、梅天後ハ段々大暑ニ相成候、此頃も甚々暑氣強候、旁御所勞ニ而ハ甚以御案申入候、二三ヶ月ハ早ク立候事故、涼氣ニも相成候ハ、何卒少しも早ク御着之様御待ニ申入候、(近衛)忠熙ニハ甚々心せき候御察可給候、しかし御所勞推而御道中も御案し〜申入候事ニ候、何も荒々申残し候、良節・助左衛門よりも聞取可給候也、

暑氣專御自愛と存候、(茂久)修理大夫殿ニも宜々御伝聞可給候也、

此匱菓甚以輕微ニ候得共、両君江進上候也、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第五九号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六種 包紙原寸 縦三一・五種

横二〇種

横四二・五種

其〇 小松帯刀ヨリ在藩ノ桂右衛門へ

病氣見舞

再白承申候得は、御家内へ御病人有之、長々御曳入之よし、しかし御快方ニ而御出殿之由、無御心配之程奉察、折角無御勞御看病被成度奉祈候、下拙ニ茂先便より申上候通暫ク此機ヲ見合せ、罷下候様可致候間、左様御承知可被下候、当分爰元ハ四条之夕涼と欵何と欵申て、余程河原辺ハ賑々敷由、併一向出掛候義も不相調嚙共ニ承位、誠ニ迂遠之事ニ御座候、此暑ニはのし不申候、何も追而申上候、又々可悦、

文書原寸 縦一六種 横四一種

其一 松平春嶽公ヨリ島津久光公へ

和歌二首

此頃の土さへさけてあつき日に

まさるくるしき我心かな  
浮雲の立さはきつゝいとはやく

あつさをあらふ夕立もかな

例之蜂腰奉汚 高聴、伏希クハ僕ノ意衷御照察可被下候、  
已上、

慶永

文書原寸 縦一九種 横四二・三種

其三 尹宮御門へノ帳紙ノ一部

(編裏書)  
「六月二日朝 尹宮御門江張紙」

乍恐愚存之程奉申上候、

近頃尊公様之評判、市童・走卒迄も悪敷申触シ、是全尊  
公而已ニあらず、幕府奸吏等天下暴論と偽り、三条、四  
条辺諸人通行繁々の場所江張紙いたし、人心疑惑せしめ、  
人望を失なへせしめん為の計策疑なし、畢竟

(後欠)

文書原寸 縦一五・四種 横二〇種

其三 久留米藩堀江但馬ヨリ家老有馬飛驒等へ

ノ口上書

(表紙)  
「御家老中江之口達書取

堀江但馬」

今般之紛擾実ニ不容易義ニ而、天下ニ普、長石一藩より  
周旋有之、御恥辱之上ニ御国家之大事危急存亡之際ニ御  
座候、尤一ト輪鎮静ニは候へ共、御廟議一定不仕候而は、  
当今切迫之時勢、何時事変可有之哉も難量、

上ニも深々被遊 御配慮、先月十九日飛驒様江

御書下ケ御座候義と奉恐察候、両端之御決心 御苦心之  
発一々御尤之御義ニ而 御憂苦之御旨ハ乍恐流涙憤漫之  
至、深々恐入奉存候義ニ御座候、然処両端之御定論于今  
申上不相成、尊

王攘夷

配慮 御遵奉御実意も御定論無御座候而は、人に心掌無  
之か如く、御定論御座候ても因循ニ流候てハ心掌ありて

四足不随之如く、御国家之危事累卵之如く、万機之御所置貫不申、屢失機会も道理ニ御座候、元來御当邦ハ四通五達之御国柄、乱之萌已ニ相頭候砌、ケ様因循候而は、又々他邦より如何体之難間申來候哉も難計、其節は何を以応し可申哉、方今之時勢ハ篤と御熟知ニ相成、御同職中皆様御口ニは被唱候へ共、其事ニ相頭候義ハ未御見受不申、ケ様大切之折ニ社、御老職之御身分、御勉勵御座候事と奉存候、此際ニ当而悠々不断何日ニ御忠節被相尽候義ニ候哉、一円難心得事共ニ御座候、御唱ニ相成候通り、斃ル、迄ハト申ス御実意御座候ハ、大事ニハ今少し御心懸も可有之、末大事御賢考之次第、御同職方より被仰聞御書取杯被相渡、御評義御座候義ハ曾而無之、都而一席より産出し候付而之御難問ハ色々御座候へ共、外ニ御説も承り不申、今般之事柄ハ都而大切之義、輔翼之御老臣方一席杯江御打懸り相成候而宜敷筋ニ可有御座哉、尤飛驒様ハ今井与三郎亡命ニ付御書取有之、主膳様は御家中之面々御同職御宅江押懸候節、御応答之御書取有之、

此両度之外ハ私義ハ無之様ニ被存、却而大事之事柄ニは曖昧御慢然之様ニ而、実ニ難心得奉存候、

御書下ケ之義は陰陽消長存亡相分ツ之御事柄、御同職方御精考有之、猶々入御念一席江も存寄御尋有之、平常之小事は被閣候而も、此一事ハ御精力之有限り、日夜之界なく急速御精考可有之処、今迄慢然事之大小も無御分別ニ相当申候、監物様御慎解之一条も先々月廿二日より御相談ニ相成候処、漸く廿九日ニ至り御差許之御評決ニ相成、先月朔日御手数數相濟候、尤御大切之事柄ニハ可有御座候得共、あれ式之義、両三日中ニは御決断出来無之而ハ、何事も及遲滞可申、且監物様江僅ニ軍奉行被仰候義、御懸念と申処より夫是夜を込而之御評義、両日半夜ニ而漸御取極ニ相成候、都而事々物々此兩条を以因循たる事顯然ニ御座候、誠ニ切齒痛歎之至ニ奉存候、只今之假ニ而は、御国家ハ往々御自滅ニおよび可申、夫レも全く皆様方之御仕出ニ相当可申候、右兩条杯ハ縦令御手落御座候而も、存亡ニ相係候程ニ無御座、邂逅監物様よ

り此之後亡命防之御説被仰聞、評義申上候様との事ニ御座候へハ、愚昧之私輩未勘考も付兼候、是以其節之御見込ハ一応御尤ニも候へ共、只御評義之端を被開候迄ニ而、凡釣合且京都江之聞へも有之、却而大事を引出候義ニ至可申、御国典之規則ニ関係致候義、是又一席杯江御打懸ノみニ而御安心と申訳も有之間敷候得は、定而十分之御見据も付居候事と被存候、長州御使者罷越候節、途中ニ而防留之義も長々と御評義相成候へ共、可然御見込も無之、詰ル所松崎駅まで主膳様御出ニ御決ニ相成候処、是又全く無用之空論ニ相成候、只今之候因循之弊風御改無御座候而は、何十人人才御用御座候共、都而御同職方之御懸念空論ニ夫是と奔走ニ被<sup>練</sup>練、日数を積候内機会を失ひ候迄ニ御座候、何事も急速ニ御決断無之てハ、御国家之振ひ候事ハ決而有御座間しく奉存候、尤飛騨様ハ御病体ニ而兩御用番も御勤被成候へハ、一応ハ御手廻兼候義御尤ニ候得共、事之大小輕重寬急ハ有之ものニ候へは、御出仕ハ無之共、睨と御名論も御賢考可被成義と奉存候、

元老之御身柄、御書下ケニ而御相談も被 仰蒙候義ニ付、愈御輔佐之任重く、何日も昼夜被癡御思慮、兩端之御裁撰有之、不而之確論も被猷可申之処、只今之通りニ而ハ睨と御見据無之様ニ被存候、彼是と申内 御出馬御延引と欵何と欵、又々

御違 勅之申立有之、罪を被問可申、今日此責ニ逢候而ハ 叡慮 御遵奉之道も不相互、兼而之

御忠誠も水之泡と相成、其節社御国家傾覆之時と痛歎罷在候、右之通り大事之際ニ当り、平体之小事ニ被練、断然御勇決之場無之而ハ自滅ハ見か如く御座候、主膳様ハ表方御用番之上ニ武備方被相兼、是又難被聞御用筋多端可有御座候へ共、是以事之大小輕重寬急之御切分慢然と一混ニ被見候より、御繁雜被練候而、大眼目之御書下ケニハ御賢慮も付兼候、万一不被行届場も御座候ハ、此節柄内蔵助殿・織部殿杯より御加勢ニ相成候ても可然欵御若年と申何ッ迄も其候ニ而ハ、大成御損ニ御座候、御

役人及不足候へ、御同職方ハ御相互ニ合御力候へ、先例古格之鈞面被繰出可申、何事も御仕来ニ被泥候事と被存候、先例古格も御国家之丈夫ニ用候事ニ候得は、能々御勤考被切放候而、大事御熟考之間合被取、只管御国家之御ためを被計候様有御座度、其義も被出来兼候へ、因循之弊風一洗之期ハ無之候、監物様ハ当時御用番も御勤無之、何事を御勤考御取計ニ相成候哉、小事一二説ハ承り候へ共、此時際ニ御憤発無之、何時ニ御勉勵被成候御積リニ御座候哉、御国家之大厄を脇江被見候様ニ相当、一円心得不申、去ル子年御一身上ニ相係候節は、長々と書取も被出来候由、此節ハ一ト口二タ口位之御口達之御説ニ而、其節と此節は孰か重く孰か軽く可有御座哉、子年之義ハ存不申候へ共、此節も全く御手前様之事より差起り候義ニ付、御宥人卓越之御働も無之てハ不相濟、周公讒訴之災、孔子陳蔡之厄、本邦ニは守屋大連仏を防候而悪賊之名を蒙り、菅公左遷、聖人君子ニ而も不時之風雲ニ羅織之災ニ懸候義不珍、不違枚挙候得共、後世ニ至

り、其実龜鑑ニ著候、黄泉之君父祖先江も人臣之道を尽候而こそ御申分相立可申候、就而ハ是迄も嘸本ノマ早疑之御名論も可有之処、御慎解已来書取一ツ拝見不仕、誠ニ案外之事ニ御座候、然ル処、昨日御上京之義承り、御尤之義ニ御座候、若御存命ニ而御帰郷も御座候へ、夫ニ而相濟候事と不被成御存、猶又御精忠有御座度、其上ハ御身分如何様ニ而も御勝手次第可然欤、只今之候ニ而被安之時機と御存被成候てハ、御目計之相違と奉存候、就而皆様江申上候、今般之事件も全因循姑息恐怖、御懸上より産出申候間、此上御同職方も因循ニ被流候而一席杯へ御打懸と申様ニ而ハ、自滅を待候外無之、閤柙為一體御相互ニ毫髪も不挟私意

君之御美意を御助申上候而社、御国家も振ひ可申、依而基本速ニ被相立候上ハ、何事も急速ニ御勇決有之度、自然其切分御目計も付兼候ハ、有馬藏人殿今般江府之取計ニ而、其人物承知仕候間、御同人急々御呼下ニ相成、御一人ニ被任、皆様方ハ御政事之御任を被解、軍馬之繰練(機)

ニ被懸候而も可然、只今之様子ニ而ハ一同ニ御評義御座候てハ、藏人殿ニ而も同然ニ可有之、しかし此義ハ上之思召次第ニ而、私体何とも申上候訳ハ素より無御座、只見込之俣申上候、只今之様子ニ而ハ御輔佐所ニ無之、上より御引立ニ相成候ても、御引立無之、上江御打懸りと申振りニ相見候、誠ニ怨歎残念之至ニ御座候、全体御政事向之振ひ候義ハ、小事ハ数々御座候へ共、第一ハ御同職方之御所置振りニ因り、第二ハ添役方之權を削不申候てハ振起申間敷、若此義不被行候ハ、自滅を待候外無御座、夫レニ而御心能御座候哉、しかし愚見ニ候へは、外ニ御賢慮も御座候ハ、被仰聞度、随驥尾水火之内をも避ケ申間敷、其義出来兼候ハ、何之面目御座候て、政府ニ連り可罷在哉、第一御国家之自滅を乍居相待可申哉、実ニ不忍事ニ御座候、恐ながら御輔佐次第ニは如何様之御美政も被為出来候様奉候、若不筋も御座候ハ、臣下之身分不及ながら御取直申上候心得ニ御座候、皆様方之悠々不断ハ実ニ歎息痛心之至ニ御座候、此俣廃亡ニも

至り候ハ、黄泉之

御先君且御先祖江被対、何を以被仰分御座候哉、人臣之身分其丈ケ一命を以数世之御高恩奉報候義ハ不申とも御熟知之事ニ御座候所、事を被計候と口に被唱候と致齟齬候様被思候、其事実ハ前々申上候通ニ御座候、定而<sup>(願)</sup>狂妄之言と御怒も可有之候へ共、愚直之私、御国家之存亡ニ關係いたし候義と見込ながら不申上ハ、不忠之至と慷慨怨歎之余り申上候義ニ御座候、御国家を思ふ之念慮ハ人臣一般位階高下之差別ハ無之事と相心得、不敬之段ハ不顧万死愚存之趣、御同職中江申上候、此義御用ひ御座候ハ、如何様之罪責は聊不苦、只從容死ニ着ノみ、不堪流涙、筆意も相分兼可申、御推覽奉願候、已上、

六月二日

堀江但馬

有馬飛驒様

有馬主膳様

有馬監物様

冊子原寸 縦二六・三種 横二〇・四種 一〇枚



五四 京都ニ於ケル浪士等逮捕ノ件

会より相分候、

六月五日夜召捕一件略書

新撰組手ニ而

一 切捨 五人

一 召捕 九人

外ニ老人手疵為負逃去、角倉様辺ニ而倒死候由、

桑名様手ニ而

一 長州門番老人

三条河原辺ニ而召捕

一 宿屋父子式人

柳馬場辺ニ而召捕

一 同屋亭主老人

大仏辺ニ而召捕

当 hands 手ニ而

一 切捨 式人

一 召捕 式人

祇園町下川端ニ而

右之通ニ御座候、以上、

文書原寸 縦一八・二種 横五〇・九種

五五 正親町三条実愛ヨリ内府へ

浪士騒擾ノ件

(封紙ウツ書)

一 内々言上

実愛

御近侍衆

緘

(墨引)

追々向暑候処、益

御機嫌能被為渡、恐惶奉拜賀候、然は參上任意ニ申上

度候処、少々持病難波ニ付、乍恐以書中奉言上候、

一 近頃世上形勢よほと切迫、何レニも暴挙可有之、凡此

十ケ日を不可過と承候、甚以案痛申上候へ共、無致方

候、定而御配意と奉存候、

前殿下公昨夜とやら御本殿江御移と風聞承候、先夫ハ

御宜と奉存候、

一昨夜より今朝市中騒々敷、二条・三条街何者欵斬殺有之、会・彦等人数固メ居其外甚騒々敷承候、

一尹宮へ推参或ハ会へ襲ひ候共又 皇族ノ内ヲ盗ミ取、

義兵ヲ可拳策とも承候、百人計ハ必定上京と承候、

一昨日龜井(發監)隱岐守家来多胡菟波と申者来、先日建白ヲ殿

下へ上置候後、經三句候へ共御無音ニ付、右御容子伺

度、且其建白写を差出、当役より奏達を頼度旨申出候

参 内中故、預り置候、どふか相促各家差出候由ニ承

候、申合可奏哉ニ存候、

何分ニも前文之通り甚以危急切迫ニ相成候、屹と御考慮

被為有度奉存候、大島論も御聞と奉存候、内々伺度候、

扱又来八日、官位

勅問被 仰出候、少将競望、園池歎願、本人より奉願候

へ共、宜御執成可奉希上候、右等申上旁、今日ハ参上仕

候処、前文申上候通り所旁、乍恐以書状奉言上候、此旨

可然御披露被下度候也、

六月六日

文書原寸 縦一六・三釐 横二三〇釐

○其六 小松帶刀書翰

祇園祭ノ事

宛名無シ

其七 宇和島藩久留島求馬ヨリ京都小松帶刀へ

京都ニ於ケル薩藩ノ指揮依頼ノ件

一輪啓上仕候、向暑之節御座候処、貴殿様愈御堅勝被成

御勤、珍重御儀奉存候、然は当時勢ニ付、今春以来其

御許様江伊予守様(伊達宗城)より御依頼之儀被仰進候処、御承知被

成下、難有奉存候、随而此節敵藩士島田方斬と申者、京

地向周旋申付差出候間、自然罷出相伺候儀茂可有御座

候ニ付、万端無御腹臆宜御指揮被成下候様仕度、此段御

頼度可得貴意如斯御座候、恐惶謹言、

久留島求馬

六月九日

通尚



小松帯刀様

文書原寸・縦一八・一種 横八三・六種

其六 近衛忠熙忠房両卿ヨリ島津三郎殿へ

久光公ノ上京ヲ促ス

〔包紙ウツ書③〕

極内密々  
島津三郎殿

几下投火

忠熙  
忠房

〔朱〕緘三ツ同ジ〕

□

□

六月十二日認

〔朱〕緘〕

〔朱〕緘〕

〔包紙ウツ書②〕

内密々投火  
島津三郎殿

几下

忠熙  
忠房

〔朱〕緘三ツ同ジ〕

〔緘ト朱〕緘ハ重書〕

〔朱〕緘三ツ同ジ〕

〔包紙ウツ書①〕

島津三郎殿  
極内啓火中

忠熙  
忠房

〔朱〕緘三ツ同ジ〕

□

□

〔朱〕緘〕

〔封紙ウツ書〕

極内密投火  
島津三郎殿

几下

忠熙  
忠房

〔朱〕緘三ツ同ジ〕

□

□

□

大暑之節ニ候得共弥御平安候哉、尚承度候、抑今度姉小路一件ニ付而ハ、実々不容易次第、於当家ハ格別之御間柄、別而く痛心之仕合、何分ニモ

朝命殿敷事ニテ、実々心配不過之候、全体不分明之儀、如此被蒙 殿命候段、何共甚々心外至極歎息仕候、朝廷之御制度軽易之御所置而已ニ而、悲歎無涯存候事ニ候、何分ニモ無実汚名ヲ受候義、其者ハ先差置薩国一体ニ相拘り、何共心外千万悲歎不過之候、何分ニモ此場ニ而ハ、早々其許上京ニ而此恥辱ヲ被洒候ハねハ、為皇国尽力之差障リニモ相成、深々歎痛之仕合、実々形勢モ日々ニ切迫、大樹公ニモ御発途ニ相成候事、此末之見留メモ日々ニ相失ヒ、唯々痛心而已之事ニ候、何分ニモ

攘夷ハ差置、国内ヲ専ニ相整候儀勸要と存候、

朝廷ニモ唯今之通グサ、ト致候事ニ而ハ、重大急務之

御時節、如何ニモ内乱ヲ相招候事ニテ、実々痛心之次第

ニ候、何分当節、上ニ威無下ニ威盛ナル事、実々歎入候

事、何分ニモ早々御上京ニテ御奮発在度存候、今度極密

々弥右衛門ヲ以御伝申入候御内 勅之

宸翰、実以難有御趣意ニテ感佩仕候事ニ候、御同慶被成

候事と存候、乍去右御内

勅之儀ハ、假令浪華・京師へ御入駕之上迎モ決而速ニ御

口外無之様、実々御内

勅之儀ハ容易ニハ御口外無之様、偏ニ折存候、於

朝廷暴烈之人々之耳へ早く聞え候テハ、尚又色々ト計略

ヲ相巡し候事必然ト被察候間、決而御心得置折存候事、

六月

二白

志々目賢吉下国仕候間、委曲申聞置候、巨細御聞

取可給候、大乱書、御覧分可給候、以上、

〔本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第六二号文  
書ト同文ナリ〕

文書原寸 縦 一八・一種 包紙原寸 縦三一・二種

横 一六七・六種 横 四二種 三枚

其九 南部弥八郎ノ報告書

二通

下之関ニテ外国船砲撃一件等

五八九ノ一

長州におゐて外夷と戦争有之、其外風聞之趣横浜に

て承得候次第、左ニ申上候、

五月十日頃、亜・仏両国之商船横浜より上海江罷越候た

め、長州下之関海岸通帆之処、台場并船より不意ニ大炮

打掛、素より商船之事ニ而武器も沢山ニ無之、散々の体

ニ而漸相凌、仏船は長崎江入津、亜船は上海江相越候由、

横浜江注進有之、且亦右同時之頃、和蘭のコンシユル交

代之者乗組、軍船にて和蘭之旗号著敷相建通航仕候処、

去年長州ニ而買入之蒸気船并外ニ帆船壹艘と台場ニ而、

頻ニ炮発いたし候間、高き海岸江船を寄相凌、凡三百発

程打放し聊緩に相成候時分ニ和蘭船より炮発いたし、台場打くつし帆船老艘打沈め申候、右蘭船江は長州之彈丸八発打貫き、少々死傷人も有之、船腹之傷ミ候所江板杯当、先日入津仕、本国江申越軍船を呼寄候積と相聞得、  
亜・仏兩國は商船より注進ニ依り、横浜ニ碇泊之軍船、兩國にて老艘ツ、合而式艘小形之船ニ而亞國船名ワイオミン、兩國之船名は相知れ不申候、  
去月廿七八日頃ニも候哉、下之関江差越長府持之台場江遠方より大炮打試ミ候得共、何之形勢も無御座候ニ付、漸々近寄候処、台場より大炮三発いたし、二発亞船に当り、即死五人手負六人有之、帆柱打折れ、長州之方は帆船一艘打沈め、船中の人數水中に飛入候ニ付、最早凌兼候故と相察し、台場之様子見及候処、人ある体ニも無之候ニ付、陸兵貳百人程亞・仏兩國之上陸せしめ見候処、台兵卒場之兵士既に逃去候体ニ而、前に被打候死人、身体不連続之者も有之、鮮血流れ居候、五ヶ所台場之炮の火門江釘を打、彈丸・火薬は海中江投し、奥之方江進ミ候所、堂のとき所に兵卒の屯所と見得候場所所有之候ニ付、襲

掛申候処、是以大半逃去、両三人狼狽いたし居候を打取所々ニ而陣羽織・兜・鎗・刀・鉄炮等分取、六月九日之朝横浜江帰帆致し候由ニ御座候、尤彼地出帆之時分、下之関之陸上ニ騎歩老万人程も長州勢相備候様子ニは候得共、打懸りも不致、兩國勢は小人数之上海道筋ゆえ、若も他國の人に過ち御座候而は不宜候ニ付、不取敢引取候旨申候趣ニ御座候、

但亞船中に漂流人彦藏英人 所屬水先ニ被雇相越候而、帰帆之上相咄し候は、已ニ戦ニ臨ミ候時は、士卒皆々震ひ恐れ申候ニ付、酒を為飲候由、只船将一人のミ自若として号令を伝え候由ニ御座候、

一英國之官吏共、是非薩州江相越可申目論見有之候、折から長州之戦争始り候付、去ル五日頃、ゴンボート船老艘大炮二挺備 輕蒸氣船長州江物見として差遣し、必然長州より戦を促し可申候間、程能あしらい軽く引揚而歸り来候様申付、其節横浜の軍船五艘長州江差遣し、便利之地方を奪ひ、亜・仏・蘭と合従いたし可申、もしまた何

之居動も無之候ハ、直ニ香港江相越可申約束にて出帆せしめ、右往復之日限りしめ見込之時迄帰帆無之候ハ、長州をやめ直ニ薩州江罷越候積手当ニ有之、尤

更に戦争の為ニ無之、夫故「ミニストル」はしめ、通弁官「アレキサンドル」蘭人シールポルトの子ニ而漂流人彦日本語仕候者

蔵等を召連候手筈ニ而 御国許江罷出候ハ、最好之

御談判長久之計も可有之見込と被察申候間、何卒御程能御取扱被為 在度奉祈候段、木村宗三頻に相称し申

候、右下の関物見船帰り来候有無、英船発向之治定相しれ次第、早速申越候様、約束仕置申候、凡之見賦り

当月廿日頃ニも相成可申哉之旨、同人并外通辞共より内々承申候、

一当時外国軍船之儀、先日申上候員数之内、ゴンボート杓艘長州江差越候外増減無御座、商船は数多罷在、惣

合三拾五六艘碇泊仕居申候、

一横港一体之様子、此内申上候通り、相替り不申、当時網糸の商売盛に有之、次ニ茶を仕入候様子ニ御座候、

一鎮港一件ニ付、和蘭・葡萄牙兩國官吏之返翰、木村宗三写取申候間差上申候、亜・字兩國之分も跡より遣し呉候様頼置申候、

一右様長州江攻寄候共、隣国之地江は聊乱妨仕不申候間、安心御座候様、政府より御通達被成下度、亜・仏・蘭より願出候由ニ御座候、

一今朝神奈川ニ而、長州家老穴戸丹後と申者、江戸江相越候を見懸申候、台輪ニは候得共、供は大勢ニ而急キ通行之体ニ御座候、荷宰領ニ承候処、最初商船等を打放し申候事を

京師江御届申上候後、東下仕候様子ニ被察申候、右は去ル十日夕より今朝迄横浜逗留仕、見聞仕候形

行ニ御座候、別紙翻訳書写式通相添、此段申上候、以上、

亥六月十二日

南部弥八郎

冊子原寸 縦二八糎 横二〇・三糎 四枚

## 横浜よりの書簡之大略

昨廿五日夜刻外国奉行急報有之候次第、左ニ申上候、一過る十日、長州海ニ而同国軍艦二艘ニ而、米国之商船を打払候処、黄昏ニ而右船沈没仕候哉相分兼候旨、長州より御届有之候段、当港江も申来候ニ付、直ニ米国ミニストル江其旨相達候得は、彼申聞候ニは、我商船一艘今日を去ル十五日前、横浜出帆仕候、又此度大砲四十五門を備へたる軍艦相廻候積御座候得共、右船は堅牢之船ニ而、容易右様なる事ニ逢申間敷被存候、併両様共吟味之上、可申上と申出、右談判付外国奉行其外之役々夜ニ入退出仕候、

一今廿六日午後、米国教師ブランの館ニ而談話之大略、左ニ記ス、

一長州洋ニ而発砲ニ逢たる火船は、上海より去ル我三月廿六日横浜江入津す、船名「ヘンブローク」船将「クーパーレ」積荷二百噸の由ニ御座候、昨夜上海より仏

国軍艦渡来之便に依而、我「ミニストル」江彼の「ヘンブローク」より書簡を遣し候、其趣は西洋去ル五月廿六日夜<sup>我五月十日夜</sup>彼の「ヘンブローク」船長州洋を走り候処、長州之旗章を建たる二艘之船より俄に発砲し、彼船之綱梯子を打切たり、然共彼船よりは大砲一発も不仕、蒸氣を強めて走り候故、沈没之愁無之、上海に着岸仕候由、もし右一条ニ付、我ミニストル館にて諸官吏集議し、明日明後日ニは屹度軍艦を長州江向け候と申事ニ御座候、

右五月廿六日の書簡なり

一今昼九時、米国教師ハラワと申者江稽古ニ罷越帰宅、

三丁程参候所、後より声を懸追来候付、直ニ立戻候得は、同人申ニは、今朝米船一艘渡来、依て新聞を得たり、其新聞之趣は、去ル十日夜長州ニ而米船一艘発砲ニ逢ひし後、先日出帆之仏船も又々発砲ニ逢ひ<sup>下関之台場并</sup>長州之軍艦二艘より発砲せし由也、船中少々破損も有之、仏船よりも頻に

発砲し、軍艦一艘を沈没せしむ、併一艘之軍艦ニ而は

迎も戦争を始候事相成不申と之訳を以、一と先長崎港

江相廻り、此旨横浜江注進之上、戦争を始候心得之処、

折悪幸便無之、依而上海江急便を以報告せしといふ、

右ニ付仏船より長崎江相廻候由申出、今朝一艘出帆仕

候、又今晚欽明朝之内、一艘出帆いたし候積之由、尤

横浜之水主一人、水先き案内に相頼候事ニ心得候、左

候得は長州海を相廻り、得と事情を採候上、戦争を始

候事と相見得申候、

一米国の火船も長崎江相廻候由申出、過ル廿八日二艘出

帆仕候、右も長州海を乗り其事情を採候と申事ニ御座

候、

一薩州江も英之軍艦近々之内出帆仕候由、夷人之咄有之

候、

右一条ニ付、過ル廿六日より運上所極混雜と相見得

諸役人共夜四ツ時或は九時退出仕候、

右五月晦日之書翰なり

右大略騰写、御参考被成下度候、以上、

六月三日

追白、仏船之義、右書簡ニ而は少々破損有之のミ相

見得候得共、追々探索仕候処、去月廿日頃と相見へ

長州より之発砲ニ而、蒸気器械江相当り、右器械之

木飛散、ウエーウエーと申士官之頭に当り、少々疵

を受候由、尤其節即死老人、怪我人四五人も有之由

相聞得申候、以上、

五月廿六日長崎出帆之蘭船長州海ニ而発砲に逢候次

第略記

一長崎出帆之節、蘭のコンシユル、ゼネラル水先案内

之者に申候ニは、此頃長州ニ而頻に発砲仕候由相聞候

処、此方元より戦を好ミ不申候得は、長州之発砲何分

懸念ニ存候間、順風汐合を見定め、長州沖碇泊不仕様

致度とて、去月廿五日順風汐合を碇と見定之上、翌廿

六日朝六時頃碇を揚、長州沖合を蒸気を強くし走り通



候処、長州海岸江繫置候二艘之軍艦より二発大砲相放候付、蘭船ニ而大に驚き太鼓等打鳴し、俄に軍事之支度をなし、忽ち発砲致し候処、長州よりは二艘之軍艦并数ヶ所之台場より星の落る如く大砲相発、蘭船よりも同様相発し、既に戦争も同様之由、右船昨二日漸其難を脱し横浜入港、對話之大略如左、

一陸より十五六町隔り候、

一長州より相発候玉数三百許、玉目は三ポンド・六ポンド・三十ポンド位、

一甲板之上江三十ポンドの玉当、乗組一人即死、

一甲板下ニ三十ポンド玉当、乗組三人即死、

一船底四発当ル、

一中柱江一発当破裂仕候、

一船上ニ釣置候バツテラを打抜申候、

一長州より漕向候ブレッツキ船を打碎き沈没す、

一船中江当る玉数凡十七程、

一長州は台場三ヶ所并軍艦二艘より相発候、

但小倉公よりは一砲も相発不申由也、

一蘭船より相発候玉数凡九十程之由、

一船中怪我人凡四人、治療相叶可申由、

一長州より相発候玉三十ポンド老ツ、六ポンド老ツ、都合式、船中江残居候、

一小倉侯領分海岸江碇泊罷在候日本船江長州より相発候玉飛散して当り申候、

一水先案内は横港之者ニ候処、右騒動ニ付狼狽ニ可憐様子ニ而、更ニ役ニ立不申由、

右之通大略相調申候、然処此度之一条も実ニ不容易義ニ而、蘭のコンシユルゼネラル大に憤怒仕、数十年來和親之國ニ而、他の國とも相違可申、然ルに右様之次第、自然政府之威權相衰候とは乍申、是等之義相制候事出来不申と申、其罪何れに相帰し可申哉、十分政府之罪ニ相違無之、此上は容易之談判ニ而は相濟不申、是非共御老中方江出会仕候上、談判ニ及可申由、コンシユル申出候付、昨二日横浜より御役人之内早馬ニ而

申来、今三日御城ニおゐて御老中等列座之上、夫々評定可有之筈之処、俄に西丸失火ニ而、被相扣候由相聞へ申候、風評ニは、長州ニ而頻ニ外国船江発砲候得共

於幕府之を制止仕候事も相成兼、只御老中等いつれも手を束ね、歎息のミ致居候様子、此上は不遠戦争ニ相成候外有之間敷、尤去月廿九日、同晦日、亜船・仏船長崎表江相廻候由ニ而、出帆仕候得は、定而只今頃は長州領海江乗入候事と被存候、如何之変出来仕候哉難計、万一戦争相成候ハ、長州は忽ち落城ニ罷成可申所謂陳勝呉広之所為にて、みづから禍を招候段ニ至り可申、長大息此事御座候、尚亦御参考被成下度候、以上、

六月三日

右は秋月侯之弟ニ而、学問所奉行被相動候秋月右京(種樹)亮殿より内々探索ニ遣し候者承得、申立候趣ニ御座候、

一亜国軍船長州ニ而之再戦、去月廿七八日頃と申上置候得共、全く承り違ニ而、五月廿八日横浜出帆六月二日

戦争之事之由、長州之軍船は蒸気船式艘・帆船壹艘之内、二艘之蒸気船を打碎き沈没いたし候趣ニも相聞得申候、

一五月九日鎖港一件、表向は先日申上候通相達候上、内実は右之通、

朝廷及大君より被命候得共、方今不被行儀ニ付、いづれ尚亦可及会議旨相諭候ニ付、外夷ニ而、書翰ニ而は敵敷申立候事ながら、深く憤懣いたし候様子ニも無之、夫故表向書通而已ニ而、小笠原侯之直心接は無之、只頻に長・土兩州をうらミ罷在候折柄、下之関一条発起仕候付、幸ニ事を起し、長州を攻撃いたし候術策を設け候哉ニ相聞得申候、

一參政酒井侯、去ル五日蒸気船ニ而上京ニ相成申候、

一五月廿八日、英国より蒸気船借用出帆、同晦日記州由良浦江着船、乗組は騎兵奉行神保伯耆守(長興)・步兵奉行溝口伊勢守(勝巳)・歩兵頭五人・大砲組下曾根次郎助、部下合而六百余人、由良浜より幕府軍艦蟠龍丸・威臨丸・順

道丸を以兵庫江相送り、右借用之英船は六月二日横港

江婦帆仕候、

一毛利左京亮様江長州侯より江戸屋敷焼払、家中引取可

申旨被申渡、大ニ困り被申候由風聞御座候、

右之通承得申候間、此段申上候、以上、

亥六月十五日

南部弥八郎

五九〇ノ一

六月十三日薩人野村某謁見

薩越天涯路四千 交情親厚最欣然

火船来往如隣比 今日章程不永愆

閑鷗逸人稿

文書原寸 縦一六・一横 横二七・九横

(付箋) 「御坊主よりの為知書通

一御留守居首尾書書通

一南部聞合書付書通

一右同とち本三冊

已上

冊子原寸

縦 二八横

付箋原寸

縦一四・三横

横二〇・三横 七枚

横一三・二横

五〇 松平春嶽公詠詩

薩人野村某謁見

外一詩二歌

五九〇ノ二

(端裏書) 「越老詩」

汝今日発神京就国、我情横胸臆双涙露襟、父子親愛

発自然、欲言不能言、欲筆不能筆、為述哀痛吟示汝、

汝聞余一言、帰国憐臣民、整軍旅卒干城、可保護

皇国、我生死実難測、泣書之供送餞、

天步難艱蜻州危 大厦一木知難支 群小蝟集惑 竜聽

億方生靈死堪悲 皇上聖明如白日 降嫁皇妹結親信 大

樹尊王夙夜勤 既起廢典將解印 微軀何幸賜 天恩 任

職爾来欲条源 源々本々日激濁 人事似麻不勝繁 汝就

封土在今日 離情泣血言難悉 托母托子又托妻 憐民如  
子可欽恤 君不見殷國無道有三仁 明々白々日月新 至  
今鬼神泣壯烈 知我者誰在蒼旻

青柳の糸のミたれの世の中を

早く吹とて春風もかて

玉きはる命ハよしやたゆるとも

君いそしめよすめ国のため

文書原寸(折紙) 縦一五・五糎 横四四・四糎

五二 伊達伊予守ヨリ島津三郎公へ

攘夷ノ件

(包紙ツク書)

一島三郎様 伊伊予守

侍史中

緘

拙楮拝呈、炎暑之候候処、先以  
御闔門様愈御勝常被成御勤候段、毒熱之御障も不被為在

と奉恭賀候、此頃は弥御憤勵被竭御神略、脩攘御充実金  
湯之御計被奉依頼遙羨候、扱在京之時ハ不凶一夕御面晤  
如旧知己心緒御正天吐露、大愉快本意之至、実ニ意衷卓  
偉之確論高議、蒙御教示不堪感佩、敬服仕居候、何分御  
主意不致貫徹候段ハ無是非、拜眉之刻御密話申候通り、  
時運到来迄ハ致方無御座候、

朝威幕権共弥不被為振、外患内憂百出、真ニ不可救之勢  
かと奉存候、

神京関東之様子委敷ハ弁知不致候得共、弥疑念世界と察  
候、僕等在京中乍不及微力相尽候事も如泡沫恐惨仕候、  
於京何分

大樹公御差留相成候事も乍知、御主意御誠実とも不奉存  
候、亦風聞にてハ、於関東償金被相渡候由、是も為何御  
訳柄哉難解候、将又去月初旬より萩ニ而下関通航諸夷打  
払候由、定而御承知之通攘夷主張申立候末、

公武之御間、其他今日は変態も皆以彼藩釀成候事と申、  
親子共雄偉、藩士も振起故、当節こそハ

神武力相顯シ、得全勝候事と相察候処、此頃巷説にてハ、  
存外之話も有之、実説に候ハ、笑止之事、乍去彼藩ハ不  
及申

朝廷にも御悔悟可有御座哉被存上候、何れ亦不日魯・英  
・仏、萩へ渡来、決戦可有之、其時黑白判然と注目仕居  
申候、先ハ近日貴国之御模様、且当季伺旁如此候、尚近  
便又布奏と筆略、恐惶敬白、

六月望

伊伊予守

宗城

島三郎様

侍史中

二伸、時下御自愛奉専念候、乍末

皆々様へ宜奉希候、僕も先々首尾能三月廿五日御暇  
被下置、廿七日発足、四月十三日帰邑、瓦全罷在候  
条、乍憚御省念被成下度候、此悪布乍匱末封産ニ付  
進呈仕候、帯刀へも御序ニ可然、御關希上候、已上、

三伸、西国米右先年從

先薩摩様御患投候処、病人杯へ度々遣候、残少相成  
候間、渡来候ハ、少し奉懇望候、尚不遠又可申上  
候也、

文書原寸（折紙）縦一八・四種 包紙原寸 縦三二・二種

横四八・三種

横四一・六種

五三 江戸岩元太右衛門ヨリ喜入撰津へ 三通

南部弥八郎ノ探索書添

（包紙ウツ書）  
一撰津様

岩元太右衛門

（付巻）  
「亥六月十七日」

五九二ノ一

御坊主関長三より別紙之通為知申来候間相添、此段申上  
候、以上、

亥六月十七日

岩元太右衛門

撰津様

（本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第三六二号

文書ト同文ナリ

文書原寸 縦一三・八種 横二七・三種

五九二ノ二

其方儀、参府時節ニは無之、太儀被 思召候得共、無程  
御帰府ニも相成候ニ付而は、御相談之儀も有之候間、早  
々江戸表江参府候様被 仰出候、

六月十六日

加賀中納言(前田齊泰)

上杉弾正大弼(齊憲)

南部美濃守(利剛)

佐竹右京大夫(義秀)

丹羽左京大夫(長因)

津輕越中守(承昭)

南部遠江守(信順)

松平飛騨守(前田利彦)

溝口主膳正(直博)

右之御方々様何レも右御奉書之由、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第三六二号  
文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一五・四種 横三八・六種

五九二ノ三

昨朝四時頃、蒸気船ニ而

將軍家御帰府相成、祝砲二十余発有之、夫より浜御庭

江御上り相成申候、

一長州侯近臣之為ニ被刺殺候ニ付、極密ニ而表向病氣之

御届相成候段風聞仕候、

一同国打払之一件、亜・蘭兩國は於政府取扱、償ニも相

成候ハ、無事ニ為済可申含と被察、仏郎西は幸ニ事を

真田信濃守(幸教)

土井能登守(利伍)

堀 右京亮(之美)

南部美作守(信民)

起さんとするの勢ニ有之、英も同様之見込と相聞得候  
段承候旨、仙台書生多田平次郎物語申候、

一長州之攘夷は顯然之事ニ而不及論ニ、当

御国之儀、最初同様之風聞ニ外夷共承候処、当春以来  
左様ニ無之趣ニ相聞得申候間、一ト先罷越候而容子を  
相伺、土州之儀も攘夷説之聞え御座候ニ付、同様相探  
り、和戦は其時宜ニ応し、尔後

京師を相伺可申と、英夷定策仕居候由ニ付、素より御  
良策は可被為在奉存候得共、無御油断様被遊度、乍恐  
奉存候旨、右同人物語申候、

右之通承申候間、此段申上候、以上、

亥六月十七日 南部弥八郎

文書原寸 縦一六・六糎 包紙原寸 縦二八・三糎

横七五・四糎 横二〇・四糎

### 五三 小笠原左京大夫ヨリ外国船小倉領海通航

#### 報告

小倉より届書

去ル三日異国形之蒸気船老艘、下筋より罷登り長州六  
連島ト南風泊と之間ニ繫船仕候ニ付、早速問聞船差立  
相札候処、為乗組不申、印等も相見へ不申、何国之船  
共相分り不申候処、翌四日朝同所出帆、領海門司浦沖  
へ致碇入候ニ付、早速前同様致候処、英吉利国之旗相  
建申居候付、猶又船号来意等相糺可申候、乗組難相成  
委細之儀相分り不申候、横文字写可申ト数度乗廻り候  
へとも、本船にて印本字無之、端船ニ左之通印御座候、  
同日昼端舟一艘、異人共乗組、長州赤間関江乘  
渡、彼方よりも小船老艘ニ三四人乗組、兩度迄  
漕乗寄、間もなく乗帰り申候、猶又同日夕端舟  
一艘ニ異人六七人乗組、右同所へ乗渡暮ニ至本  
船へ引取申候、

一同十三日昼右同断老艘、下筋より罷登り領海門司浦沖  
へ入碇候ニ付、早速前同様取計候処、日本人三人乗組  
罷在、国旗舟号等相尋候処、英吉利舟ニ而、昨日長崎  
表致出帆、神奈川迄罷越馬老定乗組居候付、飼方ニ被

相雇、船号等ハ存不申段相答申候、尤船之鱧ニ左之通記御座候、

右船翌十三日朝同所出帆、上筋へ向乗行申候、

フ　△　○　△　△　△　△

一同日夕右同断一艘、上筋より乗下り、領海楠葉村枝郷大久保沖江致繫船候ニ付、早速前同様取計候処、英吉利船と相見へ申候、然ル処、端舟ニ夷人共乗組、赤間関へ乗渡り無程乗帰申候、翌十三日長藩之者一兩人小船ニ乗組、異舟江漕参り乗込、間もなく乗帰申候、同日より端舟老艘ニ異人三人乗組、大久保沖より致上陸、昨年夷人致埋葬候場所へ罷越、当四月七日致建方候印木之横文字ヲ油墨様之物ニ而致潤色、猶又巾式尺余長サ尅間余砂利敷仕候段、浜番之者申出候ニ付、早速村役人共罷越候処、最早仕舞、本船江引取申候、右船直ニ同所出帆、下筋へ向ケ乗行申候、

一昨十七日朝右同断一艘、下筋より罷登り、領海通舟仕候付、早速前同様取計候得共、船足早ク追付不申候、

尤和蘭国旗相建居候様相見申候、

右之通御座候、手当人数等穩便ニ用意致シ、浦々入念候様申付置候処、領海相変儀無御座候、此段申上候、已上、

六月十八日

小笠原左京大夫(忠幹)

右承知致候付申上候、已上、

中路(延年)権右衛門

内田仲之助(政風)

吉井幸輔(友忠)

冊子原寸 縦二八・八糎 横二〇・三糎 二枚

五五 南部弥八郎ノ報告書

英仏米蘭四国下之関砲撃計画等

於横浜英仏米蘭の四国集議之上、七八日以前申立候書翰之大意、左之通、



大君と我各国と条約を結へるものは、素より和親を以て根本といたし候上は、何れの海峡といえども、便利に依而は、通航すへきこと勿論之儀ニ候処、長州之大名松平大膳大夫(毛利親親)、商船官船の差別もなく、無謀に打払候は、実に譬ふるにもなき暴業にして、是則ち貴国之災害を招く所ニ御座候、我各国横浜に碇泊せる軍船合従して長州を討ち、下之関の通航および碇泊を十分自由にして尔来の害を除かんと欲する一策に決定仕候併日本政府ニおゐて敵敷松平大膳大夫を罰し、事理を明らかにし、後來の暴業を防堤保全する策あらんにはしはらく其報を待可申等之趣ニ御座候、

一右は各国同案ニ而差出、猶銘々の添書有之、いつれも大同小異之内、亜・英尤激烈ニ而、亜は日本政府ニ而大名を防ぐの権ありと兼而承候、然るに貴国何人によらず大君の条約を預り聞し管之処、大膳大夫其旨に違へるは、是如何之訳ニ候哉、政府ニ而同人をきひしく罰し、貧窮困苦せしめ、再び事を為すこと能はさらし

めて宜しかるへし等之趣ニ有之、英夷は

皇帝攘夷を詔し、大君之を遵奉し、大膳大夫江命して暴業を行はしむと承候、若然らんにはまつ長州を討て下之関をとり、我船舶の往来を自由安全ならしめ、大君の条約を捨て

帝府の条約を堅くするの外策なし、然る時には行ふに兵威を以てせざることを得ず、熟考之上報告を奉待候等之意ニ而、既に各国より兩度返答之催促有之候由、

右は翻訳方出役福沢論吉江今朝承候趣ニ御座候、尤文意は違候得共、翻訳書之大意は本文之通相違無之段申聞候、

一十日程以前、洋書調所教授方杉田玄端儀網乗物六丁見懸、中の人物いつれも惣髪ニ而京家之者と存候旨噂有之候処、雑説に中川宮様御家来之由風聞御座候、  
一三条中納言様はしめ攘夷説之公卿方、姉小路様一件に恐怖し退身有之候由、巷説相聞得申候、

一閣老小笠原侯退役ニ而、所司代御預、水野癡雲殿も元(忠徳)

筑後守同様御預相成候由ニ御座候、

〔付箋〕「所司代預と有之候得共、是ハ大坂御城代之方実説可成歟、」

右之通承申候間、此段申上候、以上、

亥六月十九日

南部弥八郎

冊子原寸 縦二八・二幅 横二〇・四幅 二枚

五五 江戸喜入撰津ヨリ在藩ノ家老一同へ

英艦襲来ノ件

爰許之形勢、此頃何となく穩成体ニ而、攘夷拒絶之沙汰も延々相成、横浜表之商売等も盛ニ有之、市中なとも先ツ静謐之姿ニ而、下々迄も頻ニ

將軍家御帰城を相願居候様子ニ候処、此節京都表御暇ニ而、大坂より蒸気船ニ而去ル十六日 御帰城相成、一統喜悦之趣ニ相聞得候、右 御帰城付、御相談之儀も有之候間、(前田齊藤)加州侯初外拾弍侯、早々參府被

仰出候段、別紙之通御坊主より為知申越、尤小笠原侯ニ(奉行)は於大坂御役御免、御城代(大河内信吉)松平伊豆守様江御預相成候由

定而償金被相渡候一条ニ候半歟、此上攘夷等之御所置、

如何御評決可相成や、猶致探索、形行追々申越候様可致候、然ニ於長州は既ニ兵端を開、外夷と戦争ニ及候由相

聞得、勿論小倉村上銀右衛門より大坂まで申越候注准状、御留守居差遣候付、大抵模様は相分候、就而は其許江ハ、

おのつから下之関出張唐物取締、又は右銀右衛門等より時々御注進申上、具ニ御承達之儀と存候、何分不容易事

件ニおよび、此始末如何落着可相決や、爰元横浜淀船異船之様子等為聞繕候処、長州戦争之風聞旁段々之雜説別紙

之通ニ而、其内英船御国許之容子為何、差越趣とも相見得、此儀は猶亦別段聞合もいたし置候処、雖ニ分かね候

へ共、右通之風説も有之、是は薩州ニは無之、矢張長州江相廻り候半、其趣意は蘭・仏江之義理立ニ申事之哉ニ

相聞得候趣之一説も有之、又外ニも手を付置候処、是以十か八九迄は薩州江は參聞敷哉ニ申説も有之由、異説区

々之事ニ而、いづれも是そと信用いたしかたく候へ共、右等之形行早々申上度、旁相混極々急飛脚差立、別紙聞

台書等相添、此段以御内用申越候条、

太守様

三郎様被達

御内聴候儀共、何分も御都合能可被取計候、且亦

御帰城等ニ付而之仰渡御書付等は、夫々表向申上越通ニ

候、猶此末之形行追々可申越候、以上、

亥六月十九日

喜入撰津(久徳)

島津大蔵殿(久徳)

小松帯刀殿(清徳)

川上但馬殿(久徳)

川上式部殿(久徳)

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第二卷第三六七号

文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一四・一極 横三六九・六極

五九六 江戸喜入撰津ヨリ小松帯刀へ

照国神社御建立、長州下ノ関戦争敗北

中川宮へ御太刀進上等ノ件

(包紙ウツ書)朱  
「癸亥六月十九日

江戸

島津大蔵殿

小松帯刀殿

川上但馬殿

喜入撰津

川上式部殿

「御内用」  
(付箋)

封

(端裏朱書)  
「癸亥六月十九日江戸より喜入」

一順聖公御社本南泉院柵之処江御造営被

仰出、且

照国大明神様と御頂戴被遊候由ニ而、

井上信濃守奉守護罷下候由、誠以恐悦此事御座候、乍

然、基

大守様御孝道之御精心より起り候御事ニ而、実奉感服

候、

二丸君にも嘸御満悦被為遊筈と奉存候、乍恐万古不朽之御美事、御互ニ難有奉存候、

一掃攘拒絶期限何とも延々相成、近頃為何音も無之候、

償金は弥差出候趣ニ御座候、右之事件は高崎猪太郎(五六)馱

下り、当地之形勢其外一橋公之件々、御懇ニ申上候様

申付置候間、疾致着、具ニ言上候半と存申候、故ニ致

筆略候、

一大樹公ニ茂、去十三日摂海より蒸氣船江 御乗舟、過

ル十六日 御着舟 御浜御庭江御上り、直様為被遊

御帰城由候、

一閣老小笠原侯、於浪花御役御免、京師所司代牧野侯、(忠徳)

願之通御役免被成、淀侯江右代為被仰付由、酒井雅楽(忠徳)

頭様加判之列上座被仰付候、太田侯之儀は、先達而依(實地)

願御役御免被成候由、条々御沙汰ニ相見得申候、

但小笠原侯大坂御城代江御預ヶと申説も御座候、然

共突留難申上候、

一土山駅・岡崎駅之義、於其御許風評有之、御不審之段(滋賀県)  
(愛知県)

致承知、爰許ニ而は初而承申候、何等之風評共訳不相分候得共、此地ニ而は一向不承不申候付、岩下等江も(方平)

承申候得共、皆共更承候儀無之段申出候、尤其許より

被遣候飛脚ニも為承候処、両駅共何も相替儀無之旨申

出候、其外道中筋何も相変儀無御座旨申出候、乍併承

り候儀も候ハ、早々申上候様可致候、

一長州江異船到来、大砲之打合両三度御座候由、爰許ニ

而はとりく之風説御座候所、小倉村上方より、永井(銀右衛門)

清左衛門江差遣候書状、同所御留主居より岩下江差遣

此書状にて実事明白相分り申候、其御地江は彼地江出(より)

はり横目等より細事為申上筈候得共、右状取束表通相

廻し申候、長州ニも勝利之姿ニ無之、大損と相見得申

候、日本之手初、見苦敷事ニ候、就而は則南部横港ニ(赤八郎)

もさし出候所、聞合之趣一々難致信用儀も御座候得共、

御国江廻舟之目論見も相見得、安心難成、書付取束表

通差遣申候間、御披見被下度候、

一白鳳丸より先度之急飛脚も大坂迄参り候由、是ハ此度

御取入之蒸氣船ニ而有之候哉、何等之義も爰許江は不相分候得共、多分御取入舟ニ而可有之とハ存候得共、御尋申上候、

一中川宮様江被進之御太刀拵方不致、急場誠以無申訳候、先便ニも申上候通、来月中是非出来上り候様催促可致候、石黒江細工申付候所、ケ様之細工ハ当人一世之内最早無之逆、諸人頼之細工ハ総而御断、至極念入彫り候由ニ而、心ニ不叶候得は、直ニ仕直し、別而念入候趣ニ御座候、最早六ヶ敷細工之処ハ相濟候付、是よりハ埒明可申と存申候、本之御白翰とふも御拵ニ差支候所有之、別段ニ繰込相替へ申候、翰成も近日見届申答御座候、御柄糸并御翰卷糸、同じく下地錦等之義、今便京都江申遣置申候、自出来上候ハ、御太刀姿写取差上可申候間、左様御納得可被給候、以御都合御聴ニ被入置被下度御座候、

一姉小路凶事之件々、岩下へ吉井より申越、御国許江は(親雄)本田等駆下り候由、就而は御用懸り之ものも有之、田

中ハ切腹と相聞得申候、御用掛り之者御取扱之模様ハ不相分候得共、帯刀如何舌娘候かと致推計候、細事不相分候付、岩下より委く申越候様相達、彼表江飛脚差立申候へ共、未相分り不申候、

一大樹公 還御、翌日諸大名拾三方江参府之期ニは不至候得共 御相談之儀有之、早々出府候様被仰出候、御名前表通申越候間致筆略候、此御方様不被為在候付、先御安心と乍憚奉存候、

右之趣貴答旁乍毎以乱筆申上候際、よろしく御推覽奉希候、以上、

六月十九日

喜入撰津

小松帯刀様

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第五一号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦 一六・三種 包紙原寸 縦二七・六種  
横三二・八種 横四〇・七種

五七 南部弥八郎ヨリ松木安右衛門へ

順聖公ノ遺徳紹述云々

(包紙ウツ書)

一松木安右衛門様

南部弥八郎

要用平安

奉拜見候、暑威酷烈之候益御安全御奉職珍重奉存候、種子島之書生殆と感心之至、御托之和英字書は、明日洋書局江罷出早々相整、来ル式日便如命取計差上可申候、京及関東之形勢追々申上候通ニ而、御書中砲声に誇り軽舩に座せしも、既に刺客の為ニ黄泉之客と化したり、他の攘夷家三条其外已ニ出奔すと風説す、況復ラングポールトなるゲツキヘール無謀之攘夷、五月十日以来頻ニ敗軍、御近方ナレハ当方よりも諸説明白なるへし、雷声遠く式百五十里之外ニいたり、江戸も本府も益平安大悦仕候、

一ゴロートヘール、去ル十六日祝砲とともに帰府、北国

大名急ニ相談の為參府との事、

御国は如何、

一経国之為ニ頻ニ勞苦建白被為在候由、何寄之御事、ひとへに遠くより拳を握り脚力の度毎ニ如何々々とおもふのミ、御書中の趣ニ而は最可楽難有奉存候、

一白金御一統御無事、細君妊娠今ニ六ヶ月可悦、具亦谷引越未定、芝辺は焼払ひなし、但両三日以前惡徒放火多し、

一野生建白ニ就而

(松木弘安)

先生をして藩離に禁固せしめし之事、扱々恐入候、右

之建白は廿九日便写御覽ニ入可申、併ながら

先生の為ニ計るは元のことく洋書ニ在て寓言を咄し候世を金馬門に避る、尤善とす、しかれとも方今の形勢、本府之諸事、君ならずて上下服することき説を為すを得ん、実ニ

国家の為ニ先生の困苦を忘れたり、之を謝するに死を以てすとも敢而辞する所にあらず、只願くは我

本国をして鴻業を興復し、洋外諸国ニ顕頌して

順聖公の遺徳を紹述せんことを是祈る、

米屋職  
村上卯一

一細君 本府江引越之命下り、河村宗胆と同立也、然るに只ならされは、分婉の時を過さんと、定而十一月頃ニは発途ならん乎、其趣申立、肥後并私より、河村よりも田畑江も申談候、今日早天ニ山之手ニ出、長州一件書立之上、好便蒼卒ニ執筆、縷々廿九日ニ申上候、誠惶不備、

六月十九日

柴洲

頓拜

大先生

侍史

文書原寸

縦 一六・六糎

包紙原寸

縦二八・七糎

横 二七・四糎

横三〇・六糎

五六 土持平八？報告書

長州台場ヨリ異船砲撃ノ件

(端裏朱書)

「甲子六月廿日」

下堀江町名頭

右は萩表異船之形行見聞いたし居候者之段承り、召呼致尋問候処、申出候は、鈴木甚左衛門と申商人同列ニ而、商道之儀ニ付当三月頃より下之関江差越、三浦屋源藏と申御国船問屋江滞宿いたし居候処、異船来着之次第、左之通、

一五月十日夕時分、異船老艘周防なだの方より参掛り、豊前田之浦之前江汐掛いたし候処、長州方より大砲船等ニ而乗出候得は、水先として長崎之者兩人乗込居候由ニ而、江戸より長崎之様廻船之処ニ、日暮罷成汐掛いたし候段再三申通シ候得とも、通船為致候儀不相成段強儀ニ申張り、夜六ツ過ニも候半、長州方大砲船より二発計り砲発いたし候処、商船之儀ニ而無抛も夫形本之通参帰候由、

一五月廿三日豊前江差越居、現事は不致見聞候得とも、同断周防なだの方より異商船老艘朝五ツ時分来着之処、

檀之浦台場より大砲五発計打掛候処、異船よりも空砲  
老発位打放候由、左候而バツテラ老艘二十人計乗込ミ  
漕出シ候様ニ付、尚又台場より打掛候処、本船を少々  
為痛、夫故か早速本船江乗帰リ西之方江通抜候由、尤  
異人老人は怪我いたしたる哉ニも風聞之由、

一 五月廿六日ニは中津江差越居、同日同所出立いたし、

中途すから砲声相聞得、陸地より同夜下之関江帰り、  
承候へば当朝五ツ時分より西之方より軍艦老艘、下之  
関 御本亭之前鍋之浜下江差付来着、長州方台場より  
大砲打掛候処、右軍艦よりも直様数発打掛、萩表之大  
砲船胴中を一ヶ所射通シ、其外陸地之方町家江も数十  
発打放ち、諸所痛損いたし居候由、左候而岡江罷居候  
式拾歳計なる下賤之者大手を射ぬかれ、乍去命ニは故  
障無御座由、龜山八幡下之番所階石なと微塵ニ罷成居  
候を現ニ見申たる由、

一 のおろし等揚げ周防なだの方江通抜候由、異船江も少  
々は玉当り為有之哉ニ候得とも、痛損之儀不相分由、

一 六月朔日三浦屋江毎之通罷居候処、軍艦老艘周防の方

より参り候由ニ而、遠見番所等よりのおろし等揚り候  
付、二階江上り遠見鏡ニ而見候処、弥異船ニ無相違候  
付、同所土間之内江隠れ居相視居候処、前田村并檀之  
浦八間屋上等より大砲打掛候得は、筒先を真向ニ堂々  
と参り、前田辺より陸涯を横ニ通抜け、台場より数発  
打候得とも、矢玉空を行キ船江は不当由、尤長州方蒸  
氣船老艘蒸氣式ケ、所有之、大砲船老艘・御取入之帆前異船老艘  
都合三艘、井崎之方江井ひ居候を右船と陸地と之間た  
ゝ乗込、右三艘を宛ニ数十発打掛、台場江も同断打掛  
候得は、大砲船并ニ外老艘も一所ニ打立、半時計之間  
黒煙之中江火花の光計りニ而、前後分明ならず、其内  
ニは小銃も矢張打候由ニ而、始終ちやん／＼と音も不  
絶其間唯々砲声計りニ而、外は何も声も臭も無之、暫  
時有之漸々何となく鎮まり候へば、帆柱等まばらニ相  
分候得は、尚又台場よりも間々大砲打候由、左候而の  
おろし等揚げ、十分異船之方勝利之勢ひニ候処、台場



より三四発打候、其内一発は当候様之音もいたし候へとも痛損之景気とも不相見得、異船よりも二発打、周防なたの様差越候由、

一右砲戦中、長州方蒸気船等は尻すさりいたし候を、異船より追詰候様之勢ひニ而砲戦いたし、異船之蒸気は始終一盃盛んニ立切居運動自由自在ニ至而迅速なる由、

一大砲船は庚申丸と申別而大振之船ニ候処、砲弾ニ而諸所大破いたし汐入相成、異船退散後無間も其假乗沈、乗込中過半は死亡ニ及候由、鍋崎と申所之前江帆柱計り相見得居候由、

一長州方蒸気船茂同断砲弾ニ而痛損、銅庫被打破れ乗沈、井崎と申所之前江同断、

一御用達白石正一郎所之倅と欵、是も台場掛之由ニ而、右退散後、帰掛三浦屋江立寄、今日之儀至極歎息いたし、八幡台場ニ而砲弾ニ当り候萩之御家来被射殺候を見候得は中々目も不被当と申候由、

一皆とも胸之辺余程いたく筋ニ相見得候由、尤水飲甚數、

一陣羽織・陣笠・立物等を着用相成居候由、

一鎗を持候者も有之、小銃を持候者はいづれも劍銃之由、(毛利定広)長州若殿様五月廿八日御入来、白石正一郎所江御泊相成、当日は調練御見分之由ニ而、最早白石所は御出立相成候跡ニ、右通異船来着之由、全体乗沈之蒸気船江御乗船之賦候由ニ而、御飾り等も有之候由、いまた御乗込ニは不相成内ニも候哉、白石倅咄ニ

上様御運強く仕合之段共噂仕候由、御乗込有無又は其間何方江被成御座候訳、しかと市中等ニ而は不相分候由、其節小倉江罷在候長崎武八郎咄候は、疾ニ御乗込相成居候処、漸く船より御上り之趣ニ承及候由、

一京都中山様御子様(忠光)も下之関江御滞在、白石所江始終被成御座、御同列ニ七人は毎も付添居、諸所江御出之節、鉄砲袖之白半天の様なるニ立揚げ、髪は惣髪、刀大小なり、右七人衆も同様之支度、外ニ中山様派之人數百四五拾人位、皆とも壯年之由ニ而、近辺寺江住居いたし居、異船来着之節は白八巻を後而結び候而、手

老本ツ、は成丈持居候由、

右通白石所御宿ニ候処、

若殿様御出後は、阿弥たし(寺)之方伊東何かし所江御宿ニ

而、朔日ニは同所より御出候由、中山様ニは自然前田

村之台場ニ被為居候半と三浦屋ニ而白石俣相咄候由、

一 中山様御儀朔日之晩、白石引受ニ而式拾人之家子ニ而

船式艘手当相成、俄ニ御上京相成候由、姉小路一条と

も申シ又は異船一条とも申候而、両様之所分兼候由、

一 若殿様ニは萩表之様御帰城之由ニ而、翌二日御出立、

騎馬陣羽織采配、

一 御行列廻騎馬も有之、いづれも陣羽織・立場等ニ而鎧

小袖又は胸当様なる者も着用有之、銘々鉄砲持候者も

有之、旗等差居候者も有之候由、惣御行列は千人計も

有之候半欵、

一 長府・清末(毛利元周)(毛利元純)之殿様も御出相成、跡より御帰城と之評判

も御座候由、

一 台場左之通、

竹崎之方

一 檀之浦一ヶ所

六ホント位以上之簡

十挺位

夫より少シ東之方

一 八間屋一ヶ所

十八ホント位之大砲

三挺

外三車台等

八挺位

一 八幡宮之下一ヶ所 大砲十挺位

一 前田村其外ニも台場式ヶ所位は有之由候得とも、此場

所は現ニは見不申候由、

一 いづれも近頃出来相成、俵などニ而土台築等相成居候

所も有之由、

一 異国船より之彈玉惣体、太く有之、

一 十八貫五百目掛之ボンベ玉一ツ、

但唐金地

斤ニして百十五斤六合式勺五才

右之空丸を打候由ニ而、木管等も其俣有之、

一 四貫目掛之鉄玉一ツ、

斤ニして式拾五斤

右式行鍋崎江欵有之候を御本亭之方江相運候を現在見申候由、

一右通ニ而、右之卯一外卷人は六月三日下之関出立いたし罷下候段、卯一より承届候、

一六月五日ニ異船式艘下之関江来着之次第、別紙之通下之関より長崎江注進有之候由ニ而申越候を、産物方江差出候付請取置申候、

一六月十一日ニも異船為参哉之風聞も御座候へとも、阿久根之治右衛門と申産物方御用聞、十一日之昼過下之関を出帆いたし候へとも、異船は参り居不申、全体其日は台場之大砲筒洗と欵申し、打方有之筈之段承居候処、出帆後大砲之音相聞得候由、自然夫を異船と打合など申候半、治右衛門より承届候、

一六月五日之戦ひニ、異人上陸候折、兩人并異船水先之栄吉と欵申者を為生捕哉之風聞も御座候得とも、現事は其通ニ而は無之向ニ御座候由、治右衛門など咄申候、一下之関中一統歎息いたし居、皆々も山手ニ相逃居、船

々も北船計少々相繋居候由候、

一其外小倉之村<sup>(兼右衛門)</sup>上方等より申上候通之事ニ而、痛損候者数多之様子ニ御座候、

一下之関中皆々も内実之儀は、始終咄等ニ不申聞向ニ而、一体秘し居候向ニ御座候由、

右通現事之形行承得候付、不綴なから荒々書付置候事、

六月廿日

文書原寸 縦一六・七種 横五八〇・八種

五九 喜入撰津ヨリ小松帯刀へ

將軍帰府及英艦襲来ノ風説

<sup>(端裏朱書)</sup>  
「癸亥六月廿日 喜入江戸より」

土山駅之条

<sup>(慶喜)</sup>  
一橋公御帰府之節、土山駅ニ而明ケ方大目付岡部信濃<sup>(長常)</sup>守ヲ切害致積ニ而四五人乱入候処、岡部は直ニ逃去り

候処、用人佐野草平と申者逃去候ヲ、後より背より尻へ懸八寸程切込、深サ五部程ニ而、療治いたし、此節平愈、岡部は夫より忍びニ而

一橋公より三四日前帰着仕候、右は如何之意趣候哉、未相分不申、旗本二男朝倉幸之助と申ものニ而、先達而京都にて召捕ニ相成、当月十四五日頃、当府江参り候よし、外ニ同類四五人御座候よしニ候、岡崎駅之儀は承不申候、併

大樹公浪花より俄ニ蒸気船より御帰府相成候儀、何欵東海道中筋御差障之場所所有之筋共ニ而有之間敷と推計仕候、

一右岡部之一条は、先達(弥八郎)南部聞合ニ相見得候得共、何方と申事も不相分、勿論突留たる儀ニ而も無之候処、前条之趣ニ而は、形も無事ニ而は無之と相見得申候、大樹公御帰府ニ付、御差障之場所相分候ハ、早速申越候様可致候、別紙且此表之件々、昨日鳥渡承出候付此飛脚昨日差立申筈御座候得共留置、右之件尚亦聞糺

今日飛脚差立申候、別封之通

二九君 御上京之御決定ニ共相成候都合共候ハ、承知仕度、些相心得度儀も御座候、

御上京之御召と申事ハ正説等敷相聞得申候、此等之趣承得候假書綴申越候、已上、

六月廿日

喜入撰津

小松帯刀殿

二白、英国舟御国許へ参り可申との風舌も候へ共、

猶亦手を付候所、薩国江は可参様実ニ無之と申事も

御座候、

一長州江差越候異舟江横浜より水先乗込居候所、右之者申候ハ、長州にて惣髪之もの小舟より参り、舟將へ何欵洋語を以致談判候所、砲器を治、昨日・一昨日之間、横港江致着、右之趣申出候由御座候、荒まし之事候間、相分り次第可申越候、已上、

(本文書ハ「鹿児島県史料 忠義公史料」第三卷第五二号文書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一六・三種 横一七九・八種

喜入撰津ヨリ小松帯刀へ

久光公御召上京ノ風説

二丸君御義、以

勅諭御召可有之と昨今之風説ニ御座候、

(慶喜) 一橋公・越前候ニ茂同様御召可有之との風舌ニ御座候、

此段不取敢如是御座候、以上、

六月廿日

喜入撰津

小松帯刀殿

文書原寸 縦一六・三種 横四五種

近衛忠房卿ヨリ島津三郎殿へ

短刀贈与ノ謝状

(包紙ウツ書) 一島津三郎殿

忠房

几下

(朱) 緘

(封紙ウツ書) 一島津三郎殿 忠房

几下

緘

(墨引)

先達而良節下国之砌、御所望申入候短刀、其後早速ニ被下、深々忝奉存候、不打置一覽仕候処、余程古刀ニ而寸法も好ム所ニ而、別而く喜悦之事ニ而候、其上拵料迄付被下、別而く喜悦千万ニ存候、最早拵等好候テ申付置候事ニ候、厚々御礼申入度候、其砌ハ外ニ何寄之御品も被下深忝存候、扱此燈籠其篋薄、乍如何暑氣の時分御慰ニもと入覧候、先は右而已如斯候也、

六月廿二日認

(本文書ハ「鹿兒島県史料 忠義公史料」第三卷第五三号文 書ト同文ナリ)

文書原寸 縦一八・二種 包紙原寸 縦 三一種

横五三・四種

横四二・四種